

超女性主義

Women rule the World

Kyōji

rule.1

演劇部の部室から、ひとりの女の子が飛び出してきた。彼女は目に涙をためながら、春風のように廊下を駆け抜けていく。彼女の口元には、赤い液体がついていた。

親友に置き去りにされた新入生の辻玲子は、演劇部の面々に囲まれて立ち尽くすしかなかった。目の前で起きた異常ともいえる出来事に、逃げ出すという常識すら奪われてしまったのだ。

「逃げられちゃったわね」演劇部副部長の中村梨紗がのほほんと言った。まるでどうでもいいかのように。

「奈央、追え」威厳たつぷりに命令するのは、部長の倉敷奈美子だ。言いながら払い上げた美しい黒髪を、玲子は目で追った。

「了解です」そう言って台風のように飛び出していったのは、部員の横山奈央だ。運動部よろしくのスピードで駆けていったから、逃げ出した親友が捕まるのも時間の問題だろう。

「さて」奈美子が玲子へ向き直り、自分の髪を四本の指で梳いた。流れる黒髪の波は、さらさらを超越して、いわく形容し難い美しさを醸し出す。

「君はどうする？」奈美子はきいた。

「べつにどうもしませんけど」玲子は本心から答えた。親友が逃げ出したのは納得だけど、それは自分が逃げ出す理由にはならなかった。

「じゃあ食べなさい」

玲子の前に赤い文字の書かれた紙切れを差し出される。受け取ってじっと眺めた。

3

ひとつの数字が書かれた紙切れは、どうやら人間が食べても有害ではない素材であるようだが、そもそも食べる意味が玲子にはわからない。

「ところで、どうしてこれを食べないといけないんですか？」玲子は疑問をきいた。

美奈子は自分の机の椅子に腰を下ろす。この部屋にまったくそぐわない、まるで校長室か社長室に置かれるような椅子だ。肘掛があるだけでも、高校生には特別だろう。

「それが私との契約のかたち。入部届も提出してもらおうけど、それとはべつに個人的忠誠の誓いとして、それを食べてもらう」

「それはわかりました。でも食べる理由にはならないと思うんですけど」

「理由は、私がこの形式を愛しているから。それで充分だし、私に充分ならみんなにとっても充分なの」

美奈子の主張は玲子にとってとても理解できるものではなかったが、自分に理解できないことが世の中に溢れていることは理解していた。

「そうですか」玲子は納得の意思を表明して、美奈子の前に立ち、紙切れを小さく折りたたんで口の中に入れた。唾をたつぷり含ませて、舌で舐めころがしながら徐々に分解していく。散り散りになっていく紙切れを舌で追っていくのは楽しく思えた。といっても、この一切れよりも小さな楽しさだけだ。

すっかり飲み込んで、口を開いてなくなったことを証明する。美奈子は口の中を覗き込んでチェックした。近づいたとき、美奈子の髪から爽快な風が香ってくるのを玲子は感じた。無意

識に玲子は美奈子の髪に指を入れようとして、その手を素早く掴まれた。

「これで契約成立」美奈子は玲子の手を優しく握りながら、不敵にほほ笑んだ。

「ようこそ演劇部へ」

rule.2

春になると、小学生は浮かれて教室内をころころころがりながら新たな友達を探す。中学生は部活で青春を消費し、受験勉強でやる気を消費する。

では高校生はどうか。

恋だ。

そう主張してはばからないのは、玲子の親友である石田裕子だ。入学式を終えて教室で担任の到着を待っている間、裕子は「恋！恋！」と連呼した。似た奇声をあげる人種が競馬場にいるかもしれない。

「高校生なんだから、恋のひとつでもしないとね！」これで十五回目だ。玲子は裕子の口から「恋」という言葉が飛び出す回数を数えていた。彼女にはなんでも数えてしまう癖がある。

「そうね」

同意したつもりなのに、裕子はひどく嫌な顔をした。

「なんでそんなにやる気ないの？」机をばんばんとたたく姿は何かに似ている。玲子は動物園でチンパンジーにたたかれたときのことを思い出した。

「やる気はないよ。なんのやる気もない」

「もう高校生なんだから、少しは何かに興味を持ったらどうなの？」

担任が教室に入ってきた。裕子は自分の席に戻る直前、玲子に言った。

「いつまでも子供のままじゃいけないんだからね」

ふたりが入学した女子高は坂の上にあった。小学校から大学まで一貫して生徒を預かる市内でも規模の大きな学校だ。小学校からそこに通っているから、高校生にあがっても見なれた景色を通りすぎながら登校する習慣はかわらなかった。もう十年も同じところに毎日通っていることになる。

十年。長い時間だ。小学校でクラブ活動をはじめた子供が、成人して煙草を吸えるようになるくらい長い。

そんなに長い時間、毎日毎日毎日同じところに来る。玲子はたまにそれを不思議に思うことがあった。

そんなささいな疑問を玲子は普段からよく抱く。疑問の粒は玲子のなかに蓄積して、スケトウダラのたまごのように身を寄せ合い、心のなかにどっしり腰を据えてどんどん体積を増していく。

でも玲子はそんなたまごのかたまりを全然気にしなかった。

それよりももっと大きな疑問がたまごのとなりにあるからだ。

踏んだら潰れるたまごと違い、大きな疑問はまるでボーリングの球みたいに固くて、玲子がかんばってこじ開けようとしても、決して殻が破れない。玲子の人生最大の謎だ。

その謎は、いつでも玲子のとなりにいる。

裕子とは小学校一年生のときからの友達だ。玲子は自分からアプローチした覚えがない。気づいたら彼女が自分をつけまわるようになったと認識している。自分から「私たちは友達だよ」と

明言した記憶もない。気づいたら彼女が「あなたは私の親友！」と勝手に自分の属性を塗り変えたのだ。べつに迷惑ではないからそのまま放っておいたら今に至った。

玲子は自分に人を惹きつける要素があることに納得がいかなかったから、一度裕子にきいたことがある。

「なんで私と一緒にいたいなの？」

すると裕子は笑顔を貼りつけてこう言った。

「だって玲子、面白いんだもん」

玲子はやっぱり理解できなかった。

むかしから玲子は何にも興味を示さない子だった。

小さいころは公園の遊具で遊ぶ意味がわからなかった。滑り台で滑って何が楽しいのか。砂場で山を組み立てて何がうれしいのか。

小学校にあがると、まわりの子たちの服装が変化した。みんな似たような服を着るようになった。同時に持ち物もみんな同じカバンや靴や筆箱を使うようになった。玲子は母親に渡されたものをずっと使っていたから、次第に周囲と違いが現れるようになった。小学三年生のとき、裕子に「玲子ちゃんの服ってださい」と言われたことがある。よく聞き取れず、「玲子ちゃんの服ください」と聞こえたので、その場で自分の服を脱いで渡したら、まわりの子たちが悲鳴をあげたのを覚えている。

中学校にあがると、裕子がしきりに部活動をはじめようと誘うので、玲子はふたつ返事で承諾した。なんの部活動をするかも教えられないまま入部したのは、少林寺拳法部だった。新入部員をいたぶることに学校生活の華を感じている先輩たちにしごかれて、玲子は練習に励んでいった。実際には励む気持ちはまったくなく、ただただ言われるままに練習を重ねていっただけだ。誘った裕子は練習の厳しさに早々に限界を感じたのか、一年の春のうちに辞めてしまった。「一緒にやめよう」と誘われたわけではなかったのに、玲子は三年間少林寺拳法を続けた。おかげで筋肉がついて、胸が痩せて、尻が締まった。

裕子は玲子の家にもよく遊びに来た。

玲子の家は学校からずっと南のほうに行った駅から五分ほどの場所に位置する分譲マンションの三階である。裕子はその近所に住んでいたため、小学校のころから遅くまで玲子の家に居座り、夕食もよく一緒に食べていた。玲子の母親は裕子を歓迎し、「裕子ちゃんがいると、食事の席が明るくなるわ」と喜んだ。玲子は本当かどうか疑問に思ったので、裕子がいるときといないときの照明の明度を確かめてみたけど、何も違いが見られなかった。母親にきくと、「あんたも裕子ちゃんの明るさを三ワットでいいから分けてもらいなさい」と言われた。そのときは意味がわからなかった。

一緒に部屋にいるとき、裕子はずっとしゃべり続けた。あまりにしゃべりすぎるので、玲子は裕子の言うことをいちいち聞こうとしなくなった。「うん」「そうね」と相槌を時たま入れるだけで、裕子が満足することを学習してからは、話をまったく聞いていない。

裕子は熱心だけど、飽きっぽい子だった。今でもそうである。

退屈になるとふらふらと蝶のようにどこかへ行ってしまう。そのときたいい玲子の腕を引っ張っていく。玲子は抵抗する理由を持たないから、どこでも一緒に連れまわされる。おかげで自分ひとりでは絶対行かない場所にもあちこち行くことになった。玲子は引っ張られて連れまわされたことを、感謝もしていなければ迷惑もしていない。なんとも思っていない。

裕子は玲子を連れまわす。玲子はなんとも思わない。

それがふたりの友達のかたちだった。

rule.3

「でね、私も玲子もそろそろ次のステップを踏むべきなのよ」弁当のふたについての米粒を玲子の口に押し込みながら、裕子は言った。

玲子は始業式の日には弁当を持って来る裕子を変だと思った。始業式は午前中で終わるので、午後は学校にいなくてもよいはずだ。

「次って？」玲子はきいた。

「だから！」鼻の穴を膨らませながら裕子は興奮する。「恋よ、恋愛！」

「だから、そんな気ない」玲子はそっけなく言った。

「あんたがなくても私はあるの。だからあんたもやるの」

「何を？」

「彼氏をつくんのよ！」

「べつにいらない」

「ダメよ」きっぱりと裕子は言った。おかずのミートボールを玲子の口に押し込んで反論を封じながら言った。「一緒にやるの。これが私たちのルールよ」

そんなルールがあることを玲子ははじめて知った。

HRの時間に、担任から部活動申請用紙が配られた。希望する部活動名を書いて提出するように言うと、担任は教室から出ていった。

教室は急に騒がしくなった。それぞれに仲間内でどの部活にしようか相談している。ひとりで机に向かい、もう記入している生徒もいれば、ぐしゃぐしゃにしてカバンに放り込む生徒もいた。

「で、どれにする？」裕子は玲子の机にぼんと手をついてきいた。「もう少林寺はいいんでしょ？」

「先輩には来いって言われてるけど」

「じゃあ無視しなさい」当然のように言う裕子。

「わかった」当然のように答える玲子。

「だいたい少林寺を三年も続けるなんて信じられない。よくできたわね」

「裕子が誘ったんじゃない」

「あのときは興味があったの。あの黄色いぴっちりしたスーツがかっこいいと思ってたから。よく考えたらあれ何よ。単なるコスプレじゃない。戦う格好じゃないわよ」

「少林寺はそんなの着ないけど」

「なんでもいいの！ なんてあんたもやめなかったのよ」

「べつにやめる理由がなかったから」

「ああ、そうですね。私がいなくても立派にこなしてたもんね」

玲子は不機嫌な顔をする裕子を不思議に思った。

「とりあえず、いろいろ見てまわらないとね。というわけで今から見学に行くわよ」裕子は玲子の腕をとり、強引に立たせてそのまま外へと連れ出した。

体育館で行われる新入生向けの部活動紹介にふたりは参加した。任意参加なので、一年生全員は揃っていないが、それでも過半数の生徒がパイプ椅子に座ってステージの上級生に視線を送っていた。

ふたりは空いている席に腰を下ろし、ステージを見た。ちょうど運動系クラブの紹介が始まるところだった。

テニス部が無謀にも壇上でラリーをしたり、ダンス部がくるくると華麗な舞いを披露したり、バトントワリング部が器用に棒を使って演舞したりしているのを眺めていると、裕子が玲子の耳元でささやいた。

「運動系はボツ。文化系に焦点を絞るわよ」

スポーツらしいじつに直球な紹介に、場内の一年生たちはすべての部に拍手で応えていた。ふたりもおおざなりにいちいち拍手した。

続いて文化系クラブの紹介が始まった。

トップバッターはカメラ部で、壇上に部長らしき生徒が出てきてスピーチした。

「私たちカメラ部は、希少な人材を探しています。カメラに興味のある人は来ないでください。高性能カメラのついた携帯を持っている人はぜひカメラ部へ」

カメラ部なのにカメラに興味のない人を門前払いするとは何事か、と場内の一年生はざわざわした。ふたりも怪訝な面持ちだった。

「どんなカメラ部よ」裕子が感想を言った。玲子も同じことを考えていた。

その後、落語研究会が一席披露したり、クッキング部の配るクッキーを食べて抹茶部の配る抹茶を飲みながらオーケストラ部の演奏を聞いたりしていると、演劇部が壇上に現れた。部長らしき生徒がスピーチした。離れていてもわかるほど美しい黒髪をたたえた生徒だった。

「私たちは演劇部だ。演劇に興味のある者、来なくてよい。男が嫌いな者、私のもとに集え。以上」

一応拍手が起こったが、戸惑いの空気が場内に漂っていた。ふたりも不思議に思った。

「なんなの、文化系は異常者の集まり？」裕子の意見に玲子も賛成だった。

「これで文化系クラブの紹介を終わります。ありがとうございます」司会のアナウンスが聞こえたあと、一年生はばらばらと席を立ち始めて体育館から出ていった。中には座ったまま、紹介スピーチについて意見を出し合うグループもあった。

「変なのばっか。文化系はやめね」「カメラ興味あるのになあ。お父さんの高いやつよく持ち出すんだ」「カメラ部の部長さん、かわいかったあ」「抹茶おいしかったね」「クッキーもいけたよ」「演劇部の部長の人さ、すごいきれいじゃなかった？」「そう、なんか男らしい」「でも男が嫌いみたいね」「え、じゃああっち系？」「女子高だから、そういう人もいるんじゃない？」「私テニスがいい」「やっぱ身体動かさないと」「なんかおばちゃんみたい」

裕子が席を立ったので、玲子も立ちあがって壇上のほうに目を向けた。カメラ部の部長と演劇部の部長が話しているのが見えた。両者の対比は際立っていた。

カメラ部部長は、栗色の巻き毛をたっぷり濡えたお姫様のような印象だ。遠目からでも美人だと断定できる。高校生というより女子大生のような。

演劇部部長は、いかにも人のうえに立つことを許された人間という印象だ。まっすぐな黒髪は美しく流れ、黒縁眼鏡をかけている。まるで理想的な生徒会長みたいだ。実際の生徒会長は司会をしていた生徒だが、演劇部部長のほうが容姿は正しい。

「あの変態部長たち、お互いに仲良しみたいね」裕子の視線はふたりの部長に釘づけになっている。

「そうみたい」

「どっちがいい？」

「え？」玲子は質問の意味がわからなかった。裕子の顔を見ると、見覚えのある笑みが広がっている。いつもの、何か面白いものを見つけたときの笑みだ。

「だから、どっちに入る？」

「あの二択なの？」

「一番面白そうじゃない」

「でも変態とかひどいこと言ってたじゃない」

「玲子に一句授けてあげる」そう言って、裕子は即興の句を詠みあげた。

高校は 変態いること 男あり ——裕子

「本当？」玲子はきいた。

「本当よ。本に書いてあったもん」

裕子がどんな本を読んだのか想像してみた。おそらく図書館にはないだろう。コンビニにもない。すべての本屋に置かれているともかぎらない。ひよっとすると自分で上梓したのかもしれない。

「で、どっちの変態がいい？」

「べつにどっちでも」

「じゃあ決まりね」

何も決まっていな気がしたが、すたすと満足そうに外へと歩く裕子に玲子はついていった。

rule.4

部室棟はまるでプレハブみたいな建物だった。薄っぺらの平らな造りで、一階にも二階にもドアが多すぎるほど並んでいる。さぞそれぞれの部屋は狭いだろうと玲子は予想した。

カメラ部の部室を探していたが、一階にプレートはなかった。うえの階なのだろう。

表に備えつけられた階段を小気味よい音を鳴らしながら登っていく裕子のうしろ姿はどこか不安定で、うっかり足を滑らせて落ちてくるのではないかと玲子は心配したが、彼女は大丈夫だった。

二階のカンカンと音の鳴る廊下を歩いていくが、カメラ部の部室は見つからない。しかし文化系クラブの部室棟はここだけだ。

「あ、もしかしたら特別待遇なのかも」裕子は閃いたように言った。「ほら、暗室とかいるから校舎のほうにあるんだよ、きっと」

玲子はその考えにとっくに思い当たっていたが、裕子にきかれなかったので言わずにここまでついてきていた。

「校舎に戻ろう」

裕子は玲子の手を掴んで来た道に戻る。階段をおりようとしたときだった。

「おい」

うしろから声をかけられて、ふたりは振り向いた。そこには見事な黒髪を風になびかせている演劇部部長が立っていた。

「新入生か？」部長はきいた。

「そうですよ」裕子が答えた。彼女は初対面でも、相手が誰でも物怖じしない性格だ。

「暗室がどうこう言っていたな。カメラ部希望か？」

「ええ、探しているんです」

「携帯は持ってるのか？」

「はい、私は。でも」裕子が玲子のほうに視線を移す。「この子は持ってなくて。ふたり一緒の部がいいんです」

もちろん玲子は携帯なんて持ってない。ほしいと思ったことがないどころか、親に何かをねだったことすらないのだ。

「そうか。まあふたり一緒がいいなら仕方ないな。なんとかなるだろう。ところでカメラ部はここにはいない。やつらは南校舎の四階に本拠地を構えている」

「そうなんですか。ご親切にありがとうございます」

裕子は丁寧に礼を言って頭をさげた。玲子も一緒に頭をさげる。何も興味はないが、常識まで欠落している玲子ではない。むしろかなりまともなほうだと自分では思っている。

演劇部部長は部室に入っていった。玲子は見えなくなる寸前まで黒髪を目で追っていた。どうして見てしまうのか、自分でもよくわからない。

「南校舎だって。ほら行こ」裕子は玲子の腕をとって階段をおりようとした。危ないから離れたほうがいと忠告しようと思ったが、べつにいいかと、ふたりでくつついたまま階段をおりた。

ふたりはくっついたまま南校舎四階にやってきた。この階には教室として使用されている部屋はなく、会議室や資料室などが並ぶところである。そのため、各部屋は生徒の教室とは違いたいへん掃除が行き届いており、じつにきれいに保たれていた。

普通この階に用事がある生徒は委員会や生徒会の役員だけなので、教室の廊下とは気配がまるで違う。ひっそりとしていて冷たい空気で満たされていた。今は廊下に誰もいない。

「どこだろう、カメラ部」裕子が少し不安そうな声を出した。

廊下中央にある階段から両側に部屋のドアがずらりと続いている。それぞれの方向に教室が四つはあるだろう、長い廊下だった。この階には共用の手洗い場もない。本来それがあるスペースは広場になっており、ふたり掛けのソファが二脚と小さな机が置いてある。

ふたりは二手にわかれてカメラ部のプレートを探した。玲子が向かって右手、裕子が左手へと歩いていく。

ふたりとも突き当たりまで歩いたが、どちらも発見の声をあげなかった。

中央で合流して、裕子が口を開いた。

「どうしてないんだろう」

「さあ」

「もしかして演劇部部長に騙されたのかな」

「どうしてそんなことするの？」

「きっと意地悪なのよ。絶対そう」決めつけにもほどがあるだろうが、裕子は悔しそうに地団太を踏んだ。すっかり騙されたと思込んでいるようだ。「いかにも人をおちよくって喜びそうな顔してたじゃない」

鋭い洞察力に玲子は感心したが、本当にそんな顔をしていたかどうかは覚えていない。髪しか見ていなかったからだ。

「そうかなあ」玲子は呟くように言った。

「えっどうしたの」裕子は意外だった。「あの人そんなに気になった？」

玲子のささいな変化は裕子にしかわからない。予想していた反応と違ったので驚いたのだ。

「気にはならないけど、髪の毛が印象的だったから」

「ああ、そうだね。すごいきれいなストレートだったもんね」

裕子もそう思った。キューティクルが大理石のようにすべすべで、黒い光でできているのではと思うほどに美しい黒髪だったのだ。印象に残らない人間はまずいないだろう。

「玲子、ああいう髪の毛に憧れるの？」

玲子は人に言われるまで髪を切りに行かない。まるで散髪嫌いな男の子のようだが、彼女は散髪が嫌いなわけではなく、単に切りに行くことを思い当たらないだけだ。だから裕子はいつも玲子の髪に気を配り、頃合いを見計らって散髪に連れていく。一緒に行くのは、玲子が美容師に希望のスタイルを言えないからだ。裕子にとっては、美容師と一緒に玲子のヘアスタイルを決めるのが、ささやかな楽しみとなっている。

「いやべつに」思ったとおりの返答に、裕子は安心した。なぜ心が落ち着くのか、自分でもよく

わからない。

「もう帰ろっか」諦めてふたりで階段をおりていくと、こちらにあがってくる人物がいた。見たことのない生徒だったが、雰囲気から同学年ではないことを裕子は察知した。

「あら」あがってきた女生徒はふたりの姿を認めて階段のなかほどで立ち止った。携帯を操作しながらあがってきていたので、目の前にいるふたりに直前まで気づかなかったようだ。

「あの」裕子は話しかけてみた。「カメラ部の方ですか？」

「入部希望なの？」携帯をスカートのポケットにしまい、女生徒はふたりをじっと見た。「体育館の部長のスピーチはきいた？」

「はい聞きました」裕子は答えた。「カメラ部なのにカメラが好きなお断りっていうのが面白くて」

「ふふ、そう」女生徒はふたたび携帯を取り出してすばやく操作しはじめた。「今部長を呼ぶわ。そこに座ってちょっと待っててね」

ふたりは勧められたソファに座って一息ついた。

「やっぱりあったのね。演劇部部長さんに悪いこと言っちゃった」裕子は反省するように小声で言った。玲子の反応はなし。

「もうすぐ来るから」女生徒は携帯をしまって、向かいのソファに座った。「ふたりとも中学から持ちあがり？」

「はい。小学校からずっとです」

「そうなの。私は高校からだけど、変な学校よね、ここ」

「そうなんですか？」

「授業とかは普通だけど、部活がねえ」女生徒は困ったように足を組んで頬杖をついた。「特に文化系は」

「くせがあるのが多そうですね」

「そうなの。文化系クラブって歴史が浅いみたいで、どれも最近できたものばかりだから、伝統とかそういうのがなくてみんな自由にやってるみたいね。だからかしら」

「カメラ部もそうなんですか？」

「さあ。私カメラ部じゃないし」

「えっ？」

裕子は目を見開いて驚いた。玲子は黙ったまま。もしかしたら話を聞いていなかったかもしれない。

「じゃあ、どうして」あなたは私たちに対応しているのですか、と継ごうとしたら、

「いや、ちょっと部長さんに頼まれたものだから。誰か四階にいるか見てきてくれって、あっ」ふいに女生徒は階段のほうに目を向けた。「部長さん来たみたい」

女生徒は立ちあがってふたりに近づき、裕子の耳元でささやいた。

「もしね、カメラ部に入ることになったらね、そのこと誰にも言っちゃダメよ。たぶん部長さんにも釘を刺されると思うけど」

不可解な言葉を残して女生徒が階段を下りていくと、入れ違いにカメラ部部長がやってきた。

ふたりは部長の姿を認めてすばやく立ちあがって向き直った。

階段をあがってくるその様子は、まるでパリコレモデルのウォーキングを見ているようだ。身のこなしひとつひとつに品があり、清楚である。

体育館よりも間近で見ると、さらにその容姿の端麗さが際立つようだ。小顔でモデル体型。髪は高飛車に見えない程度にお姫様スタイルに整えられている。顔のパーツはどれも最高級品だ。配置も美しい。メイクのセンスも見惚れるほどだ。とても高校生には見えない。着るべき服を着れば、そのカリスマ性をいかに発揮できるだろう。

裕子はたっぷり五秒は部長を見つめていただろう。玲子も部長を見ているが、何を考えているやら読み取れない。

「こんにちは」涼やかな声で部長は言った。

「は、はいこんにちは。あの今日は」裕子は舞いあがって話すことができない。他人の美しさにここまで惑わされるのははじめてだった。

「入部希望ね。どうぞおかけになって」

「はい、あの失礼します」

裕子は勧められるままに座ったが、隣の玲子はなぜか立ったままだった。

「ちょっと、座りなさいよ！」小声で裕子は注意した。思わずきつい口調になってしまった。

「あの」玲子が口を開いた。「もしかしてここが部室ですか？」

「いいえ。カメラ部は部室を持ちません。まあそれも含めてお話ししましょう」

裕子は玲子の袖を引っ張って無理やり座らせた。大人しくすとんと腰をおろす。

「さて、自己紹介からにしましょうね。私は近松千鶴といいます。カメラ部部長です」

部長の千鶴は、どうぞと言わんばかりにふたりに手を差し出した。

「一年の石田裕子です」

「同じく一年の辻玲子です」

よろしく願います、と言ってふたり同時に礼をした。

「はいよろしくね」ふたりが顔をあげると、千鶴の笑みがそこにあった。柔らかくて、おっとりとした表情。

「あの」おずおずといった感じで裕子はきいた。「どうして部室がないんですか」

「必要ないからよ」千鶴は即答した。「さっき体育館にはいたかしら？」

「はい。スピーチを聞きました」

「うちはカメラ部という名前だけど、高いカメラを使って風景を撮ったりとかそういう活動をするクラブじゃないの。使うのは携帯のカメラだから。だから機材とか暗室とか資材棚とかいらないの」

「えっと、じゃあ携帯カメラで何をするクラブなんですか」

「その説明をする前に聞かせて。あなたたち、携帯は持ってる？」

「あ、その」裕子は困って玲子の顔を見た。玲子は無表情に千鶴の膝のあたりに視線を落としている。

「あら、持っていないの？」

「あの、私は持ってるんですけど、玲子は」

「持ってません」玲子ははっきりと言った。まったく申し訳なさそうに言うものだから、裕子は

はらはらした。

「そうなの。残念ね。一応うちの部では携帯の所持が必須条件だから。でもあなたは大丈夫ね。ちょっと見せてもらってもいいかしら？」

「あ、はい」裕子は携帯を取り出して千鶴に手渡した。

「へえ、きれいね」

不思議な話だが、カメラの性能のことを言っているのが裕子にはなんとなくわかった。先日機種変更したばかりの最新機種だ。見た目のかawaiiさで選んだのだが、高画質カメラがついていることも知っていた。

「うん。これなら充分仕事ができそうね」千鶴は裕子に携帯を返して足を組んだ。「あなたは興味ある？ 私たちの活動に」

裕子はどう答えようか迷った。玲子の表情をうかがう。長めのまつ毛がちよつとしたを向いているのに気づいて、玲子の心情を理解した。

「あの、私たち一緒の部活がいいんです。この子が無理みたいですから、もう少し考えさせてもらってもいいですか？」

「そうなの、仲良しね。べつに急がなくてもいいわよ。部活申請期間は四月いっぱいだから、ゆっくり考えるといいわ」

千鶴は立ちあがった。つられてふたりもきびきびと腰を上げる。「お時間とらせてすみません」と裕子が謝ると、「そんなことないわよ」と千鶴が笑った。

「もし気が向いたら連絡をちょうだいね。そこらにポスターが貼ってあって連絡先が書いてあるから」千鶴はそう言って階段をおりようとしてふいに止まった。

「そういえば」千鶴は振り返ってふたりにきいた。「どうやってここに？ 場所知らなかったんでしょ」

「あ、ええと、部活棟に行っただんですけど、カメラ部がなかったの。そこでたまたま演劇部の人が教えてくれて」

千鶴の表情が微妙に変化した。ぴくぴくと片眉が動いたように見えた。

「そうなの。ポスターを見て連絡してくださいって言うのを忘れてたから新入生が困ってるかもって思ってたんだけど、あなたたちは大丈夫だったみたいね」千鶴は笑顔になった。先ほどの笑顔とは少し種類が異なるように裕子には思えた。「運がいいわ」

千鶴は階段をおりていった。

「あ」姿が見えなくなってから裕子は気づいた。

「どんなことするクラブなのか聞き逃した」

rule.5

ふたりは教室に戻り帰り支度をして、学校を出て坂道をくだる途中で裕子は言った。

「そんなに眠いなら言ってくれたらいいのに。部長さんに変な印象与えちゃったらどうすんの」

裕子は、玲子のまつ毛がさがるときはものすごく眠いときだということを知っている。

「そんなに変だったかな」

「どうとられたかわからないけど、不躰に映ったかもしれないよ」

「そんな。私は普通だよ」

「あんたは普通じゃないわよ。何度言ったらわかるの」

坂をくだったところは南北を貫く大通りだ。通りの向かいには大きな博物館があり、その前をずっと歩いていくと川に架けられた橋がある。このあたりは人通りも交通量も多く、いつもいろんな騒音が入り混じってにぎやかだ。

橋を渡って一本目の筋を左に折れたところに、小さな喫茶店「アヤ」がある。そこはふたりが小さいころから行きつけの喫茶店だった。裕子の叔母が経営している店だからだ。

店のドアを押し開けると、古風なカランコロンという鐘の音が鳴った。もう最近はこんな音、よそでは聞かれない。

広さは二十畳ほど。カウンターが奥まで続き、その背後に四人掛けのテーブルが三つ置かれている。ふたりはまっすぐに一番奥のテーブルについて、カバンをおろした。ふたり並んで壁際のソファに座る。

「今日から高校だって？」カフェオレとブラックコーヒーをトレイに載せて、裕子の叔母がテーブルに近づいてきた。カフェオレを裕子の前に、ブラックを玲子の前に置く。ふたりの好みは叔母にとって既知のものだ。

「そう。始業式のあと部活見学してたら、この眠れる姫がうつらうつらしはじめちゃってさ」

玲子はコーヒーを一口飲むと、ぱたりと裕子の膝のうえに倒れた。裕子は太ももに鈍い痛みを感じたが、玲子の寝顔を見ると文句を言う気にならなかった。かわりに頬を爪でつついたりつまんで引っ張ったりしてやる。

「なんかここに来ると玲子ちゃんいつもすぐ寝ちゃうわね」叔母が呆れたように言った。

「ごめんね、家までもたないから、この子」むにやむにやする口元のコーヒーを拭ってやり、裕子は玲子の頭を撫でてやった。やっぱり春休みの間に美容院に連れていけばよかったな。

「裕子ちゃん面倒見いいわね」叔母がそう言ったとき、店内に客が入ってきたので叔母はカウンターの裏へと入っていった。

裕子は玲子の寝顔の上でカフェオレを飲んだ。冷たいグラスを頬にくっつけたり水滴をこめかみに落としたりと意地悪しながら、誰にも聞こえない声で呟いた。

「だって、親友だもん」

rule.6

玲子は目を覚ました。世界がずれている、と思った。違う。自分が横になっているのだ。

「おはよう」

ぐるんと動いて顔をうえに向けると、親友らしき顔がそこにあった。

「寝てた？」

「五分くらいね」

玲子はふうと息をつき、裕子のあごを眺めた。じっと見つめていると、裕子がぎろりと睨んできたので目を背けた。

起きあがろうとすると、頭を抑えつけられた。どうしてそんなことをするのかわからない。冷めてしまっただろうコーヒーが早く飲みたいのに。

「コーヒーが飲みたいの」

「もうちょっとだけ、膝のうえにいてよ」

「アヤ」に来ると寝てしまう習慣は中学生のころはじまった。学習量や運動量の増大に比例して、玲子の睡眠時間も増えていった。夜十時には布団にもぐってしまうが、それでも足りないときがある。特に昼すぎに強烈な眠気が襲ってくるのだ。今日も裕子にミートボールを口に押し込まれたあたりから瞼が重くなってきていた。南校舎へ行ったときには、マックスになったら半強制的に眠ってしまう危険ゲージが半分まで貯まっていた。カメラ部の部長と話したときには、普段に増して何も考えていなかっただろう。適切な受け答えができたかどうかすら記憶にない。

そうして下校中に我慢できず、この喫茶店で眠ってしまう。起きると必ず裕子の膝のうえで、目を覚ましてもしばらく離してもらえないのだ。裕子は玲子の頭を撫でながらカフェオレを飲む。どういうわけか、この時間、裕子は言葉を発さない。まるで縁側で猫を膝に載せてお茶を飲むおばあさんのように黙り込んでしまうのだ。玲子は猫のようで猫ではないが、それが嫌いではない。ただ、コーヒーは早く飲みたい。

しかし、いつも眠いのを察してくれて、喫茶店に連れていってくれるこの親友には感謝している。ここは、家へ帰るのとはまるで反対の方向だが、帰るよりずっと近いのだ。

「コーヒー飲む？」

「飲む」

玲子は起きあがった。

「で、どうする？」

「何が」

「部活よ」

「なんでもいいよ」

「カメラ部は携帯がいるってことだし。玲子さ、お母さんに頼んで携帯買ってもらいなよ」

「じゃあ頼んでみる」

「理由は私がフォローしとくから」

「べつに大丈夫だよ」

「いいの。念のため」

「そう」

「とりあえずカメラ部第一志望ね。あとは演劇部かなあ」

「でも体育館で男が嫌いな人しか来ちゃダメだって」

「なーんか面白そうなのよね。そういう排他的なのって」

「そうなの？」

「それに部長を見たでしょ？ あんな美人、男が放っておかないよ。近くにいたら絶対いいことあるに決まってるんだから」

「美人かどうか忘れたけど、髪の毛はきれいだった」

「あんたまだ言ってる。すごいわね、あの部長の髪。玲子にこんなにインパクトを与えるなんて」

「墨液が流れてるみたいでとてもきれい」

「まあわからなくもないたとえだけど」

「おなかすいた」

「じゃあ演劇部も視野に入れとこうか」

「ねえ、おなか」

「お母さんに頼まなきゃね、携帯のこと」

「うん、あのさ」

「さあ、帰ろうか」

その日の晩、玲子の家。

夕食の席には玲子のとなりに裕子が座っていた。玲子はおくおくと自分のオムライスを食べている。

「でね、ちょうどいい機会だと思うの」裕子がオムライスを口いっぱいに入れてしゃべれない玲子のかわりに言った。

「携帯ねえ」玲子の母は頬に手を当てて考える仕草をした。彼女のオムライスは玲子のその半分以下の大きさだ。母のが小さいのではなく、玲子のが異常に大きいのだ。

玲子はよく食べる。少林寺拳法をはじめの前からそうだった。小学校の給食は大盛りでおかわりしていたし、家に帰るとすぐに台所の棚を開けてお菓子を自分の部屋に持っていく。回転寿司に行くとき四十皿も平らげてしまい、父親に怒られたことがあるらしい。そのわりにまったく太らないのだから不思議すぎる。裕子はひそかに親友の能力を妬んでいるが、嫌味を言ったことはない。

「でもこの子に本当に必要かしら」

「玲子ももう高校生だし、そろそろ交流も盛んになってくるよ。それに防犯にもいいじゃない」

まるで自分が携帯をねだっているようだ。こんな交渉ができるのも、玲子の母が自分をかわいがってくれているとわかっているからである。彼女には裕子も自分の娘同然に思えるらしい。それというのも、自分の娘である玲子と仲良くしてくれている感謝の念が日々絶えないからだそ

うだ。じつに妙な関係だが、母は他人の裕子に傾倒し、裕子は親友の玲子に傾倒し、玲子は無心にオムライスを食べている。

「交流って男の子と？ この子にそんなことできるの？ ちょっと玲子」

母に呼ばれて、玲子はハムスターのように膨らんだ頬をひっこめた。ごくりと飲み込む巨大な音が鳴る。「ん」

「あんた携帯ほしいの？」

玲子の答えを察知し、裕子は彼女の足を踏んだ。

「あったら便利」

よしよし。わかってるじゃない。

「本当にい？」母は疑いの目を玲子に向ける。実際は裕子に言わされていることにはもちろん気づいているだろう。

「裕子と一緒に部活やるから、私も携帯がほしい」

母はじつと玲子の目を見る。疑惑の眼差しだ。普通の母親なら娘の嘘などたちまち見抜いてしまうだろうが、彼女はどうか。無理ではないだろうか。それというのも、玲子が嘘をついたことがないからだ。親友は、そういう特殊な生き物なのだ。

「そう。仕方ないわね」母が諦めたように言った。「買ってあげる」

「やった！」裕子は喜びの声を上げた。玲子はオムライスを頬張っていたのでしゃべれない。

「私、一緒に買いに行くから！」

「そうね、裕子ちゃんに選んでもらいましょう」

辻家の女子は裕子に頼りっぱなしだ。裕子自身も押し掛け女房的に責任を感じている。じつに不思議な関係である。

rule.1

ある日、玲子と裕子は学級掲示板の前に立っていた。

「カメラ部のポスター、ポスターっと。あっこれね」

シンプルなデザインのポスターには「カメラ部に興味はありますか？」という疑問文と連絡先のメールアドレスが印字してある。また入部希望者は連絡するか、南校舎四階まで、ともある。

「センスが感じられないわ。部長はこういうのに無頓着なのかな」

裕子にはこういう批評的な面がある。自分の気に入らないものを毒づいて一蹴してしまうのだ。ただし、そういう発言をするのは玲子の前だけである。

裕子がぷりぷりしているとなりで、玲子は一枚のポスターを掲示板から取り外して熱心そうに読んでいた。熱心そうに見えるのは、眼鏡が必要ない程度に近眼であるためだろう。本当に熱心なわけがない。

「ちょっと玲子、はずしちゃダメじゃない」

裕子は玲子の手元をのぞきこむ。それは、演劇部のポスターだった。

演劇部の所信表明

『太古のむかしから、男性は世界の実権を握り、女性は裏方役に徹してきた。最近ようやく女性の権利が見直されてきているが、実態や本質に大きな変化はない。企業や国の中心には男性がいるし、私生活においても男性優位であるという常識はいまだ健在だ。女性は家庭につき男性は金を稼いで家族を養わなければいけないという考えが根強い。また、女性自身も、自分たちの権利を主張しながらも完全な独立を目指しているわけではなく、男性への依存に憧れを抱いている節がある。多くの女性は、男性が自分を引っ張ってくれることを望んでいるし、異性との恋が人生において必須であると考えている。そのため結婚への強い願望や男性経験の過多による経験値の数量が人間の優劣決定に依拠している。

もう私たちはそういったしがらみから脱出しなければいけない。よく考えてみてほしい。私たちを主体として考えれば、男性の必要性とは、もはや種の保存のみだ。ようするに精子である。それさえあれば、べつに彼らという入れ物またはその中身、ハードやソフトはもう価値がないのだ。男性にできて私たちにできないことなど何もない。もう彼らはいらぬ。そのことに気づかなければいけない』

文 倉敷美奈子 部長 倉敷美奈子 副部長 中村梨紗

興味のある方は部室棟二階四号室まで あなたの訪問をお待ちしております

「ずいぶん癖の強い文章ね」のぞきながら裕子は言った。「部長が書いたってことは、あの黒髪の人？」

「なんかすごい」玲子が呟いた。

正直裕子はかなり驚いた。玲子はどうしてしまったんだろう？ 黒髪だけでなく、部長という人間自体に興味を示しているように思われる。そんな玲子らしくない。こんな積極性を発揮しているのを見たのははじめてだ。そろそろ地球も終わりかもしれない。

「玲子さ、ここに入りたい？」裕子はおそるおそるきいてみた。

「べつに」いつもの玲子の返答だ。気のせいだったのだろうか。やっぱり玲子は玲子のまま、何もかわらずこのまま一緒に――

「ただ」玲子は言葉を続けた。「気になるの」

裕子は眩暈を感じてふらふらと玲子から離れた。おおげさだが、裕子にはショックだったのだ。親友の心をこれほど動かす人間が、自分のほかにもいることが。

嫉妬と寂しさに襲われて、ポスターを取りあげてやぶいてしまいたい衝動に駆られたが、一番に優先すべきことを冷静に考えて、裕子は口を開いた。

「じゃあここにしよう。演劇部。ね、一緒に見に行こう？」

裕子は玲子のことが一番大切なのだ。

裕子の気持ちを知っているのになんとも思わない感情欠落の姫は、うなずいて同意を表明した

。

rule.2

放課後、玲子と裕子は部室棟の一室のドアをたたいた。

中から「はい」と柔らかな声が聞こえ、ふたりは顔を見合わせた。聞き覚えのある声だったからだ。

ドアが廊下側にかちやりと開いた。そこに立っていたのは、南校舎四階で会った女生徒だった。

「あら、あなたたち」女生徒は口に片手を当てた。「カメラ部に入ったんじゃないの？」

「いえ、ちょっと気が変わって」裕子は言った。「見学させてもらってもいいですか？」

「あらあらあらあらあら」女生徒はさらに片手を口にかぶせて満面に笑顔になった。笑みの花がみるみる広がっていくようで、ちょっとこわいと裕子は思った。玲子は無表情。

「どうぞどうぞ、お入りくださいな」女生徒は一步引いて道をつくった。

ふたりは部室の中に足を踏み入れる。六畳ほどの狭い一室には小さなダイニングテーブルがひとつ置かれている。部屋の隅には小さなラックがあり、コーヒーマーカーが載っていた。小窓には花柄のカーテンがかかっている。

「あの、ここ部室ですか？」裕子は不思議に思ってきた。

「そうよ。何もないでしょ？ まだできて間もないクラブだから、いろいろ揃ってなくて」

「そうなんですか」裕子は納得した。文化系クラブはどれも歴史が浅いと言っていたのはこの人だ。

「あの、部長はおられますか」玲子はしっかりとした口調できいた。

「ええ、となりの部屋に」

「えっ？ 二部屋あるんですか？」裕子は驚いた。

「そうなの。うちは特別なのよ」

ふたりがテーブルにつくと、女生徒は手際よくコーヒーマーカーをセットしはじめた。ぽこぽこ心地良い音に耳を傾けながら、自分の仕事に満足したかのように、ふたりの正面に座った。

「まず自己紹介からね。私は副部長の中村梨紗です。よろしくね」

「一年の辻玲子です」

玲子は先に自分の名を告げた。そのことを裕子は少し意外に思ったが、続いて言った。

「一年の石田裕子です」

「玲子ちゃんに裕子ちゃんね。ふたりは仲良しなの？」

「はい、小学校のころからなんでも一緒にしてるんです。それで部活も同じのやろうねって」裕子はいつも通り答えた。玲子は黙っていた。

「あら幼馴染なのね、いいわねえ。私と部長みたい」

「先輩、部長と幼馴染なんですか？」玲子がきいた。部長に関連した話題に食いつく親友の態度は、裕子の心をちくちく突いた。しかし玲子はそんな裕子の気持ちに気づくはずもない。

「梨紗でいいわよ」梨紗は気さくに言った。ごぼごぼという音が止むのを確認して立ちあがり、カップを三つ取り出して真っ黒な液体を注いでいく。ふたりの前にカップが置かれた。砂糖が入った小瓶とミルクのカートンはテーブルの端にある。

「ありがとうございます」玲子はさっそく一口飲む。ブラックコーヒーは玲子のおなかへと滑るように入っていき、じんわりと広がった。裕子は砂糖とミルクをたっぷり注いでスプーンで混ぜている。

それからお互いの与太話に花が咲き、ふたりのカップが空になった頃合いを見計らったように、梨紗は立ちあがった。

「それじゃ、そろそろ部長に挨拶に行きましようか」

ふたりは頷いて腰をあげた。

rule.3

五号室の中は、となりのインテリアとずいぶん差があった。

まるで会社の会議室のように洗練された空間で、一台の事務机の前にソファが一脚ある。壁に掛かったカレンダーには書きこみがたくさんされているが、なぜかすべて英語で記入されていた。机の上にはノートパソコンが一台。そのパソコンの向こうに肘掛の椅子があって、深く腰を沈めた部長である倉敷美奈子が入ってきた三人を睨んでいた。

「梨紗、その子たちはなんだ？」美奈子は威厳たつぷりに口を開いた。

「入部希望の子たちですよ、ちゃんと座りなさい」

美奈子は姿勢を正して椅子に座りなおした。敬語なのに呼び捨てという妙な関係性を自分たちと比べた裕子だったが、自分が玲子に敬語で話すことも、玲子が自分に敬語を使うことも想像できなかった。

「そうか。ではそこに掛けてくれるか」

梨紗に手で促され、ふたりはソファに腰掛けた。裕子が右、玲子が左という位置取りだ。梨紗はしずしずと歩いていき、美奈子のとなりで秘書のように立ち尽くした。

「うん？ 君たちはたしか先日部室棟にたずねてきたんじゃないか？」

「はい。あのときはカメラ部を探していたんですが、今日は演劇部に興味があって来ました」裕子がすらすらと答えた。

「そうか。ようこそ、演劇部へ。私が部長の倉敷美奈子だ。美奈子で結構」

梨紗といい美奈子といい、演劇部は自分たちを下の名前で呼び合うのが普通のようなのだ。玲子は少林寺部にいたころ、必ず名前のあとに「先輩」とつけろと教えられていたので、このしきたりは新鮮だった。

玲子の手になんかが触れた。それは裕子の左手だった。不思議と玲子にはその意味がわかった。玲子は貝のように黙り込むことに決めた。

「美奈子さん、演劇部のことについていくつかきいてもいいですか」裕子は玲子の変化を横目で確認してから、少し身を乗り出した。

「どうぞ」美奈子は手を差し出した。

「ポスターに載っていた所信表明というのをを見せていただきました。見事な文章でした」

「それはどうも」美奈子は笑顔になった。しかし裕子にはそれが偽の笑顔であることが直感的にわかった。

「ただ内容があんまり演劇に関係ないように思えたんですけど、あれはどういう意味なんでしょうか」

「まったく妥当な質問よね」梨紗が口をはさんだ。「ほら美奈子、やっぱり伝わってないじゃない」

「うるさい」美奈子は梨紗のほうを見ずに言った。「来てくれたんだからいいだろ」

梨紗は呆れた様子で、笑顔のまま黙り込んだ。美奈子は梨紗の左脚の太ももをさっと撫でた。どんな意味があるのか裕子にはさっぱりわからない。

「では説明しよう」美奈子は真剣な顔をふたりに向けた。

「まず演劇部の歴史からはじめよう。歴史と呼ぶほどの歴史はないけどな。演劇部の立ちあげは私と梨紗だ。私たちが二年の春のときにふたりではじめた。私たちの目的は、三年次の文化祭という未来のイベントで革命的な催しをすることだった。つまり今年の秋に行われる文化祭に出演することが最大の目的だ。そして、劇の内容を網羅したものが、あの所信表明だ」

裕子は美奈子の言葉を頭のなかで追った。つまりあの所信表明に沿った内容の劇を、今年の文化祭でやろうというわけだ。

「劇の名前はもう決定している。これだ」

美奈子はパソコンを動かしてふたりに見える位置に置き換えた。パワーポイントファイルのようだ。

「超女性至上主義？」

まるで中国語のような漢字の列を見て、裕子はその意味するところを考えた。玲子も見ている。考えているかどうかは謎だが。

「具体的にどんな劇になるんですか」

「ざっと説明すると、キャストは女性のみ、登場人物は男とのトラブルを経験しながら、やつらの不要性をしだいに感じていく。みんなの気持ちと士気が高まったところに、主役のカリスマ的女性が登場。男性不要論を説いて、彼女を正しい方向へと導いていく。彼女たちの活動はグローバルに展開していき、最終的には世界を飲み込んですべての女性たちが男性を必要としなくなる。そうして男性の価値はどの株価よりも低廉なものとなり、やつらは社会的に抹殺され、数を減らしていく。最後にはやつらは絶滅し、世界は女性だけのものとなる。めでたしめでたし」

じつに先鋭的で前衛的な内容である。社会の男尊女卑を真っ向から否定したショッキングな劇となるに違いない。女子高の文化祭でこれを上演したら、キャストにもよるが人気が出てもおかしくない。洗脳される生徒が出てくるかは予測できないが、話題性は高いだろう。すべて飲み込めなくても、男性の権威を否定した風潮が高校内に流れるかもしれない。そういった予想が裕子の頭に浮かびあがった。美奈子もそこまで見通しているのだろう。

「面白そうですね」裕子は玲子の手を強く握った。

視線に不安の感情を滲ませて玲子を見る。暗にやめておこうよ、という意味を伝える。玲子に伝わるだろうか。

「私、やります」玲子は立ちあがって言った。

伝わってない。裕子も素早く立ちあがって玲子の腕をとる。「ちょっとすみません」と失礼して、部屋の隅へと引っ張っていく。彼女は大人しくついてきた。

「ちょっと玲子、本気なの？」強い口調で裕子はきいた。

「うんわりと」

裕子は親友の本気を目なんて見たことがなかったが、たしかに今までにない力強い意思が宿っているように思えた。まるで神の生贄になることを覚悟した村娘のような。

発動するときは命と引き換えとまで揶揄弄された玲子のやる気を感じ取り、裕子も覚悟を決めた。親友なんだ。私は彼女と一緒にいなければいけない。さもなければ玲子はまわりを困らせて自分も困ることになるだろう。その責任感が裕子を動かす。

ただ、ひとつ気がかりな点がある。美奈子は男が嫌いなのだろうか。もしそうなら、高校生活に新たな一筋の光となる「彼氏をつくる」という目標が果たせなくなるかもしれない。もし美奈子が男嫌いなら、後輩が彼氏をつくることを許可するわけがない。その点は確認しなければ。

「すみません、お待たせしました」

「いやいや。それで？」美奈子は軽く言った。「興味はあるかな？」

「はい。私やり——」

言いきる前に玲子の口を両手でふさいで、裕子は思い切ってきた。

「あの、美奈子さんは男の人が嫌いなんですか？」

「ああ、嫌いだね」美奈子の声は突然冷たくなった。強い肯定の言葉だが、熱がこもっておらず、聞いた耳が凍りそうな声だった。

「理由をきいてもいいですか」

「それはパーソナルだから、ちょっと言えないな」

ききながら、裕子は理由を想像した。おそらくトラウマの類だろう。カメラ部の部長に負けずとも劣らずの容姿なのだから、過去にどんな問題があってもおかしくない。あるいは家庭の事情か。両親の離婚で再婚した義父とのトラブルなんて話、バーチャルの世界ではよく聞くありふれたネタだ。ニュースなんかでも話題にあがったりするではないか。

「失礼しました。じゃあ、あの、彼氏なんかもいないわけですか？」裕子はおずおずと本題を切り出した。

「彼氏だって？」美奈子は立ちあがった。その勢いに押されたように、裕子は一歩退いた。玲子はぼんやりしてその場から動かない。

「さっき聞かせた劇の内容は、何もエンターテイメントだけを目的としたものじゃない。あれは私の気持ちをさらけ出したものだ。嘘偽りなく自分を表現して、すべてを所信表明に詰め込んだ。だからあれを読めば私の気持ちがわかるだろう」美奈子は早口に並べたて、裕子へとじりじり近づいていく。「彼氏なんているはずがない」

「あ、あの、ごめんなさい」裕子はこわくなって思わず謝った。

「いや、いい。私こそ責めて悪かった」美奈子は一息ついて冷静さを取り戻した「本当に、男が嫌いだな」

美奈子の男嫌いは本物のようだ。すごい迫力だった。獲物を追いつめたコヨーテみたいな威圧感があり、裕子は全身がすくみあがってしまった。言いたくないが、先ほどから我慢していたものが少しだけ飛び出してしまうほどに。眠れる姫は宝石よりも美しいが、怒れる美女は猛獣よりもおそろしい。

「だが」美奈子が表情を改めた。柔らかく優しい顔になった。「部員たちにまで強要したりはしないよ。私に賛同してくれればうれしいことだけど、無理強いするつもりはない。だから、彼氏がほしければつくってもかまわない」

梨紗も優しい顔で裕子を見ていた。安心していいわよ、と暗に言われている気がした。

彼氏の有無で部に迷惑をかけることがないとわかり、裕子は安心した。これで玲子と一緒にいても大丈夫だ。

「じゃあ、と言ってはなんですけど、その、私は男の人が嫌いというわけではありませんが、演

劇は楽しそうなので入部します。よろしくお願ひします」

「いいの？」玲子がきいた。口を抑えつけられてずっと黙っていたが、どうやら問題がまとまったと思ひ、口を開いてみたのだろう。

「うん。一緒に入る」

「「よろしくお願ひします」」

玲子と裕子が頭をさげたときだった。

ふいに廊下の外が騒がしくなつた。どすどすカンカンとやかましく床を震わせる足音が聞こえる。その足音はしだいに大きくなり、ドアが勢いよく開いた。

全員がドアのほうに目を向けたが、ドアは開いていない。

「あつれー、誰もいないな」

室内にいても聞こえるよく響く声が壁一枚向こうからした。美奈子が声のする壁際に歩いていて、とんとんとノックした。

「そっちかー」今度はドアがぼしんと閉まる音。そして、
ばあん。

ドアが今度こそ勢いよく開いた。

そこに立っていたのは、赤みがかつたブロンド髪的女生徒だった。背が低い。顔のつくりも幼く、高校生というには説得力がないが、小学生だとはいいすぎか。笑顔を全面に貼りつけながら、頭のうゑに疑問符を指の数だけ浮かべているようだった。

「あつれー、美奈子さん梨紗さん、この子たち誰ですか？」

女生徒は玲子と裕子をひとりずつ指さし確認して必要以上に大声できいた。

「一年生の玲子と裕子だ。たつた今、入部が確定した」

「おやまあ！」

「ふたりとも。この子は二年生の横山奈央。じつにやかましいが、いい子だ」

奈央はどたどたと入つてきて「こっちが玲子？ どっちが裕子？」とききながら、ふたりの肩に両手をかけて「あたし奈央。よろしくねえ！」と元気よく言つた。

ふたりがよろしくお願ひしますと言おうと口を開こうとしたときに、奈央がもう次の言葉を発していた。

「で、美奈子さん。もう終わったんですか？」

「いや、今から説明しよう」と

「おふたりさん。覚悟はいいかい？」

なんの覚悟を決めればよいかわからずふたりが茫然としていると、奈央は肩から手はずしてソファに腰掛けた。座り方がじつに行儀悪く、まるで男の子のようだった。

「奈央」梨紗の声。

「あつ、すいません」少し慌てた様子で奈央は姿勢を正した。不自然な女の子の座りだった。梨紗は開けっぱなしになっているドアを閉めた。

rule.4

「さて」美奈子は椅子に座り、デスクの引き出しから何か取り出した。

「演劇部の入部に際し、ひとつの決まり事というか儀式みたいなものがある」

美奈子はデスクのうえに出したのは、小さな裁縫箱と半透明の紙だった。どういうつもりなのか、ふたりにはたんとわからない。

「ちょっと常軌を逸しているように映るかもしれないけど、興奮したりとり乱したりしないように」

美奈子はふたりに言葉で釘を刺すと、裁縫針を取り出して、右手の人差指の先端を刺した。

ふたりの息をのむ音が部屋の中にこだました。玲子は内心かなり驚いているが、表情にはあまり表れていない。裕子は心のなかで地震雷火事洪水的なパニックを起こし、表情にも恐怖の色がはっきり見て取れる。ふたりの気持ちがこれほどまでに一致したのはじつにはじめてのことだった。

美奈子は右手で針を持ち、半透明の紙に血で文字を書いた。そのうえにもう一枚紙を重ねてサンドイッチのようにすると、席を立ち裕子の前まで歩いてきた。そのきびきびとした動作と右手から床にたれ落ちる赤い液体に、裕子は目に見えない圧力を感じて、膝が碎けてうしろに尻もちをついてしまった。

「さあ、これを食べなさい」

美奈子は血文字の書かれた紙を裕子の顔の前に差し出した。尻もちをついて美奈子を見あげる裕子は震えている。口は開きっぱなしで声が出ないようだ。玲子は裕子の様子を観察して何かするべきだと思ったが、何をどうしてよいやらわからなかった。

「こわいのはわかる。でもこれは決まりだから」そう言って美奈子はさらに裕子に迫り、開いた口に血で汚れた右手を近づけていく。傍から見ていると、まるで裕子が美奈子の右手の血を欲して口が開きっぱなしになるほどのどが枯渇しているかのように見える。宗教画に描かれそうな光景だ。だが実際はまったく違う。

裕子の目はいよいよ涙を浮かべはじめていた。助けを求めるように視線が玲子に向けられたが、玲子は役に立てない。美奈子をうしろから殴り倒してここから逃げるとか、裕子を助け起こして説明を求めるといった対策があるのだが、今の玲子にそこまでの想像力はなかった。常識は異常に包まれて、今はその所在がわからない。

美奈子の右手の血が爪の先から裕子の口に入る寸前、裕子は血まみれの手を払いのけ、すばやく立ちあがってドアのほうへと駆け寄った。二度ほどがちゃがちゃとノブを無駄に回してから、開けた隙間からさっと姿を消した。廊下を走る音が聞こえた。

「逃げられちゃったわね」

「奈央、追え」

「了解です」

ドアを開いて出ていく音。梨紗がドアを閉じる音。

「さて」玲子は美奈子を見る。「君はどうする？」

声をかけられて、玲子は考えた。ようやく思考に鞭を入れることができた。

裕子は逃げてしまった。

私はどうしたらいいだろう。

裕子はいない。

わからない。

「べつにどうもしませんけど」考えてもわからないので、いつも通りの答えを使った。ただ、普段と違うのは、本当にどうしてよいかわからないため、どうにもできないという意味で言ったことだ。いつもはいつでもよいので使う言葉だった。

「じゃあ食べなさい」玲子の前に血文字の書かれた紙が差し出された。出されたので、反射的に玲子はそれを受け取った。紙には「3」のアラビア数字。

「ところで、どうしてこれを食べないといけないんですか？」

よく考えたらこれをきけばよいことに気づいた。むしろきかなければいけないことだ。

「それが私との契約のかたち。入部届も提出してもらおうけど、それとはべつに個人的忠誠の誓いとして、それを食べてもらう」

美奈子は椅子に座り威厳たつぷりに言った。先ほど劇の内容を語っていたときとはまるで別人のようだ。どちらも威厳を体現してはいたが、種類というか色というか、とにかく構成要素が決定的に違う。先の色が情熱の赤だとすると、今は奈落の黒だ。あるいは、先が正義の青だとすると、今は邪悪の黒だ。いずれにしても、今的美奈子が暗黒のオーラを纏っているかのように、玲子には思えた。

「それはわかりましたけど、食べる理由にはならないと思うんですけど」

「理由は、私がこの形式を愛しているから。それで十分だし、私に十分なら、みんなにとっても十分なの」

「そうですか」

玲子は自分でも不思議だったが、美奈子の言葉に納得してしまった。客観的に考えれば、どこにも説得力のない主張だ。単なる我が儘である。ハートの女王みたいだ。容姿は女王にふさわしいが、日本に王制はないため、必然的に王は存在しない。ならどうして納得してしまうのか。

考えてみたが、玲子はよくわからなかった。ただ、直感的に、黒髪が美しいと思った。

玲子は紙を口に入れて飲み込んだ。美奈子の前で口を開いて証明する。

美奈子の黒髪が玲子の顔に近づいてきた。

突然、玲子は身体が火照り出すのを感じた。

理由は自分でもわからないが、手が汗でにじみ、全身の血液の流れが加速していく。胸を押し出す鼓動が徐々に大きくなり、飲み込まないと口の中が生唾でいっぱいになりそうだった。

美奈子の黒髪がさらりと揺れると、その一本一本の流線に目を奪われた。春の花畑のような香りが玲子の鼻を刺激し、理性が飛びそうになる。首がしだいに右に傾いていくのがわかったが、自分では止められない。どうして傾くのかもわからない。

気づいたら、玲子は美奈子の黒髪に手を差し伸ばしていた。

心の中で、本能が叫ぶ。

触りたい。触りたい。触りたい。

触れると手が切れてしまいそうな、キルトのようなきめ細かさに。

玲子は触りたかった。

美奈子は玲子の手を取り、両手で包んだ。玲子の爪が血で染まった。

「これで契約成立」玲子は美奈子の顔を見た。黒いオーラは消えており、真っ白な優しいほほ笑みが浮かんでいた。

「ようこそ演劇部へ」

この瞬間、玲子は三人目の演劇部部員となった。

rule.5

四号室に移動して、玲子はコーヒーを飲んでいて、口に残った血の味を洗い流しながら、裕子が連れ戻されるのを待った。玲子の向かいでは梨紗が笑顔でカップのコーヒーをスプーンでくるくる回している。美奈子は五号室に残った。

ドアが勢いよく開かれ、奈央が入ってきた。

「逃げられちゃいましたよ。あの子、結構足早いね」

奈央は乱暴に玲子のとなりに腰をおろすと、テーブルに足を乗せてスカートをぱたぱたと動かした。首筋には汗の粒が見える。

裕子が帰ってこないとわかり、玲子は次の自分の行動を考えた。少なくともここにはもう用はない。

「じゃあ私はこれで」コーヒーを一気飲みして玲子は言った。舌が焼けるように熱かったが、たくさん呼吸して口の中を冷ました。

「あらもうお帰り？」梨紗は立ちあがった。「もう少しお話したかったわ。あなたとはあまり言葉を変わしてないから」

「ちょっと用事を思い出したので」

「そうなの、仕方ないわね」梨紗はドアを開けて玲子の背に手を当てた。そのまま押し出すように力を入れる。「これから放課後はここに来てね」

「じゃあなー」奈央がひらひらと手を振った。「お前、玲子だっけ？ 裕子だっけ？」

「玲子です」

「玲子な。ばいばーい」

「さようなら」

「また明日ね」

玲子が廊下に出ると、ドアが閉まった。そのまま廊下をカンカン進み、階段をおりて教室へと向かった。

教室には裕子のカバンがなかった。それほどまでにショックだったのだろう。玲子を置き去りにして学校から逃げ出すほどに。学外に逃げた証拠はないが、玲子にはなんとなく裕子の居場所がわかった。どこまで奈央に追い回されたのかわからないが、裕子の恐怖の度合いは相当のものだと推測できる。

玲子はカバンを持って教室を出て、ひとりで下校した。

坂をくだり、博物館の前を通りすぎる。何か期間限定の催しをやっているようだったが、玲子はまるで興味がなかった。コンビニのポップくらい興味がない。

すれ違う人々が玲子の顔を見て神妙な顔をした。修学旅行生の団体が、玲子のうしろでささやくのが聞こえた。「あの人、妖怪？」

どうにも妙に思ったが、自分は妖怪ではない自信があったので、玲子は振り返って修学旅行生たちを見た。ふいに目が合い、慌てた様子の団体は、何事もないかのように装い、前を向いて玲子から逃げるように早足で歩いていった。

玲子はうしろから走って団体を追いかけた。団体のひとりがそれに気づいて、慌てて駆けだした。ほかの生徒も走って逃げた。

時折振り返る団体の表情は、泣き顔とも笑い顔ともとれない微妙なもので、楽しんでいるようなおそれているような、とにかく必死な顔だった。

団体は道が狭いので逃げるのが遅く、玲子はすぐ追いついた。ひとりの男子の襟を掴んでうしろに引き倒し、足元に転ばせた。男子は「うわああ」と叫びながらかぼちやのように転がった。「ちょっと君」玲子は屈んで転がった男子に話しかけた。男子は身を起して逃げようとしたので、玲子はまた襟を捕まえた。

「私のどこが妖怪なの？」

「放せ！」

男子は玲子の手を振り払おうとしたじた暴れる。男なのに自分から逃げることもできないとは情けない、と玲子は思った。団体の連れはかなり遠くから成り行きを見守っている。助けに来る様子はない。

玲子は男子を観察した。制服の詰襟が真新しく、しわもない。顔のおぼこさからも想像するに、中学一年だろう。お年頃だ。

玲子は男子の顔を両手で包んで強引に自分のほうを向かせた。男子の動きが止まる。

「どうして私を妖怪と呼ぶの？」

「口元が、その、血みたいな」

男子の言葉はおぼろだ。視線は一点、玲子のスカートの中に集中している。

傍から見たら、とんでもない光景だろう。実際、人々は足を止めはしないが、必ず顔を向けてふたりを見ている。誰もが笑顔だが、面白くて笑っているのではないことが明らかだ。ほかにどんな表情をしてよいかわからないから笑っているのだ。

玲子はしゃがんで両膝を開き、その間に男子の顔を持ってきて固定しているのだから。

玲子は馬鹿ではない。いやこの場合むしろ馬鹿と呼ぶべきかもしれないが、自分の女子高生という属性を理解し、思春期に差しかかる男の子にささやかなチップを提供することで、情報を引き出せるのでは、と考えたのだ。

思考の指向性は間違っていないが、方法論には大きな間違いがある。しかし、男子中学生には効果抜群のようだ。

玲子はそんなものを見て何がうれしいのかまるで理解できなかったが、世の中には自分に理解し難い事象が溢れている。先ほどの一件もそうだ。

とにかく情報を引き出すことに成功した玲子は、男子を解放して立ちあがった。その際、男子の手が右太ももを触ろうとしたので、その手の甲を踏みつけた。男子は痛みにも身をよじった。

「血がまだついてたんだ」

玲子は口元をブラウスの袖で拭いながら、橋のほうへと歩いていった。ブラウスが汚れることになど、まるで興味はなかった。

玲子が喫茶店「アヤ」のドアを開けるとカランカランとベルが鳴った。裕子はいつもの席に座

ってじっとしていた。玲子が入ってきたのに気づくと、心配そうな表情になった。

玲子は裕子の向かいに座った。いつもはとなりに座るが、なぜかそういう気にならなかった。店主である裕子の叔母がコーヒーを持ってくる。

「ごゆっくり」叔母はカウンターに戻っていった。

コーヒーを一口含んで香りと味を同時に楽しむ。金をとるだけあって、部室のコーヒーよりも断然おいしい。玲子はコーヒーのよさの違いがわかる稀少な高校生だ。

「ごめんね」裕子はおずおずと口を開いた。「もう私こわくって」

「私もびっくりした」

「で、あのあとどうなったの？ 玲子大丈夫だった？ 変なことされなかった？」

「べつに何も」玲子はもう一口コーヒーを飲む。「コーヒーのおかわりもらって帰ってきた」

「無事だったの？ よかった」裕子は玲子のほうへと両手を伸ばしてくる。玲子はカップを持たないほうの手で、その手に触れた。「私本当に、ごめんなさい」

「べつに謝らなくていいよ」

「でも玲子をほったらかして逃げちゃって」

「気にしなくてもいいよ。ほら私大丈夫でしょ」玲子は笑顔をつくって見せた。他人を安心させるためにつくり笑顔をしたのははじめてだ。最近のはじめてやることが多い。やはり高校生になったからだろうか。

「ああ、本当によかった。私、ここに逃げてくる途中もここにいる間もずっと玲子のことを――」

ふいに裕子は言葉を止めた。

「どうしたの？」玲子は不思議に思ってきた。裕子に変な顔をしていたからだ。

「玲子、その袖」裕子は指さした。「血、みたいなのついてる」

「うん？」玲子はカップを置いて袖を確認する。袖口の一部に黒っぽいシミ。

「ほんとだ。さっき拭ったときついたのかな」

「それってもしかして」裕子はおそろおそろといったふういきいた。

「口についてた血をさっき袖で拭いたからそのときついたんだと思う」

「誰の血？」

「美奈子さんの」

裕子の顔が青ざめる。少し身を引いて話す。

「あんたも襲われたの？」

「ううん」

「じゃあどうして血が口に」

「食べたときについたんじゃないかな」

「ええっ？」裕子は思わず立ちあがった。テーブルががちゃんと揺れてカップのコーヒーがこぼれた。玲子はナプキンでテーブルを拭く。

「食べちゃったの？」

「うん」テーブルを拭きながら頭をさげている玲子の表情は裕子からは確認できない。

「うんじゃないわよ！」裕子は怒ったように言った。実際怒っているのだろう。だがその理由が

よくわからない玲子である。

「どうしたの？」

「なんで食べちゃうのよ！ あんた平気なの？」

「べつに食べられるものでできてたし、断る理由がなかったし」

「あるでしょ！ 異常だとか、気持ち悪いとか！」

「はじめはびっくりしたけど、でもなんとなく場の雰囲気です」

「信じらんない！」

裕子は親友の行動がまるで理解できなかった。普通あれ受け入れる？ いくら玲子がクエスチョンマークつきの子だからって、あそこまでいっちゃってる奴の言うこと聞くなんて。血よ？ 他人の血文字よ？ 「3」の意味もわからないから余計にこわいじゃない！

頭の中でひとしきり玲子に対する怒りの言葉を喚き散らしたあと、少し落ち着いた口調で裕子は言った。

「それで、演劇部に入っちゃったの？」

「うん」

裕子は腰をおろし、はああ、とため息をついた。きよとんとしている玲子を睨む。

「どうするのよ」

「何が」

「私は嫌よ、あんな馬鹿みたいなことするの。だから一緒に部活ができないのよ」

「やらないと入れないのかなあ」

「決まりとか言ってたじゃない。無理よたぶん」

「そうかあ」

「玲子、あんな部やめてほかを探そうよ」裕子は優しく言った。「ほかにも楽しいのがあるって。もっと普通で、一緒にできるやつが」

「嫌」

「え？」

裕子は理解できなかった。

「だから、嫌」

「私と一緒にだと嫌なの？」

「そうじゃなくて、やめるのが」

親友の言葉が信じられない。どうしてそこまでこだわるのか。そんなに部長が気に入ったのだろうか。私よりも。

裕子は真剣な顔になってもう一度きいた。

「お願い玲子。もっと冷静になって考えて。あそこは危ないの。入ってはいけないの。部長はあからさまに危ないし、副部長は何考えてるかわかんないし、二年の部員なんか私をずっと追いかけて回したのよ」

「でも美奈子さんの黒髪が」

「なんでよ！」また裕子は頭に来た。美奈子という名前を親友の口から聞くと、沸点がさがってしまう。「どうしてあの人にそんなに入れ込むの？」

「自分でもわからない。でも美奈子さんの黒髪を見ると不思議な感じになるの。彼女の頭が近づいて、身体が熱くなって、汗かいて、ドキドキして、触りたくなっちゃうの」

裕子は啞然として玲子の言葉を聞いた。言っていることを理解すると、涙が出てきた。それが悔しさのあまりこぼれた涙だとわかったのは、自分の気持ちをたった今はっきりと認識したからだだった。

怒り。怒り。怒り。

誰に対する？

決まっている。

「帰る！」

裕子は勢いよく席を立ててドアから出ていった。

rule.6

玲子はコーヒーをゆっくり飲んだ。今日はよく置いてけぼりにされる。一回目はわかるけど、今置き去りにされた理由はよくわからない。なぜだか怒っているようだった。まるで私が悪いみたいに。

私が悪い？

私に責任がある？

私が裕子を傷つけた？

「裕子ちゃん怒ってたみたいね。ケンカでもしたの？」

カウンターから出てきた裕子の叔母である店主が玲子のとなりに立つ。店主を見上げて玲子は言った。

「なんで怒ったのかわからないの」

本当はわからないわけではない。ただ納得できないだけだ。どうしてそこまで腹を立てるのか。美奈子の黒髪の魅力と同じくらい、裕子の気持ちがわからない。言ってくれたらすっきりするのだけれど、本人にきく気にはならない。

「本当はわかってるんじゃないの？」

言い当てられて、玲子は思案顔をつくった。

「私には裕子の気持ちがわからない」

「思春期の子の気持ちって難しいものね。女の子どうしてもわからないんだから」

「どうして正直に言ってくれないのかな」

「もしかしたら裕子も自分でわかってないんじゃないかしら。玲子ちゃんも自分で自分がわからないこと、あるでしょう？」

たしかにそうだと玲子は思った。たとえば自分の魅力がわからない。何が裕子にそこまで自分の世話を焼かせるのか。彼女にきいても「面白いから」という解答に、さらにわからなくなる。どこが面白い？ 普通ではないか。自分と比べたら、狂った時計とか空っぽのマッチ箱のほうが面白いに違いない。

さらに美奈子の黒髪だ。なぜあんなにも惹きつけられるのか。たかが髪の香りや流れで身体が火照るなんてはじめての経験だ。もしかして、これが一般に言う「恋愛」というものだろうか？

いや、違う。一般人が他人の髪に対して「惚れた」なんて言うはずがない。つまり、特異な性癖ということになる。

つまり、私は変態？

おそろしい結論に、心と頭の芯がずっと寒くなる。ずっと自分は普通だと思っていたのに。裕子にはつねづね否定され続けてきたけど、彼女が間違っていると信じてこれまで生きてきた。しかしここにきて、自分の信念をぼっきり折るに十分な証拠が出てきてしまった。

これってたしか、世間一般に言うところ――

「どうしたの？」

店主が心配そうに玲子の顔を覗き込む。

「えっ？」 玲子はきよとんと答える。

「すごい変な顔してたよ」

「そうですか？」

玲子は自分で気づいていなかったが、店主から見たら、表情が目まぐるしく変化し、正月のおかめを思わせるほどだったそうだ。心配そうな顔かと思えば、これでもかと眉間にしわを寄せ、口元のえくぼができたり消えたりを繰り返して鼻の穴がふうふう膨らむ。玲子は考えているとき、表情のコントロールができないことを、自分で知らないのだ。

「私って変態なんですかね？」

「は？」

玲子は学校での一連の出来事と、現在理解している自分の気持ちを店主に話した。

「へえ。人は見ためじゃあわからないものね」腕組みをして思慮深そうな店主である。「だから面白いんだけど」

裕子の親族はどうにも玲子を面白いがる家系のようだ。おそらく先祖代々の深い因縁があるに違いない。江戸の時代に町屋がとなりどうしで、裕子の家系の人か玲子の家系の家族のインテリアを馬鹿にして面白がっていたとか、そんな感じ。

「どう思いますか？」

「そうね、その部長さんの蛮行はたしかに一般的ではないわね。なんだか生々しくて魔女みたい。でも玲子ちゃんはそんな部長さんが好きなのね」

「違います」玲子は否定した。「美奈子さんの黒髪に惹かれるんです」

「じゃあ美奈子さんの髪の毛をそり落としてお皿に盛ったら、それを見て玲子ちゃんは興奮するわけ？」

「それは、しないかも」

想像するだにおそろしい。夕食にオムライスの大皿に盛られた美奈子の黒髪が出てきたら、いくら玲子でも手をつけないだろう。母親を救急車に放り込むくらいはするかもしれない。

「でしょ？ 美奈子さんの頭に載ってるから、玲子ちゃんは魅力を感じるのよ。それは髪の毛以外のパーツを含めて美奈子さんが好きっていう証明にならない？」

じつに筋の通った理論だ。それ以外に解答はないように思える。ただ、玲子には反論があった。

「でもね、美奈子さんのスタイルとか顔とかあんまりイメージできないの。もし好きだったらそういうの頭の中に焼きついちゃうものじゃない？」

「それは不思議ね。髪の毛のことだけしっかり覚えてるわけ？ ふうん」

「なんだか疲れちゃった」

玲子は久しぶりにずいぶん頭を巡らせて物事を考えた。エネルギー切れだ。チャージしないと死んでしまいかねない。

「早く帰ってごはん食べなさいね」店主は優しく言った。「これからたくさん考えるんだから」

rule.1

しばらく裕子は玲子から距離をとった。何度も近づいていつも通り話しかけようとしたが、自分のなかのどす黒い感情がその行動を抑制した。それがなんなのか、もはや裕子ははっきり理解していたが、認めたくなかった。

玲子は玲子で、放課後あししげく部活棟に通っているようで、その当たり前な姿勢が裕子の心をさらに沸騰させた。部室に一度入ると、最終下校時刻まで出てこないため、裕子は玲子がなかでどんな非道なことをやらされているのか想像し、心を痛めた。

また玲子が自分と離れてもまるで気にしない様子が、裕子をもっとも傷つけた。

ずっと一緒だったのに。

私は他の女でもかわりがきくポジションにいたの？

玲子にとって、私っていてもいなくてもいいような存在だったの？

そう考えると、学校に行くのも億劫だった。もはや彼氏がどうのこうのという話ではない。裕子のプライオリティの頂点は、いつでも玲子だ。

そう。私は玲子を取り戻す。

あの憎らしい変態黒髪部長から。

現状を打破し、玲子との仲をやり直すために、裕子はある決意をした。

ある日の放課後、裕子は部活棟の陰に隠れて最終下校時刻を待っていた。すでに玲子が部室に入ってから一時間以上経っている。出てくる様子はいまだない。あんな狭いところで劇の練習をしているのだろうか。

「何してるの？」

うしろから声をかけられて、裕子は飛びあがるほど驚いた。

実際には肩が細かく上下しただけだが、ドキドキしながら振り向くと、そこに立っていたのは、カメラ部部長の近松千鶴だった。

「え、いやべつに。このあたり空気がおいしいなあと思って」平静を装って裕子は答えた。

「そうかな」千鶴はあたりを見渡した。

部室棟の近くには園芸部の花壇や小さな畑があり、そこから肥料の香りが漂ってくる。おそらく農家のビニールハウスと似た匂いだらう。

「まあまずくはないけど。ちょっと土臭いよね」千鶴は笑った。

この場所で空気のおいしさを言い訳に使うのは、われながら芸がないと裕子は反省した。千鶴の目はまっすぐ裕子に向けられ、まるで真実を見抜いているからさっさと説明しなさいとでもいうかのような視線だ。裕子は素直に告白した。

「じつは、演劇部部長を待ってるんです」

「へえ、どうして？」千鶴の目が鋭く光る。

「それは、その」裕子はもごもごと口ごもる。どう説明してよいやら自分でもわからない。

「何か理由があるみたいね、それもうしろ向きな」

的確に表面だけ言い当てられて、裕子は目を剥いた。そんなに自分の態度はわかりやすいだろ

うか。部長と言ったときに、敵意むき出しだったのを悟られたのかもしれない。

「そんな、べつに」裕子はとりあえず言い訳してみる。「べつに闇討ちとかじゃ」

笑顔をつくって冗談交じりに言ってから、自分で自分を馬鹿だと思った。冗談で流してもらおうという意図で言ったのだが、まともに相手されるはずがない。呆れてどこかへ行ってしまいうに決まっている。

あれ？

でもこの場合、ここから去ってもらったほうが都合がいいのでは？

では自分はどのようにして効果的な発言を後悔しているのか。

この人に残ってほしいのか？

なんのために？

「ふふ、闇討ちね」千鶴は裕子の発言を買った。「ちょっと場所を変えて私とお話しない？」

南校舎の四階。階段をあがってすぐのところにあるソファに裕子と千鶴は向かい合わせで座っていた。

裕子はあたりを見渡した。両サイドに伸びる廊下に人の気配はない。各部屋のドアも動き出す様子もなく静かにたたずんでいる。

「さて」千鶴が口を開く。裕子は向かいに視線を移した。

「美奈子が嫌いなの？」

裕子は千鶴の雰囲気妙な親近感を抱いた。まるで彼女が自分を同士だと見なしているような。

「嫌い」裕子は千鶴の言葉を反芻する。口の中で唱えた言葉はそのまま外に飛び出して、空気と融合した。

「嫌い、というより」

「むかつく」千鶴が次の句を継いだ。ばれていたようで、裕子は恥ずかしく思った。

「そうです。むかつきます。私、美奈子さんに対して、むかついてます」

「素直ね」千鶴は優しく言った。

「どうしてわかるんですか？」

「私もそうだから」

「先輩も美奈子さんに何か特別な思い出が？」

「そうね、そんなところかしら。私怨ね」千鶴は軽く言った。さらりとした口調に少し恐怖感を抱いた。「ちょっといろいろあつてね」

「私、親友を美奈子さんに取られた気がするんです」

裕子は素直に想いを口にした。千鶴の雰囲気がそうさせている。

「親友っていうのは、こないだの子？」

「はい。私たちずっと一緒でした。何をやるにも。どこへ行くにも。私が引っ張っていかないと、あの子はダメなんです。それなのに、急に、本当に急に、美奈子さんに会った途端」

裕子は悔しさに震えた。千鶴は裕子のとなりに移動してきて、肩に腕をかける。

「何かされたの？」

「演劇部に入りたいって言いだして。それで見学に行ったら、なんかわけわかんないもの食べさせられそうになったんです。私、こわくて。彼女を置いて逃げ出しました。そのときは彼女のことまで頭が回らなかった。でも、あとになって。私、心配で。ひどいことしちゃったって。裏切っちゃったって。たくさん謝ったんです。でも」

裕子は「アヤ」での玲子の様子を頭に描いて、心がねじれるような思いに苛まれた。

「玲子は、食べたって。あんな変態みたいな人に惹かれるって。もう私、玲子がわからなくて、離れていっちゃうのが悲しくて。奪った美奈子さんが憎くて。それで、話をつけようと思って」

裕子の独白を聞いて、千鶴は彼女を腕の中に引き寄せて、震える身体を抱きしめた。優しく、でも力強く。彼女の震えが収まるまで。

「それはつらいわね。わかるわ」千鶴は裕子の頭を撫でながら優しい声をかけた。裕子に見えない位置で、笑顔をつくる。

「私もね、美奈子に奪われたの」

裕子は顔を上げて、千鶴の目を見た。子犬のような表情だった。千鶴は裕子がいとおしく思えた。

「彼氏がね、いたの。友達みたいな、でも情熱があるね。私たち、いい関係だったのよ」

千鶴は裕子を解放して、少し首を傾げる。

「ふたりで歩いてたの。手をつないで。いつも手をつないでたわ。アスファルトが溶けるんじゃないかって暑い日でもね。偶然、美奈子に会ったの。彼女、制服だった。休みの日なのにね」

裕子は千鶴の吐きだす言葉に耳を傾けている。

「彼氏にね、『この子、美奈子っていうの。学校のお友達』って紹介したの。それで彼の目を見たわけ。するとね、すごいとろんってした目つきで美奈子を見るのよ。暑さで疲れてるんじゃないかって、そのときは思ったわ。でもね、違った」

優しい表情で語る千鶴の話の行く末が、裕子にはわかった。それなのに、こんなに落ち着いて話すことができるなんて、この人は強いんだ、と裕子は思った。

「そのあと彼ね、美奈子の話ばかりするの。それ以来一度も会わなかったのに、まるでいつも新鮮な情報みたいに美奈子の話ばかり。しかも話すのは美奈子の髪のことだけ。顔とかスタイルとか、そういう入れ物には一切触れないのにな。うるさいくらい髪の美しさについてしゃべるのよ。もうずっと。『天使はたぶんああいう髪を持ってるんだらうな』とか、『写真撮ってきてよ、髪だけの』とか、『一本でいいからもらってきてくれない？』とかね。歯が浮いたり精神を疑ったり忙しかったわ。でもね、彼のこと好きだから、私できるだけのことはしたのよ。隠し撮りしたり、いたずら半分髪に毛触って抜け毛をとってきたりね。彼喜んでたわ」

裕子はちょっとだけ千鶴がこわくなった。でもそれだけ彼への依存が強いということなのだろう。それだけ彼への気持ちが強いということなのだろう。自分だって、玲子に同じことを頼まれたら、もしかしたら敢行してしまうかもしれない。

「でもだんだんエスカレートしてきて。彼、美奈子全部を求めるようになってきたの。全部って髪全体だけ。そのために、私を捨てて美奈子のもとへと駆けていったわ。そして美奈子は彼を変態扱いしてぼろぼろになるまで罵倒して、粉々になるまで傷つけた」

言い終えたように、千鶴はふうと息をつき、うつむいて顔を隠した。裕子は千鶴が顔をあげてくれるのを待った。力が抜けたように放り出された千鶴の手を取って、両手で包んだ。

しばらくそのままの状態が続き、廊下の静寂は五分間ほど守られた。空気は感傷に浸り、その空気に浸ったふたりには自然と一体感があつた。

「魔女みたいな女なの」千鶴は顔をあげて言った。「私も彼女が憎い」

「先輩」裕子は握る両手に力を入れた。

「カメラ部の活動はね、携帯を使って生徒たちの秘密を探りながら諜報活動すること。活動は水面下で行われるから気づかれにくい。誰がカメラ部なのかっていうのもシークレット。闇組織みたいなものよ。でも表向きは携帯で自然風景とか街並みの景観とかを写真撮影して、ブログをつくるっていうクラブになってる。だから正式な部として認められてるし、きちんとそっち方面でも活動する。ただ、根っこは生徒の秘密リーク。だからカメラ部は一部の生徒の間ではおそれられてるし、権力もある。その頂点に立つ部長が私」

突然、カメラ部についてしゃべりだした千鶴を、裕子はぽかんと見つめる。脈絡のない話についていけず、カメラ部の裏実態への疑問や千鶴の正体についての疑問も頭をよぎらなかつた。

「私は今、計画を練ってるの。美奈子を失墜させる計画を。彼女を陥れる計画を。それで復讐するために。そして、あなたに力を貸してほしい。カメラ部に入してほしい」

勧誘されているとわかり、裕子は現実的にそのことについて頭を巡らせる。

カメラ部。権力。水面下。美奈子。失墜。復讐。

マイナスの感情が裕子を支配し、カメラ部に大いなる魅力を彼女は感じた。

千鶴の計画に加担して、美奈子に復讐する。そして、玲子を取り戻すのだ。

どす黒い魅力に満ちた欲求が裕子を支配する。良識が遠のき、枯渇する。

失墜。

復讐。

良識？

何それ？

美奈子？

なんで？

どこが？

玲子！

醜い復讐心に縛られ、冷静で客観的な判断ができなくなった裕子は、千鶴の手を強く握って言った。

「私、やります」

千鶴も裕子の手を両手で握り返して力を込めて言った。

「よろしくね」

千鶴の笑顔は、妖艶だった。

rule.2

玲子は毎日、放課後を部室ですごした。美奈子の命令で、小さな人形の制作に従事していた。なんの目的でつくるのかきくと、「文化祭の準備だ」と言われた。

玲子は慣れない裁縫作業をがんばった。しょっちゅう縫い針で指をついて血を流した。自分の指に赤い点が生まれるのを眺めていると、なぜか裕子のことを思い浮かべてしまう。

最近、裕子と距離が遠い。物理的にも、ひよっとしたら精神的にも。

教室でも裕子は玲子の机に近寄ってこず、目を向けようとしなかった。玲子は親友が突然離れてってしまったことを不思議に思ったので、理由をききたいと思ったが、自分からたずねるのも妙だと思い、そのまま放置していた。

「アヤ」で置いてけぼりにされて以来、話もしていない。家にも来ない。電話もない。

もうまるで、知らない人のように振る舞われていた。

そのことに少なからず不満を抱いている自分を発見して、玲子は驚いた。

裕子が傍にいないと自分は嫌なのだろうか。

寂しいのだろうか。

悲しいのだろうか。

どうしてだろうか。

答えの出ないまま、玲子は毎日部室で縫い針をちくちくした。

いつものように玲子が部室のドアを開けると、すでに来ていることが当たり前になっている梨紗の姿が見当たらなかった。梨紗は、常に部室に一番乗りする。

コーヒーマーカーがぼこぼこ音を立てているとなりで、梨紗が縫い針をちくちくしている光景がデフォルトになっていたため、玲子は部室に入って妙な感覚に陥った。知らない部屋へと蹴り込まれたような錯覚だ。

「あら、早いよね」うしろから梨紗の声がした。

「こんにちは」

梨紗のうしろには、美奈子と奈央がいた。自分が部室に一番乗りだと気づいて、玲子はちょっとうれしくなった。

「感心だな」美奈子が威厳のある声で言った。

「みなさん今日はどうしたんですか？」

「ああ、じつはな、今日は作業をしないつもりだ」

「えっ？」

「そのかわり、外に出る」

「そうなんですか」玲子はテーブルに置こうとしていた自分のカバンを握った。「どこへ行くんですか？」

「玲子の歓迎会だよ！」奈央が堪え切れませんでした、と言わんばかりに大声を出した。美奈子は頭ひとつ低い奈央の顔を睨んだ。

「なんで言ってしまうんだ、お前は」

「いやもう、無理っすよ」奈央はにやはたと笑顔になる。「秘密をキープするなんて、私にはとてもとても」

「なら物理的にキープできるように、あとでその口をまつり縫いしてやる」

「いやあ、フランケンシュタインみたい」

口を縫うとどうフランケンシュタインみたいなのか、玲子にはわからなかったが、質問するほどのことでもないと考えて、ペこりとお辞儀した。

「ありがとうございます、わざわざ」

「ふふ、よくできた娘さんねえ」梨紗がおかしそうに言った。玲子はうしろに自分の母親が立っているのかと思ったが、考えるまでもなく馬鹿な思いつきだと悟った。

「ばれてやりがい半減したが」美奈子がややひどいことを言った。「半分も残っていればやる価値はあるだろう。行くぞ」

四人は部室棟をあとにして、校門を出て坂を下った。

四人は博物館の前を通りすぎて、橋の手前にある駅から電車に乗って川沿いを北に向かった。地下鉄なので、電車の窓から見える景色は、夜みたいに暗かった。

「どこに行くんですか？」玲子は先ほどと同じ質問をした。

「おいしいケーキ屋さんを知ってるの」梨紗がふふふとうれしそうに答える。

「梨紗は甘いもののためならストリーキングをしてもいいくらい馬鹿だ」美奈子が冷たく言った。車内の視線が梨紗に集まったような気がした。

「もう美奈子、公共の場でそんな過激なこと言っちゃダメじゃない。本気にされたらどうするの？」

「本気にするような馬鹿をひんむいて、駅内に放り出せばいいじゃないか」

「あんたがやりなさいよ」

「やだよ」

「私がやります！」奈央の声は隣の車両まで聞こえそうな音量だった。

「お前じゃ敵に勝てない。返り討ちにされるぞ」

「ええ、それはやだな。今日パンツこんなだし」奈央はそう言って自分の尻をさすった。

「あとでチェックしてやる」美奈子がにやりと笑って言った。

「ほんとですか？」

「お前は幸せな奴だよ、本当に」

「そうねえ」

玲子は黙ったまま三人のトークを聞いていた。女子高生の過激さは、自分にはまだまだ不慣れなものなのだな、と新たな認識を得た。

二駅目で降りて、階段をあがって地上に出る。学校周辺よりも五倍はにぎやかな土地だ。

この中心街には、小学校高学年くらいからよく裕子に連れてこさせられた。裕子にとってはなんでも揃っている天国のような場所だが、玲子にとっては畑や田んぼとなんのかわりのない空っぽの土地だ。

中心街を歩くとき、裕子はめいっぱいおしゃれな格好をして、玲子の腕をがっちり掴む。腕をとられた玲子は、そのまま稲刈りができるくらいラフな服装であるのが常だった。ふたりのギャップと距離感が面白いのか、よくすれ違う人たちにくすくす笑われたのを玲子は覚えている。裕子は「笑われてるね」となんでもないように言っていた。「平気なの？」ときくと、「玲子と一緒にだもん」とてんでおかしい答えが返ってきたものだ。

四人は西へと歩を進めていく。橋の中腹から下流の河川敷を眺めると、ぼろぼろと人の姿が見えた。みなそれぞれにくっついて河川敷に腰をおろし、寄り添っている。男女のペアばかりで、どこにも仲良しに見える女子高生グループはいなかった。

橋を渡ってそのまま大通りを進んでいく。幅の狭い小川に架かった橋を越えて、屋根のある歩道を歩いていく。行き交う人の密度は、コーラに含まれる炭酸の割合よりも高い。

右に折れるとアーケード街であり、そこをしばらく歩くと東側の一角にこぎれいでかわいらしい店があった。洋画の屋敷にありそうな門扉のミニサイズバージョンが備えつけられ、メニューの書かれた看板に踊る文字はほとんど日本語ではない。真紅のカーペットが敷かれ、その先には高級感漂うステップがある。まるでブロードウェイ会場の裏口みたいなところだった。

「サロン……」玲子は看板の文字を読む。サロンしか読めない。続きは英語ではないようだ。「読めなくていいの」梨紗が玲子に向かって笑いかけた。「私たちも『サロン』って呼んでるのよ。読めないから」

梨紗が先頭に立って店内に入る。三人もそれに続いた。

内装はいかにも女の子のためだけの店といった感じで、まるでお菓子職人が設計してパティシエがインテリアコーディネートしたみたいで、いたるところが甘そうだった。部活終わりの男子が足を踏み入れれば、塩分不足で死んでしまうだろう。

カウンターのショーケースにはいろんなかたちの皿に載せられた多種多様なケーキがぎゅうぎゅう詰めに並んでいる。梨紗と奈央はへばりつかんばかりにケーキに見入っている。美奈子はそんなふたりの様子をうしろから見下ろし、玲子はあまりの甘さにのどが渴いた。

「何回見てもかわいいわねえ」とろけるような声で梨紗が言う。

「もうべらぼうですよ、梨紗さん！」奈央が舌をべろべろさせた。

「本当に、べらぼうねえ」

「お前らに羞恥心はないのか」美奈子はヤモリのようにガラスに頬をくっつけたふたりの襟を引っ張って引き寄せた。「玲子が退屈そうだろ」

「そうだったわね」

「そうでしたね」

ふたりのプライオリティの中では、玲子はケーキよりも下位のようなのだ。

「私のどが渴いちゃって」玲子が控え目に発言した。

「そうね、座りましょう」

梨紗はカウンターの向こうの店員に声をかけた。店員は「こちらにどうぞ」と言って四人を案内する。どうやら梨紗は予め店に予約を入れていたようだ。

四人は案内されたテーブルにそれぞれ座る。玲子のとなりに奈央、その向かいに美奈子と梨紗が座った。店員はメニューをテーブルに置くと「お決まりになりましたらお呼び下さい」と言っ

て歩いていった。

「お決まりになりましたらお呼び下さい」奈央が店員の声真似をした。結構似ていたのので、玲子はふふと笑った。

「玲子ちゃん、いい笑顔」梨紗がメニューをテーブルに広げる。「あんまり笑わないもんねえ」
「笑いは万病に効く薬なんだぜ」奈央は玲子の頬をつねる。

「うおおお！」

突如、奈央が叫んだ。

店内が一斉に四人のテーブルに目を向けた。迷惑そうな眼差しをしている。

「なんだ奈央、どうした」

美奈子の言葉を無視して、奈央は両手を使って玲子の両頬をむにむに揉んだ。

「すげえええ！」

「あの」抵抗の態度を見せず、頬のかたちを自由に変えられながら、玲子は言った。

「私の頬が何か」

「超やわらけえええ」

奈央の手つきは徐々にヒートアップしていき激しさを増す。ぐりんぐりと揉みまわしたり、両サイドにつねって伸ばしたり、人差し指を限界まで差しこんでみたりと自由自在である。最後には「ぱーん！」と叫んで両手で玲子の顔を押し潰した。

「痛いです」じんじんと赤くなる頬を両手で抑えながら、玲子は小さく訴えた。

「ごめんごめん、あんまり触り心地がいいもんだからさ、つい調子に乗っちゃった」

「傍から見たら完全にいじめだぞ」美奈子が叱りの言葉を授けた。「今後慎め」

「はあい」

「まあまあ。何頼むか早く決めましょ」

「そうだな」

「そうですね」

「はい」

「店員さあん」梨紗は店員を呼んだ。

三人がメニューから顔を上げて梨紗に目を向ける。

「おい、まだ何も決まってないぞ」美奈子が言った。

「そうねえ」梨紗はどうしてもいいかのようにふふふと笑う。

「はい、お呼びでしょうか」

「はい、このピラミッドみたいなやつと、なんとかフロマージュ、それに桃のタルトといちごの
ミルフィーユお願いします」

「お飲み物は」

「アイスティーを三つと、ブレンドひとつ」

「少々お待ち下さい」

店員はメモの記入を終えると、すたすたと行ってしまった。

「おい」美奈子はドスの利いた声を出した。「どういうつもりだ。私たちに選択の自由はない
のか」

「そうですよ、勝手に頼んでくれちゃって！」奈央が美奈子のあと押しをする。

「あらあ、てつきりみんなこれがほしいのかと思ってえ」梨紗が甘えた声で言った。

「嘘つけ。お前が食べたいだけだろ」

「そうですよ、飲み物まで選ばせてくれないなんて！」

「えええ、みんなアイスティー好きでしょう？」

「もういい。ここの払いはお前が全部持て」

「そうですよ、どっちにしろ、最初からそのつもりでしたけど」

「そんなあ」

ちっとも気にしないふうの梨紗だった。

玲子はまだじんじんと痛む頬をさすりながら、一連のやり取りを見ていた。じつに刺激的なメンバーである。最初に頭の中で構築したそれぞれのプロフィールにどんどん新たな情報が追記されていく。各々キャラクターの色合いに濃淡はあるものの、三人とも個性的な性格だと玲子は感じた。

「玲子、話に寄って来い」ふいに美奈子が声をかけた。

「そうよお、玲子ちゃんの歓迎会なんだから」

「はい。ありがとうございます。みなさんそれぞれに面白い人たちだと思います」

玲子が素直に感想を口にすると、三人はきよとんとして玲子を見つめた。

「ふふ、そうかい」

「あらあら」

「こいつ、生意気な！」

注文した品が運ばれてくるまで、玲子は奈央のおもちゃにされ、美奈子に呆れられ、梨紗に優しく笑われた。

rule.3

「さて、真面目に話そう。玲子、男は好きか？」

どこが真面目なのだと思っただが、美奈子にとってはじつに本気に真面目な話題なのだろうと妥協した。

「いえ、べつに」

「それはよいことだ」

「どこがよ。人間の過半数に興味がないってことなのよ。それだけ損してるってことじゃない」

「あんな奴ら必要ない。男と比べたら、ヤシの実のほうがまだ利用価値がある」

「わかりにくいわね。ちょっと奈央！ 桃を一口で食べないで！」

「いいじゃないっすかあ」

「わかってないわね！ こうやってフォークで優しく削り取るようにして少しずついただくの！」

「梨紗さん、スイーツのことになると本気で怒るんだからなあ」

「お前ら、脇道に逸れるのが早すぎるぞ」

「美奈子さんは、どうして男をそんなに目の敵にするんですか？」

梨紗が奈央とフォークでがちゃがちゃケンカしていた手をぴたりと止めた。勢いあまった奈央のフォークがケーキの皿に激しく当たり、大きな音が鳴った。奈央は「どうしたんすか？」と不思議そうに言った。

美奈子がまっすぐ玲子の目を見る。

「聞きたいか？」

玲子は頷いた。

「よく私の演劇部ポスターの主張を見て、あいつは何か過去にトラウマがあるんだ、とか思われているんだが、そんなんじゃない」

美奈子はテーブルに肘をついて、両手を組み口元を隠した。

「私はな、ただただ男が嫌いなだけだ」

「それだけですか？ 原因とかはないんですか？」

「ない。嫌いなものは嫌いだ」

まるで子供の主張だと玲子思った。子供には違いないが、ラッキョウを決して食べようとしない幼子の駄々のように幼稚な感情だ。しかし、世間にはいろんな人がいて、数えきれないくらいの考え方の通りがあるのだから、美奈子がそういう主張をしてもまったくの不思議はない。

ただ、くだらない理由にしては、梨紗がずいぶんと大人しい真剣な態度をとるので、玲子はその点に引っかかった。もしかしたら、なにか裏の真実があるのではないか。しかし、それを聞きだす方法が思いつかない。それに、嫌いなら嫌いでまあいいか、という楽観がすぐに玲子のなかに生まれ、やがてすべてがどうでもよく感じられた。

「そうですか」

「玲子は不思議な子だな」美奈子はおかしそうに顔を歪めた。「何か興味のあることはないのか？」

「興味」

「そうよ、好きなものは？」

「べつにないです」

「嫌いなものはなんだい？」

「べつにないです」

「今ほしいものはなんだ？」

「べつにないです」

「先輩を敬う気持ちは？」 奈央が口を挟んだ。

「普通にあります」

「なんだよ、引っかかれよお」

奈央はまた玲子の頬を揉んだ。

「なんか、悟りでも開いているみたいに無の境地ねえ」 梨紗がもぐもぐといちごを頬張りながらふふふと笑った。

「何もないのか？ お前の心は何にも作用されず、干渉されないのか？」 美奈子がきいた。

「じつはひとつあります」

「おお、なんだい？」

三人が玲子のほうへと身を乗り出す。

「言うの恥ずかしいんですけど」 玲子はもじもじと渋る。奈央が「もう、かわいすぎるぜえ！」と玲子の頬に頬ずりした。

「自分で種を蒔いたんだ。責任を持って教えてもらおう」

「そうね、言ってくれたらここは私のおごりでもいいわ」

「さあさあ！」

三人に迫られて、玲子は白状した。

「美奈子さんの髪が好きかもしれないです」

玲子の言葉を聞いたとたん、三人は三者三様の態度を見せた。

梨紗は、おかしくてたまらないと言った様子で口元を押さえて肩を震わせている。

奈央は、目を輝かせてうるうると泣きそうである。

美奈子は、

「はあ」

とテーブルに突っ伏して電源の落ちたパソコンのように静かになった。

玲子は、自分が言ったことはやはりまずかったのだろうかと思いつつ後悔しながら、テーブルに広がる美奈子の黒髪を見つめてしまう。触りたい、と激しく心の声が叫び、身体が火照る。ちょっと触っても大丈夫だろうか。

玲子が脳内で手を伸ばせという命令を書簡に書いてポストに入れようとしたくらいで、美奈子は顔を上げた。額が少し赤くなっている。

「お前もか」

玲子は意味がわからず、首を右に傾げ左に傾げをくり返した。

「もう、美奈子、ったら」声にならない声で梨紗が言った。相当ツボにはまったのか、じつに苦しそうだ。「モッテモテよねえ」

「うおおお！」奈央が泣き叫んだ。

玲子はびっくりして奈央から距離をとったが、両肩を掴まれてぶるんぶるんと前後に揺すられた。

「お前さんにもわかるかい。ああそうかいそうかい！」

このままでは頭が首からこととはずれてしまいそうだったので、玲子は奈央の両腕を掴んで自分の肩を解放した。

「じゃあ奈央さんも？」

「お前さんは去年の私と一緒にだねえ！」

奈央は玲子の肩に腕をまわしてきて、左右にゆらゆら揺れながら「おーまえとわーたあしーは、に一たもんどうしー」と変な歌を歌った。

「やめんか、お前ら」美奈子がテーブルをどすんとたたくと食器がガチャンと大きな音を立ててとび跳ねた。「はあい」と奈央が止まった。

「玲子」美奈子がかぎりなく研ぎ澄まされた真剣な声で出す。玲子は姿勢を正して「はい」と返事した。

「私の髪の毛のどこが好きなんだ？」

同じことをあの日、「アヤ」でずっと自問自答して考えていた。結局答えは出ないまま、今日まで美奈子の黒髪にドキドキする日々を送ってきた玲子は、適切な解答を用意できない。

「わかりません」

「触ればわかるかもねえ」

「梨紗！」美奈子がとなりの笑いを落ち着いた梨紗を睨む。ひどく攻撃的な視線だが、梨紗はまったく気圧されない。

「美奈子ったら、どうしてそんなに髪を触られるのが嫌なの？」梨紗は呆れたように言った。「この子ね、むかしからこうなの。私が髪を触ろうとしても許してくれないのよ。本気でたたいてくるんだから。痛いだよ」

「人の髪を好んで触りたいなんて、どんな類の変態だ。そんなに髪が好きならアデランスにでも就職してしまえ！」

「やあねえ、美奈子の髪だからみんな触りたいのよ。ねえ玲子ちゃん？」

いきなり話を振られて玲子は嘘をつく余裕がなかった。

「あ、はい」

「お前もそのくちか。私の髪はな、人の欲望を満たすためだけの下卑た道具じゃないんだ。もっと敬意を払ってもらいたいもんだな」

美奈子に諭すように言われ、玲子はしゅんと反省した。うつむいて、自分の膝小僧に目を落とす。

「ほらあ、玲子ちゃん傷ついちゃったじゃない。お歓迎様をへこませるなんて、あんたそれでも部長のつもり？」

「関係ないだろ！」

「それにしても妙よねえ。なんでみんな美奈子の髪に惹かれるのかしら」

「私が一番知りたいよ」美奈子が落ち込みながら言った。

玲子は美奈子よりももっとそのわけが知りたかった。部室でずっと見続けても、毎日見続けても、全然飽きない。それどころか、どんどん触りたい欲求が高まってきて、どきどきは加速度を増していく。身体は汗ばんで、ひどいときは濡れてくることすらあった。そんなこと自体がはじめてだった玲子は、もう自分の気持ちにどう向き合えばいいのかさっぱりわからなかった。

それでも、今日の話でよい収穫もあった。美奈子の黒髪に特別な感情を抱くのが玲子だけではないことだ。奈央はどうやら同じ穴のムジナであるようだし、もしかしたら、梨紗もそうなのかもしれない。つまり、部員全員が美奈子の黒髪に興奮するわけだ。

さらに、梨紗は美奈子が決して自分の髪を人に触らせないと決めたと言った。これはなぜだろう。触らせれば、相手は満足してそれ以上しつこく言い寄ったりしないこともあるかもしれないし、実際触ったところでなんのことはないはずだ。これにも何か理由があるのだろうか。

「まあとにかく」美奈子は仕切り直すように元気な声を出した。

「私の髪のことにはさしておいて、玲子の歓迎に」美奈子はアイスティーのグラスを持ち上げた。

「美奈子ったらおじさんく——ごめん。なんでもない」殺さんばかりの禍々しい視線にさすがの梨紗もおそれをなしてか、素直にグラスを掲げた。

「ほい！　かわいい玲子に！」奈央もグラスを持ち上げる。

三人は玲子を見つめている。自分が氣遣われていることに気づいて、玲子はおずおずとカップを両手で掲げた。

三人は玲子のカップにそれぞれ順々に自分のグラスをかちんと当てた。

rule.4

カメラ部に入部して以来、裕子は玲子と一切の接触を断っていた。美奈子を陥れ、劇的に玲子を取り戻すための復讐の熱を保ち続けることを最優先事項としていたためである。玲子も自分を恋しがっているに違いないと確信していたため、嫉妬の延長である彼女へのちょっとした意地悪心も手伝って、教室では玲子の存在を無視し、放課後はすぐさま校内から姿を消した。カメラ部は水面下の裏組織であるため、校内で目立つような行動はできないのだ。

裕子は学校前の坂を下ると、家とは反対方向の北へと歩いていく。左へ右へとカーブをくり返す大通りをずっと歩いていくと、一切の縁を鉋で切り落とす神がいるとされる悪名高い神社があり、その脇道を西へおりていったところに小さな和風喫茶店「さよなら」はある。裕子がドアを開けると、すでに千鶴が抹茶オレを飲みながら雑誌を開いて座っていた。

「お疲れさまです」裕子は千鶴の向かいに腰掛ける。カバンを肩からおろしてカフェオレを注文した。

「お疲れ」雑誌を置いて、千鶴は裕子を見た。

「首尾はどうなの？」

「ええ、今のところなんら進展はありません。こないだの玲子の歓迎会を称した集会でも目立った話題はあがりませんでした」

「やっぱり美奈子がひとりのときを狙ったほうがいいわね」

「でも美奈子さんはなかなかひとりにならないんです。常にそばに副部長がいます」

「あのふたりは幼馴染だからね、高校に入ってからもずっと同じクラスだし。密着しすぎて気持ち悪いわ」

「……」裕子は運ばれてきたカフェオレを一口飲んで、千鶴が読んでいた雑誌に視線を落とした。

「ごめん、無神経だったわね。そうね、ちょっと嫉妬したのかも」

「えっ、どういうことですか？」

「いえ違うわよ。梨紗にじゃなくて、その幼馴染の存在そのものにね。私にはそんな人間いないから」

「そうなんですか」

「私、むかしから八方美人の気があって、どこのグループにも混じっていたんだけど、どこにも全身浸かってなくて距離をとっていたの。だから深いつき合いの友達がいなくて。かわりに顔の広さだけが形成されちゃった」

「でもそれで得るものもたくさんありますよ」

裕子は自分がそんな考え方をできることに気づいて、すごく驚いた。そんな人とのつながりを自分のアドバンテージのために利用するのがいいことだ、なんて発言。自分の口から出てきたのか？ 自分のいったいどこの部分がそんなことを考えた？

「たしかに便利よね、いろいろと。でもどこまでも広い湖が持たない魅力を、面積は小さいけど死ぬほど深い沼が持つてることもあるでしょ？」

「ええ、そうですね。あるかもしれませんね」

「私も思うのよね、そんな沼に肩まで浸かって誰かに水中から足を引っ張ってもらって沈んでみたいって」

千鶴のたとえについて裕子は自分なりに解釈してみた。玲子が沼に入る。水面に顔だけ出して、ぷかぷかしている。私は水中から玲子の身体を見あげている。足がばたばたと水をかき、沼の水をさらに濁している。私にはその濁りが心地よい。ふと足が止まる。私はゆっくり近づいていって、両手で片方の足を掴む。玲子の身体がぴくんと震えるのがわかる。私の手だと、玲子にはわかっているのだろう。だから足は私の手を払おうとして抵抗することもない。私は底のほうへと玲子を引っ張っていく。玲子の顔が水面から完全に消えて、水中でぼこぼこ泡の球をたくさん吐く。そのうち泡の出が止まる。玲子は優しい表情のまま目を閉じる。私は彼女の顔を引き寄せて、胸の前で抱きしめる。玲子の髪が水を含んでいっぱい膨れ上がり、一本一本がぴんと背を伸ばしているように見える。私は玲子を抱いたまま、ずっと底のほうまで沈んでいく。

いつまでも。底が見えるまで。

「美奈子さんたちもそういう関係なんですか」

「わからないわ。あのふたりに関しては情報が入ってこないの。一緒にいるだけで、何も特別な行動が観察できないみたい」

「隠れて何かしてるんじゃない？」

「それは考えにくいわね。カメラ部の情報網は生半可じゃない。私の権力権限がそれを証明しているわ。たぶん本当に何も無いのよ」

「じゃあ別視点でアプローチしてみるっていうのはどうでしょう」

千鶴は身を乗り出して、裕子の話に耳を傾けた。

「へえ、それいいかもね。なんで思いつかなかったんだろう」

「沼って潜って見ないと何があるかわからないものなんですね」

「そうなの。なんか悲しいわね」

「私もです」

rule.5

ある日、四号室で玲子はようやく自分のノルマを達成した。完成した人形を目の前に掲げる。われながらいい出来だ。

「これでようやく全部揃ったわね」梨紗がカップにコーヒーを注いで玲子の前に置いた。「美奈子に見せに行ったら？」

「はい」

玲子は立ち上がり部屋を出て、となりの五号室のドアをノックした。

「入れ」

「失礼します」玲子はドアを開いた。美奈子がデスクについてパソコンを操作しているというデフォルトの光景が目に入る。

「完成しました」

「そうか。見せてみる」

玲子は机の前まで歩いて行って、人形を美奈子に渡した。そのままその場に立ち尽くす。

「座っていいぞ」

美奈子の許可が降りたので、玲子はソファに腰をおろした。

「へえ、丁寧につくったんだな。縫い目もきれいだし、全体のバランスもいいじゃないか」

「はい」褒められているのかわからなかったのが、玲子は曖昧な返事をした。

「いやよくできたと褒めてるんだぞ。もうちょっとうれしそうな顔をして罰は当たらないし、それが礼儀ってもんだ」

「はい。ありがとうございます」玲子は自然に見える笑顔をつくった。いつも裕子の話の合間に挟んでいた笑顔だ。こうすると、裕子はいつも喜んでいた。

「嘘臭いな。まあいい」

美奈子に偽りの笑顔を見抜かれて、玲子は少し驚いた。やはり年功の成せる技だろうかと考え、その旨の質問が喉まで上がったが、口からは飛び出さなかった。礼儀に反すると思ったからだ

美奈子は人形をもてあそびながら微笑んでいる。玲子は美奈子の黒髪を見た。

ああ、また見てしまう。

どうしても見てしまう。

目を反らさなければ。けれど、身体が言うことをきかない。

結局、ずっと見つめている。

「また見てるぞ」

美奈子は玲子の顔を一度も見ていないはずなのに、ふいにそう言った。玲子は身体ごとびっくりして、黒髪からパソコンの背面に視線を移動した。

「すみません」

「慣れるとわかるんだよな」美奈子は人形をデスクに置いた。

「そういうものなんですか？」

「どうやらそのようだ」

今なら見てもいいのではないか。玲子がゆっくりと美奈子の顔に視線を向けると、美奈子の視線と交錯した。両者の間に視線を経由した感情のやり取りが行われ、玲子はそのまま顔を見つめることにした。

「男と同じくらいな、嫌いなんだ」

玲子は悲しい気持ちになった。傷ついたと言ってもいい。人生ではじめて、他人の言葉で傷ついた瞬間だった。

「ごめんなさい」

これ以上見ていられなくなり、玲子はうつむいて謝った。

「今後、見つめないように」

「はい。努力します」

美奈子が自分を睨んだ気がしたが、玲子は目を合わせずきびきびと部屋を出た。

四号室に戻ると、梨紗と奈央の姿があった。

「美奈子なんだって？」梨紗がきいた。

「黒髪を見つめられるのが本当に嫌だから、もう見ないよう言われました」

「あら、そうなの」

「私もむかし言われたぜ」

奈央が椅子から立ちあがり、玲子の前へと歩いてきて両肩に手を置いた。

「でもな、めげちゃダメだ。いくら美奈子さんの命だとしても、それは聞いちゃいけない。美奈子さんには申し訳ないし、たいへん失礼だけど、こっちがおかしくなっちゃうぜ」

「でも美奈子さんが男と同じくらい嫌いだって。しつこく見続けたら、美奈子さんに男扱いされちゃうんじゃ」

「それは嫌だなあ。でも私は言われてからも見てたけど、嫌われてないよう」奈央がおどけて言った。

玲子は奈央の言葉をいぶかしんだ。どういうことだろう。美奈子は自分に見るなと言った。奈央にも同じことを言ったようだが、効果がないにも関わらず、今は放置しているようだ。では自分はどうすればいい？

「奈央さんは美奈子さんに嫌われてないんですか？」

「うーん、たぶんね」

「どうして？」

「そりゃ私が美奈子さんのこと好きだからだよ」

玲子は意味がわからなかった。好きになれば嫌われないのだろうか。拒絶されないのだろうか。

「でも私も美奈子さんのこと」

違う。

奈央の「好き」と自分の「好き」は違う。

なんとなく、玲子はそう思った。

「お前も美奈子さんのこと好きだろう？ 私と一緒にだよ！」奈央は玲子の肩を揺する。「だからお前も嫌われないって！」

「玲子ちゃん」

黙って話を聞いていた梨紗が口を開いた。

「美奈子のこと好き？」

ばれている。

梨紗には自分の気持ちがばれている。そしておそらく美奈子にも。

「私、このままじゃ美奈子さんに嫌われちゃう」

言葉にすると、思ったより悲しかった。人に嫌われることが悲しいなんて。

今まで自分を嫌う人はたくさんいた。自分の性格をよく思わない人間が周囲にはけっこういて、その子たちに正直な気持ちをぶつけられてきた。でも、いつもなんとも思わなかった。自分にはなんの関係もないからだ。嫌いならどうして話しかけてくる？ どうしてわざわざ伝えにくる？ 嫌いなら、距離を置いて放っておけばいい話ではないのか？ そういう疑問を積み重ねていくうちに、心の外側にカバーができて、多少の言葉の刀では届かない位置まで隠れてしまったのだ。

でも美奈子の言葉の刀は、想像以上に鋭い。計り知れないくらい鋭いのだ。だから、それで突き刺されると、心まで切っ先が届いてしまう。傷がついてしまう。刀傷の耐性がないから、少しこすれただけで、自分は重いダメージを負ってしまう。

どうして美奈子の刀はこんなにも鋭いんだろう。

ほかの人との違いはなんだろう。

「私が美奈子さんの黒髪が好きだから嫌われちゃうんだ」

「美奈子は玲子さんのことが嫌いじゃないと思うよ」梨紗が言った。

「そうだよ、私も好きだけど、嫌われてないっていつてるじゃん」

「奈央、それは違うのよ。あんたは美奈子が好き。玲子ちゃんは美奈子の髪が好きなの」

「それって違うんすか？」

「違うわよ。玲子ちゃん、違うわよね？」

玲子は頷いた。顔を動かした拍子に水滴が足元に一粒落ちた。

「玲子おおお！」

奈央が玲子を抱きしめる。梨紗が近づいてきて、ふたりの頭に手を置いた。

「こんなにモテモテで、美奈子は罪な女よね」

「罪深いけど、美奈子さんなら許されるんですよ」

rule.6

和風喫茶「さよなら」の店内に裕子と千鶴の姿があった。

「で、どうだった？」

「はい、電話を盗み聞いたところ、今度の日曜に約束があるようです」

「明後日か」

「私が行きます」

「ばれないようにな」

「充分注意します」

「場所は？」

「ずっと北の神社ですね」

「なるほど。人目を避けてか」

「おそらく」

「私たちのスーパーヴィジョンを甘く見られては困るな」

「たぶん梨紗さんは最小限の注意しか払っていないのでしょうか」

「そんなことだからつけ込まれて尻尾を掴まれる」

「そうですね」

「じゃあ頼んだよ。美奈子にはほかに誰かをつかせよう」

「はい」

「報告が後日」

「わかりました」

「収穫の健闘を」

rule.1

日曜日、玲子は学校を目指して坂を上っていた。夏の訪れを感じさせる熱気があたりに立ちこめている。先日からはじまった夏服のブラウスは早くも汗でしっとり濡れている。今年は冷夏だとテレビで言っていたのにな、と玲子は汗をぬぐいながら思った。

「おはようおうおう」

振り返ると、奈央が坂道を全力疾走して自分の目前に迫ってきた。玲子は歩道の端へと避けて、奈央に道を譲る。だが奈央は玲子のとなりまで来ると足を止めた。ふいー、と長い息をついて、にんまりと笑顔になる。

「おはようさん！」

「おはようございます」

「今日もいい天気だ！」

奈央が玲子の肩に腕をかける。玲子は人目を気にしたが、日曜なのでまわりに制服姿は見られない。大学生らしき女性は幾人か坂を上っていた。

「今日梨紗さん来られないんだってな」

「えっ、そうなんですか」

「昨日連絡があっけさ、どうしてもはずせない用事ができたって」

「それはしょうがないですね」

「コーヒー自分で淹れないとなあ」

ふたりは並んで坂を上っていった。

玲子が四号室のドアを開く。奈央はすたすたと入っていった。玲子も自分の身体を中に入れる。鍵が開いているということは、五号室にすでに美奈子がいるということだ。ふたりはカバンを置いて部屋を出る。五号室のドアをロックした。

「入れ」中から美奈子の声が聞こえた。暗い声だった。

玲子がドアを開く。奈央がすたすたと入っていく。美奈子はデスクについてパソコンをいじっていた。

「「おはようございます」」玲子と奈央は挨拶した。

「おはよう」美奈子が顔をあげてふたりを見据える。その表情はどこか暗く芳しくない。

「今日は何するんすか？」奈央がきいた。

「ふたりには段ボールを集めてもらいたい」

「段ボールですか？ そんなの学校にあるかなあ」

「たぶんあるだろう。職員に当たってみてくれ」

「言ってくれたら家から持ってきたのになあ」

「そんなの面倒だろ。段ボール担いで登校する女子高生になってほしくなかったんだよ」

「美奈子さんのためなら、段ボール担ごうが地蔵担ごうがどんと来いですよ！」奈央は胸のあたりをどんとたたいてごほごほむせた。

「気持ちはありがたいが、校内で材料を探してくれ。よろしくな」

玲子と奈央は五号室を出て階段をおりる。職員室を目指して歩きはじめた。

「美奈子さんも変なこと気にしますね」玲子は言った。

「優しいよなあ」

「まあそうですけど」

妙な気の配り方をするものだと玲子は思った。奈央ではないが、段ボールを担ごうが地蔵を担ごうが小学生を担ごうが気にならないのに。

職員棟の階段をあがり、入口の引き戸をノックする。返事がないので、「失礼します」と言ってドアを引いた。

職員室は混雑を極めていた。おそらく校内で一番散らかっている部屋がここだろう。運動部の部室よりもひどい。運動部部室はいろんな匂いが充満し渦を巻いて熟成しており、足を踏み入れるものを一撃で酩酊させるが、こちらはこちらで煙草の煙が充満し教師の暑苦しい熱気が気温を底上げしており、入るものすべてに吐き気を催させる。平気でいられるのは大人だけだ。

「あっ、うちの担任だ」

奈央は入口から遠いデスクに座る中年の教師を指さして、そちらへ歩いていく。玲子もあとを追った。

「先生様よお」奈央が声をかけた。老人みたいな話し方だと玲子は思った。

「なんだ横山、今日は休みだぞ。いくらお前でもそれくらい理解してると思ってたが」

「おやおや、休日の朝からパンチが効いてるねえ。暴言は許してあげるからさ、私たちに協力してよ。今ならもれなく胸チラも辞さない！」

「ちらりと見せるほどないだろ。アスファルトの表面のほうはまだ凹凸があるよ」

「そんなに胸ジョークに食いつかなくてもいいでしょ。溜まってるんじゃない？」

「溜まってねえよ。妻との営みは健在だからな。で、何を協力しろって？」

「私たち、部活で使う段ボールがほしいんだよね。学校にいらぬ段ボールない？」

「段ボールかあ」

高校に入学してしばらく経つが、玲子が教師と生徒のこんなカジュアルな会話を聞いたのははじめてだった。さすが高校生。性の入り混じった会話もそつなくこなしてしまう。そんな生徒を何百人とみてきたであろう熟練教師は、きわどい会話もさりごとくこなしてしまう。大人な世界の交流を垣間見た気がして、玲子は身ぶるいした。自分もいずれこの領域に足を踏み入れることになるのだ。自分にはおよそ似つかわない感情の衝動だと思ったが、素直に受け入れることにした。どうやら自分は変わってきているようだ。

「やっぱり焼却所を当たるのが一番近道じゃないかな」

「焼却所？ そんなのあるの？」

「ああ、簡単なゴミは学校で燃やしてるからな。段ボールなんかもそこにあるんじゃないか」

「そうかい。ありがとね、先生様」

「お礼はいいから菓子の折詰でも持ってこいよな」

「俗物だなあ」奈央はひらひらと手を振って出口に向かう。玲子は見知らぬ教師に頭をさげて奈央についていった。

焼却所は校内敷地の南西角にあった。坂道の壁ひとつ越えたところだ。つまり、いつも焼却所

のすぐとなりを歩いていたことになる。そのわりには煙の臭いや立ちのぼる白煙を見かけない。「誰もいませんね」玲子はあたりを見回した。近くには生徒が寄りつきそうな施設がないため、人影は見られない。

「べつに先生に許可もらってるんだから隠れて探すこともないんだけどね」

「じゃあおおっぴらに探しましょう」

「そうだな」奈央は両手でメガホンのかたちをつくって口にあてた。「おーい、段ボールやーい！」

「いや、そういう意味じゃなくて」

「わかってるよっ！ 玲子も覚えてきたね」

「何をですか？」玲子は奈央の言った意味がわからない。

「健全な高校生活を送るための健康な交流というやつをさ」

「そうなんですか？」

「精進しなよっ！」

rule.2

ふたりは焼却所のまわりを隈なく探してまわった。焼却所にはいろんなものが落ちていた。化粧品ボトル、ぼろぼろになったスカルプ、お茶が満タンに入ったペットボトル、数学の教科書などである。女子高の風紀とは、こういうものだ。

焼却所から少し離れたところに、燃やされることをおそれていながらも、こわい事務員に整列させられているかのように、段ボールがきれいに折りたたまれて焼却されるのを待っていた。ふたりはそのうちの何枚かを救出し、部室に連れて帰った。

段ボールを四号室に持ち込んで、床に放り出してふたりは一息ついた。

「玲子、コーヒー淹れてえ」奈央は椅子にどかんと腰をおろして言った。

「はい」

玲子のはてきぱきと準備を進める。奈央がそれを眺めていた。

「さすが、要領がいいねえ」

「そうですか？」

「だって玲子って名前だもん」

「えっ？」

「だから、冷コーでしょ？」

「今日は暑いですね」

奈央はにやはたと笑った。じつに満足そうだ。

ドアが開いて美奈子が入ってきた。

「収穫は？」

「そこに転がってますよお」

「ごくろう」美奈子は奈央のとなりに座る。同じように玲子を眺める体勢に入った。

コーヒーメーカーがぼこぼこ音を立てはじめるのを聞いて、玲子も腰をおろした。

「段ボールは何に使うんすか？」奈央がきいた。

「人形劇の背景にな」

「じゃあペンキとか刷毛とか要りますね」

「いや、パソコンでプリントするから必要ない」

「美奈子さん、ドローイングソフトとか使えるんですか？」

「あんなもの、サルでも使えるだろ」

「えー、私パソコンわかんないっすよ。サル以下ってことですか？」

「未満じゃないだけましだろ」

ぼこぼこがごぼごぼという音に変化する。玲子は立ちあがってカップに黒い液体を注いでいく。美奈子と奈央の前にカップを並べて、ふたたび腰をおろした。

「梨紗さん今頃何してるんですかねえ」奈央が天井を見ながら言った。考えている表情だが、頭の中に梨紗を思い浮かべているかどうか怪しい。

「さあな。私も知らない」

「美奈子さんも知らないんですか？」玲子は気になったので発言した。

「そうだよ」美奈子は玲子を見据える。「梨紗の行動を逐一把握してるわけじゃないからな」
「幼馴染なのに？」

「そうだ。梨紗も私のことをなんでも知ってるわけじゃない。お互いに踏み込まない一線つてものがあるんだ」

「そういうものなんですか？」

「私たちの場合な。でもそれが普通だと思うぞ」

玲子は美奈子の言ったことが少しショックだった。なぜなら自分たち、つまり裕子と自分はそのような関係ではないからだ。一般に、関係性の線分の内分点が一对一であるのに対し、自分たちは九体一くらいだ。自分には一もあるかどうかすら怪しいのに。

「誰と比較している？」美奈子がきいた。

「私にも幼馴染がいるんですけど、美奈子さんたちとはずいぶん違う関係だから」

「ああ、裕子っていったか。どういう関係なんだ？」

「彼女とは小学校からのつき合いです。いつも一緒にいて、なんでも一緒にやってきました。唯一の例外として中学の部活動がありますけど、それ以外はずっと一緒でした」

美奈子は玲子の話をじっと聞いている。奈央があくびをした。

「仲良しは仲良しなんですけど、裕子はちょっと強く私に来るんです。一緒にいるって言いましたけど、実際は私が彼女に連れまわされてる感じ。嫌じゃないから何も言わないんですけど、彼女はそれを勘違いしているみたいで。つまり自分が引っ張らないと私はダメになるみたいな。どっちでもいいから手綱を握ってもらってるだけなんですけど、彼女には伝わってない。最近そのことがあらわになっちゃったみたいで、疎遠な感じなんです」

「へえ。それはたいへんだな。私たちと違うっていうのは、そのお互いの距離感のことか？」

「そうです。美奈子さんと梨紗さんは平等っていうか平均っていうか、とにかくバランスがとれてる。私と裕子の場合は裕子の側にシーソーが傾いちゃってる。私はつるると滑って彼女のほうに流れていっちゃう。そこが違うと思ったんです」

「うーん、たしかに違うな。私たちはお互いにどちらかが引っ張らなければいけないなんて考えてないし、今が安定していると思う。玲子の観測は正しいよ」

「私も気づいてたんです。このままじゃ裕子を傷つけてしまうってこと。もらってばかりじゃなくてきちんと返してあげないと関係は続かないって。でも私はべつに裕子との関係にそんなに興味はないんです」

「あれえええ？」奈央が椅子から落ちた。「ないのかよ！ 今までの伏線は？ いい話系の感じだったのにさ」

「奈央、おおげさだ。話はまだ続くみたいだぞ」

玲子はのどが渴いたので自分の分のコーヒーをカップに注いだ。一口含む。苦さが脳にしみて、頭がクリアになった。

「自分でもよくわからないんです。興味はない。でもそれが原因で裕子が傷つくようならどうにかしなくちゃと思う。でも興味がないから、どうにかするためのエネルギーが出ない。堂々巡りなんです」

「もう玲子！ 優柔不断すぎるよ！」

「まあまあ奈央。そんな簡単な問題じゃないみたいだ。簡単に自分の気持ちにけじめがつけられるなら、玲子だってそこまで悩んだりしないだろ」

「だから美奈子さんと梨紗さんの関係が羨ましくて。私と裕子もそんな関係になればどんなに楽だろうって」

「玲子。目の前に提示された理想に憧れてそこへと漸近していくのは簡単だ。しかしな、それではお前たちのアイデンティティはどうなる？ 自己の尊重はとても大切だ。全財産をドブに捨てても守らなけりゃいけない価値があるんだよ。お前が今しなければいけないことは、自分の本当の気持ちを知ることだ。つまり、自分の望みはなんなのか明確に理解することだ。それさえ決められれば、答えは自ずとわかるだろう」

美奈子の言葉を聞いて、玲子は目から何かが落ちた気がした。涙だろうか。鱗だろうか。よくわからない。

「自分の気持ちに気づいて、裕子を迎えに行ってやれ。それでお前のもやもやは晴れるだろうよ」

「美奈子さん」

美奈子は立ちあがって、玲子のとなりに来た。大きな手の平が玲子の頭に置かれる。

「悩める子はかわいいな」

玲子の中で何かが湧きあがった。噴出する感情は、玲子の心を独占的に支配し、一色に染めた。表面的な変化として、玲子の顔がポストよりも真っ赤になった。

「くわあああ！」奈央が叫んだ。

「美奈子さん、玲子ばかりひいきして！ 私だって私だって、悩める乙女なんですよ！」

「ほう、何を悩んでるんだ？」

「え？ えーと、たとえば、その、今日の晩ご飯何かなあ、とか」

「そうか」

「冷たい！」

「奈央もかわいいよ。玲子とは違ったベクトルでな」

「えっ、そうですかあ？」

美奈子は奈央とのやり取りの間ずっと玲子の頭に手を置いていた。日が暮れるまでこうしてほしい、玲子はそう思った。

rule.3

裕子は神社から市バスに乗り、学校方面へと向かっている途中だった。ひとり掛けの席に座り、携帯の画面を見つめながら考えを巡らせる。車内はクーラーがよく効いていて、肌寒いくらいだった。

「これはちょっといくらなんでも」

思わず声に出してしまったことに気づいて、慌ててまわりを見渡すが、彼女を気にかけている者はいない。知り合いの顔も見られない。

「千鶴さんになんて報告すれば」

裕子の悩みの種は、先ほど神社の境内で見かけたふたりの人間だった。ひとは誰か知っている。彼女が今日の標的なのだから。しかし、もうひとりのあれはどうだ？ 見覚えがある。校内で見かけた気がする。しかし、属性は女子高生ではない。

「つまりふたりは、そういう」

女子高の風紀がゴミ屋敷の秩序よりも乱れていることは裕子も知っている。男子の目が届かないことをいいことに、女子はやりたい放題、現実には、純粋な高校生男子の淡い夢を完膚無きまでに打ち砕くほどに非情だ。なかにはそんな現実に興奮する変態がいるかもしれない。風紀の乱れは人間関係にもっとも顕著に現れる。学生間には目立った非常識はないが、そこに教師が加わると話がかわってくる。おそらく共学の高校生が聞くと驚愕する事実がそこにはあるだろう。

これをリークしたら、いったいどこまで影響が及んでしまうのだろう。美奈子問題だけの枠組みには留まらないかもしれない。もっと公の、大問題にまで発展してしまうに違いない。できるだけ内輪間で秘密裏に処理しなければいけない。

しかしこれは大きな収穫だ。美奈子はきっと知らないだろう。彼女は部員にまで自分の考えを強要したりはしないと断っていた。だが相手が相手だ。私だって、もし玲子が自分に内緒で彼氏をつくったりしていたらどれだけとり乱して怒り狂うかわからない。美奈子に対してもこれだけ嫉妬してしまうのに。

そうだ、目的を見失ってはいけない。

すべては美奈子を陥れて復讐するために。

すべては玲子をこの手に取り戻すために。

それだけを考えて、私は行動すればいいのだ。

裕子は千鶴に今から行くとの旨をメールで知らせて、席に深く座りこんだ。市バスは大きな城の前の停留所を出発したところだった。

rule.4

一学期も終わり、終業式のあと玲子は部室に寄った。部室の整理をするためだ。といっても、整理するほどのものはない。ひとつ、必要なことは、コーヒーマーカーに布をかぶせて埃から守ることだけだ。玲子はこのタスクを終えると、ついでにテーブルを拭いて部屋の床を簡単に掃き、部室をあとにした。

鍵をかけて部室棟の管理室に返しに行く。管理の事務職員が「いい夏休みをねえ」と言った。玲子はお辞儀して、校門へと歩いていった。

坂を下ったところで、裕子のうしろ姿を発見した。

こんなことはじめてだ。自分が裕子をうしろから見かけるなんて。

今まで、どんなときでも裕子が玲子にうしろから近づいてきて声をかけてきた。時には「わっ」と驚かされたり、いきなりぎゅっと抱きついてこられたりした。そんなコミュニケーションが日常のものとなってすでに久しい。

しかし高校生になってから、厳密には自分が演劇部員となってからは、日常のコミュニケーションもなくなってしまった。以前の自分たちの姿はもはや幻影の彼方、失われた遺産だ。惜しくはないが、懐かしいという純粋な気持ちはある。

玲子は迷った。裕子に声をかけようかどうか。

気持ちに踏ん切りがつかないままぼんやりとあとをついていくと、裕子は家とは反対側の北方向へと歩いていった。玲子は不思議に思った。どこに行くのだろうか？

裕子を仔細に観察しながら、玲子はあとをついていく。裕子の様子がどうにもおかしい。以前のちよろちよろとした猫のような歩き方ではなく、まるで何かから逃げ隠れているかのような、忍者を想わせる足取りとスパイを想わせる態度だったのだ。そんな裕子は見たことがなかった。いったい何から隠れているのか。自分と距離を置いていた間に何かあったのだろうか。それは自分に関係があることなんだろうか。

玲子は裕子の行く末が気になったが、どこまでも歩いていきそうな足取りについていけず、途中で諦めて彼女の背中を見送った。

来た道に戻りながら、玲子は演劇部のことを考えた。美奈子が先日言っていた言葉を思い出す。

「夏休みは忙しいぞ」

玲子がどのように忙しいのかきくと、

「文化祭での演劇披露に向けて最終調整だ」と美奈子は胸を張った。そのとき揺れた黒髪が鮮明に頭に浮かび上がった。

これから夏休みが終わるまでは学校に来ることはない。すべての演劇部活動は学校外で行われることになっている。スケジュールを聞いたときはほとんどが遊びの企画だと玲子は思ったが、美奈子に言わせると、すべて演劇部の活動内容として大切なものらしい。合宿という行事はいいとして、そのほか海へ行ったり音楽ライブに行ったりすることが、どう演劇部にとって大切なのか玲子には理解できなかった。

「まあ夏休みの間も美奈子さんに会えるなら」

玲子の関心は美奈子の黒髪だけだった。演劇部に所属していることは、その建前にすぎない。すべては美奈子の黒髪を見るため。

玲子は自分の美奈子の黒髪への思い入れが、ファーストコンタクトのときよりもずっとずっと強くなっていることに気づいていない。

裕子は玲子が背後からつけてきていることに気づいていた。どういうわけか、玲子が近くにいるとシックスセンスのような得体の知れない力が働いて、裕子にはわかるのだ。ずいぶん距離をとっているようだったが、裕子は振り向いて玲子と話したい衝動を堪え、できるだけ平然と歩いた。玲子には変に思われたかもしれないが、それはすべてが終わってから弁解すればいい。

「さよなら」のドアを開けると、奥の席に千鶴が座っていた。裕子が入る前から睨んでいたのか、ドアを開けてすぐに目が合った。

「お疲れさまです」裕子は千鶴の向かいに座る。店員がカフェオレを持ってきた。どうやら千鶴が前もって注文していたようだ。

「お疲れさま」千鶴は裕子がカフェオレに口をつけると、身を乗り出すようにして裕子に顔を近づけた。「で？」

「はい」裕子はカフェオレのグラスをテーブルに置く。「夏休みの間は、部室は使わないみたいです。どこかよそで集まるそうで」

「やっぱりそう。困ったわね」千鶴は顔をひっこめて椅子に深く腰掛ける。

「だから、最初の集まりのときに勝負をかけるのがいいかと思います」

「最初はどこに？」

「合宿と銘打って、どこか旅行に行くようです」

「場所の見当はついているの？」

「わかりません。ですが集合場所は押さえてあります。そこからこちらも尾行すればいいかと」

「え、ついていくの？」千鶴は意表を突かれて一瞬呼吸が止まった。「なんで？」

「なんで、とは？」

「だから、その場でケリをつけちゃえばいいんじゃない？ わざわざ敵の本陣まで突入しなくてもさ」

「合宿となれば、敵も浮かれ気分のはずです。目的地に到着して最高に調子に乗っているところを狙い打って地獄に突き落とすのがいいかと思ったんです」

裕子の口から飛び出てきた暴力的な響きとそこに込められた深い憎悪の感情に、千鶴は少し身を引いた。

「できれば活動は市内から出たくないんだけど。交通費諸々の経費がねえ」

「そこは自己負担でお願いします」

「でも夏休みは私だっていろいろとももの入りで。お金もいろんなところで飛んでいけようし」

「私はもう待てません」裕子は目がしらが熱くなった。「もう我慢できません。玲子のいない夏休みなんてすごしたくない」

「そういうものなのかしらね」

「そうなんです」

「それにね、裕子ちゃん」千鶴は真剣な顔になった。申し訳なさそうな表情にもとれる。

「私、じつはあなたの案には乗り気じゃないのよ」

「え、どうしてですか？」

「その情報はいくらなんでも重すぎるわ。公に知れたらたいへんよ。美奈子のためだけに使うにはリスクが高すぎると思うの」

「大丈夫です。彼女たちにしか伝えません。洩れるようなことはありません」

「でもねえ」

「部長！」裕子は大きな声を出した。店内にはふたり以外の客はいない。「絶好のチャンスなんですよ。漏洩にだけ気をつければ、すべてを叶えることができます。美奈子さんに復讐して、彼女を傷つけて、玲子は戻ってくる。どこに躊躇する理由があるんですか！」

「落ち着いて」千鶴は静かに言った。「わかったわ。そこまで思いつめてるなら」

「やりましょう」

「そうね」

ふたりはテーブル越しに握手する。千鶴の顔には不安な表情、裕子の顔には決意の表情が浮かんでいた。

rule.5

「最近裕子ちゃん来ないわねえ」

母のこの言葉を聞くのは何回目だろう。玲子は途中まで数えていたのだが、いつからか数えることをやめてしまった。あまりにもしょっちゅう口にするからだ。しかし最後にカウントしたのが百手前だったで、今では除夜の鐘の数よりも多いだろう。

「うん」

気のない返事をする玲子は、スパゲッティを食べることを目下最重要課題としている。明日から合宿だから、今から英気を養っておこうという考えから来る行動だ。両手と口はミルクとスパゲッティを交互に食べるのに忙しい。

「ケンカしてるの？」

これも何回目だろう。そのたびに玲子はきちんと現状を報告しているのだが、どうにも母は納得がいかないらしく、日付が更新されるたびに同じ質問をぶつけてくる。いよいよつき合うのにも疲れてきたので、最近はもう無視するようになってしまった玲子である。

「仲良くしなきゃダメよ。あんたに友達なんて裕子ちゃんを差し置いて、金輪際未来永劫現れないんだからね」

こんなことを言う母親がいるだろうか。玲子は分析する。おそらく母は、裕子に来てほしいのだ。容姿は普遍的だが中身に少しだけ欠陥があるかもしれない娘ではなく、その親友である、容姿はまあまあ中身は悪くない女の子に理想の娘像を見ているのだ。やれやれと思う玲子だが、それならそれでべつにかまわない。もちろん自分を捨てて裕子を養子にするなどと言いだしたら困ったものだが、そこまでとち狂ってはいないだろう。ただ少し寂しがっているだけだ。

玲子は立ちあがり、冷蔵庫から新しいミルクのカートンを取り出す。グラスに冷たいミルクを注ぎながら、母親に何か言ってやろうと思ったが、特に言うことがないことに気づいてそのまま椅子に座った。

「ねえ、裕子ちゃん連れてきてよ。裕子ちゃんがいないと、私あんたの様子もわからないんだから」

玲子は想像していた母の胸中に少しだけ書き足しをした。どうやら自分にさっぱり愛想を尽かしていたわけでもないらしい。どうも裕子という緩衝材がないと、自分のことがわからないようだ。自分という固い固い金属玉が落ちてきたらこわいから、裕子という深い深い海のような存在を欲している。どぼんと水滴を跳ね散らかして運動エネルギーを失ってゆっくりと沈んでくる自分でないと、受け止める自信がないのだ。そこをダイレクトに雄々しく受け止めるのが母親というものだろうと玲子は思ったが、そう伝えても「ええ、痛いのがやだ」という返答が返ってきそうだったので、何も言わないことにした。

「私のことなら言ってるじゃない。明日合宿に行くって」

「それは聞いたけど、なんていうのか、もっと裏側みたいな、根っこの部分が知りたいものなのよ、親っていうのは」

「きいてくれれば答えるけど」

「どうせあんたに何きいても、わからないとか、興味ないとか、そういう返答が来ることくらい

わかってるの。何年あんたの母親やってると思ってんの」

わかるのか、わからないのかどっちだろうか。それに、そんなことない、と反論しそうになったが、たしかに当たっている気もする。でも、ここ最近の自分の変化を鑑みれば、一概にそう断じるのは間違いであるという気持ちがあるのも本当だ。自分でも驚きだが、高校生になってから確実に自分は変わってきている。根拠はないが、自信がある。

玲子の変化するに伴って、裕子も変わっているのだろうか。自分なしでも一学期をすごしていたのだから、おそらくなんらかの変化が彼女にもあるだろう。お互いに、これほど離れて生活するのははじめてだから、変化がないほうがおかしい。それがよい方向なのか悪い方向なのかはわからないけれど。

「ふう、食べた」

大皿いっぱい盛られたスパゲッティをやっつけて、玲子は満足そうに身体を背もたれに預けた。ミルクの入ったグラスに付着した水滴を眺める。つるりとした表面を滑って大きくなりながら落ちていく液体にふと自分の姿を描き重ねた。周囲を吸収しながら自分は変わっていく。高校という新たなフィールドで。裕子がそばにいない環境で。

水滴がグラスの底に到達して、消えた。そこに未来の自分を想像することは玲子にはできなかつた。

rule.1

合宿の日の朝、玲子は駅前のロータリー近くに立っていた。集合場所である駅前には、朝からさまざまな人種が入り乱れて出かけていこうとしている。必死で幼い子供の暴走を食い止めて足元に落ち着かせようとしている両親、夏休みなんてないに等しいスーツ姿のビジネスマン、精一杯のおしゃれを身に纏った女子学生。おしゃれのベクトルを間違えている感が強いおばさん連。その他多種多様のごった煮である。

空には淡い青色が一面に広がり、雲のかけらがあちこちに散見される。小学生が画用紙に描いたような空模様だった。これなら今日はずっと晴れのままだろう。

玲子は腕時計を確認する。集合時間まであと二十分ほどある。少し早く着いてしまった。のどが渴いたので、駅内の売店にお茶を買いに行く。本当はコーヒーが飲みたいと思ったが、金属の器に封じられたコーヒーなど、玲子はとても飲めない。あんなものを買う人間の気が知れない。いろんな人間が触ったであろう飲み口に自分の唇を触れるなんて。

ロータリーに集まる人々はみな暑そうにその額に汗を浮かべている。まだ早い時間だというのに、今日は朝から気温が高い。玲子は暑いのが苦手なので、日陰に移動してお茶を飲むことにした。

駅のなかから電車が出発するとき流れるベルの音が聞こえた。高音で、まるで鳥の声のようだと玲子は思った。

本物の鳥の声を最後に聞いたのはいつだっただろうか。あれはたしか幼い頃。まだ自分たちが小学校低学年で、物心という淡い想いすら抱く前だった。自分はいつもぼーっとしながら周囲のことに思いを巡らせていた。裕子は目についたすべてのものに飛びつくように寄って行っては周囲をかき乱して困らせていた。思えばあの頃からふたりとも今に至る準備を知らずうちに重ねていたのかもしれない。ふたりとも、あまりあの頃と変わっていないだろう。唯一の例外として、一緒にいないことだが。

四年生のとき、夏休みに市外の山へとキャンプに行った。母が運転し、後部座席に裕子とふたりで座った。お盆明けだったと思う。お盆の意味すらわからずに、手足の生えた茄子を見て不思議に思ったことを覚えている。意味を母にきかなかったのは、裕子が教えてくれたからだ。

「この茄子はね、私たちのおばあちゃんのお母さんとかそういう人たちがなかに入って動くんだよ」

あんな途方もない嘘を素直に信じるなんて、自分がいかに頭の足りない子供だったかの証明になる。お盆の日はずっと茄子を眺めていたが、自分で時折つつく以外はぴくりとも動かなかったので裕子に騙されたとようやく気づいたのは数日後だった。しかし嘘だったのかとすぐに納得してしまった。どうでもいいと思ったから。

どこの山だっただろうか。車で山道をずんずんと進み、二時間ほど走るとまわりの景色は都会のそれからすっかり田舎の風景に変わってしまった。幼い自分は世界は広いものだと思った。山道を車で走ると必ず酔った。窓から顔だけ出して嘔吐をまき散らしたこともある。母は気遣うどころか爆笑していた。裕子は涙目で自分の心配をしてくれた。どちらが肉親だかわからない。

キャンプ場は高い樹木に囲まれて、陽射しが地面まで届かないところだった。杉やブナの木々

の表皮を触るとその冷たさに驚いた。頬をつけると気持ちがよかった。裕子とふたりでブナの木に頬ずりする姿を見て、母はまた爆笑していた。今思えばひどい母親である。

母がひとりでふうふう言いながらテントを組み立てている間、裕子とふたりで川の浅瀬で遊んだ。魚がいたが、足を近づけるとすぐ逃げてしまった。石をひっくり返すとぞわぞわと虫が蠢いていた。あの頃は生き物に興味があったのだ。

遊んでいると、ふと静かになる瞬間があった。そのとき聞こえた鳥の鳴き声は妙なものだった。ピロロロロ、と笛のようなベルのような人工の音声に聞こえたのだ。それら記憶が、電車のベルで呼び起された。

玲子は過去の回想に耽るあまり、目の前に演劇部員三人が勢揃いして自分を見つめていることに気づかなかった。それほどに、ぼーっとしていたのだ。

玲子は両目を左右に振った。そして正面を見据えて頭をさげた。

「おはようございます」

三人はそれぞれに特徴ある笑い方をした。

「考え事してたのか？」

玲子は美奈子の質問に答える前に、彼女の服装を評価した。

とても女子高生ルックとはいえない。いやそう断じるのは早計である気もする。こういう女子高生もいるだろう。制服ばかり見なれているから、ボーイズルックに包まれた美奈子の姿が新鮮なのだ。ミルクのように真っ白な無地のTシャツにワゴンセールにありそうなデニムのショートパンツ。サンダルは地元のスーパーで売っているのを見たことがある。シャツに透けて見えるブラのかたちはいささかセンスに欠けるものだが、美奈子はそういったことを気にしない人種なのだろう。

しかし、玲子の視線を独占して奪ったのは、美奈子の黒髪だ。いつもはすもと肩までおろしているのに、今日は後頭部でひとくりにまとめてポニーテールにしている。汗で張りついた前髪の乱れ具合がじつに自然で、しっとりとした触感が触らずともわかる。玲子は自分のスイッチがオンに切り替わったのがわかった。

「ええ、ちょっとむかしのことを」

「感傷に浸ってたみたいね、玲子ちゃん」

梨紗の私服はじつに女の子らしい。淡い水色のワンピースに桃色のパンプスを履いている。日除けにUFOみたいな白い帽子をかぶっている。帽子のしたから伸びる栗色の髪は美しい。しかし、美しいだけだ。美奈子のそれとは質が異なる。

「裕子のことを考えてたんですよ」

「思わずいたずらしたくなるくらいぼーっとしてたよ。うしろから胸をわし掴みしてやろうとしたんだけど、美奈子さんに止められてさあ」

奈央はどこから見ても少年である。背が低いのが主な要因であるが、服装が少年であることを強調しすぎなのだ。キャンプに参加する小学生を想像すれば、ぴったりイメージと実像が一致するだろう。男子女子問わず。

「美奈子さんありがとうございます」

「部内の風紀を守るのも部長の役目だからな」

「なんですか、私が風紀を乱してるってことですかあ？」

「そのつもりで言ったんだが」

「失敬な！ べつに私は玲子の胸を触ってやりたいと思っただけですよ！ それで大きさを比べようよ」

「触らずとも私がジャッジしてやる。玲子のほうがかたちがよくて大きい」

「ひどい！」

「事実だ」

「朝からお盛んねえ」

こうなると玲子は話に加わることができない。そういった会話のスキルはまだ玲子にはないのだ。裕子ならいいコメントを挟めるかもしれないと玲子は思った。ところで美奈子はどうやって自分の胸について知ったのだろう。触られた覚えはないが。

「ところでどこに行くんですか？」玲子は話題を変えようと発言した。

「合宿だが」美奈子が答えた。

「ええ、そうですが、場所はどこです？」

「なに、市外のとある秘境だよ」

美奈子の答えにはどこかはぐらかさうという意思が働いているように感じる。自分が知ると都合でも悪いのだろうか。玲子は梨紗と奈央にも視線を向けてみたが、ふたりともそれぞれにほほ笑みを湛えるだけで、そのほかになんら情報を伝えようとしなない。

「そうですか」玲子はこれ以上きいても無駄だと断じて、口を閉じた。どこでもいいやという開き直りの境地に達したのだ。どうせどこに行こうと、三人が一緒なのだから構わない。

「じゃあそろそろ行きましょうか」

「そうだな」

梨紗と美奈子が駅構内へと歩き出した。奈央と玲子のふたりは彼女たちのあとを母鳥に従うアヒルのようについていった。

rule.2

車内から見える景色が流れていく。遠くのほうはゆっくりと、手前のほうは高速ですぎ去っていく。家屋の流線形の向こうには、畑の中に点々と建つ工場がベルトコンベアに載せられたように動いていく。

玲子は窓際に座ってそれら景色を眺めていた。となりに座る奈央は次々とお菓子の袋を空にし、向かいの美奈子は頬杖をついて膝に置いた文庫本に視線を落とし、そのとなりの梨紗は斜めうえに首を傾げてぼんやりしている。車内の空気はまったりとしてクーラーがよく効いている。

静かな移動時間だった。誰も無駄口をきかず、聞こえるのは奈央がお菓子の袋を開ける音とぼりぼりとスナック菓子を噛み砕く音、そしてガタンガタンと規則正しく揺れる錆ついた車輪の音だけだ。時折流れる車掌の到着地点のアナウンスはのんびりとしていて、本当に着くのだろうかかと幻想させる。

出発地点の発展した街並みはすっかり消え失せ、窓から見える流系の景色は田舎のそれである。天気は上々。遠くのほうまでくっきりと見渡せる。玲子は手前ではなくできるだけ遠くの景色を見るように努めた。

ぼんやり遠くを眺めていると、心地よい空調と定期的な揺れの効果も手伝い、玲子は瞼が重くなってきた。寝てはいけないわけではないが、玲子はなるべく目を瞑らないようにした。今寝てしまうとなんとなく寂しい夢を見てしまいそうだったからだ。二泊三日の合宿を楽しいものにするためにも、はじめから意気消沈するわけにはいかない。玲子は最後までなんとか寝ずに踏ん張った。

電車での移動時間は二時間ほどだった。降り立った駅は山のなかに設えられていて、周囲には人工物がほとんどない。バスのロータリーもなければ、地下街への入り口もない。聳え立つビル群もなければ、大通りを走るタクシーの姿もない。完全無欠なカントリーだった。

美奈子と梨紗の先導のもと、四人は駅を出て山道を登っていく。梨紗以外はアウトドア系の服装だったため山登りに不自由は感じられないだろうが、梨紗はしゃれている。履いているパンプスはとても山登りに向いているとはいえない。しかし、梨紗はそんな悪条件でも雄々しく美奈子のとなりを並んで歩いた。うしろからその姿を見ていた玲子は梨紗の意外な一面に驚いた。奈央が小声で、「梨紗さん、意外と強いんだよ」と耳打ちした。

山道はどんどん険しくなってきた。勾配が急になり、足元は踏み固められた土から砂利と雑草が乱雑に生え散らかるけもの道へと変貌した。しかし四人はまったく疲れた様子を表さない。登下校の坂道の登り降りですごされているのだろう。それでも四人の額には汗の粒が浮かんでいた。

しだいに木々の枝が四人の頭上を覆うかたちになり、日の光が地面まで届かなくなった。日陰の涼しさを玲子はありがたく思った。

ふいに目前に開けた空間が現れ、美奈子と梨紗が足を止めた。「ここで休憩しよう」

梨紗が肩かけのポーチからビニールシートを取り出して地面に広げた。よくそんなものが入っていたな、と玲子は不思議に思ったが、続いてポーチから水筒と紙コップを取り出したので、不思議さは濃度を増した。

カバンをおろして四人はビニールシートに尻をつけた。シート越しに地面の冷たさを感じて玲子は気持ちよかった。

「はい。冷たいわよ」

梨紗が差し出してきた紙コップには麦色の液体がなみなみと入っていた。玲子はそれを受け取り口をつける。

口の中がその冷たさに驚いて歓喜し、舌がその味に触れて喜び、のどを潤していくそのありがたみが、玲子を感動させた。天与の飲み物だと玲子は思った。

「これなんですかあああ、めっちゃめっちゃうまい！」奈央が大声を上げた。

「ただの紅茶よ。ちょっとハチミツが入ってるの」

「やっぱり疲れたときに飲むと一層うまいな」

「えっ美菜子さん、これよく飲んでるんですか？」

「梨紗の家に行くところが出てくるんだ。夏は冷えていてうまいし、冬はホットだから身体があつたまる。一年通して有用なドリンクだな」

「えー私も梨紗さんのおうち行きたーい」

「いつでも来ていいわよ。言ってくれたらね。アポイントメントなしで来てもダメだけど」

「予約があるんすか？」

「普通そうだろう。どこの世界に突然訪れる非常識な人間がいるんだ？」

「たまにいますよ」玲子が呟いた。

三人は一斉に玲子を見た。思いついたように発言するものだから、びっくりしてしまうのだ。

「へえ、裕子ちゃんはいつも突然来るの？」梨紗が優しくきいた。

玲子は頷いてからお茶を飲んだ。奈央の言うとおりに、とってもおいしい。

「幼馴染は礼儀礼節をつい忘れてしまうものだからな」

「美菜子さんも忘れてたりします？」

「いや、私はいつも前もって一報入れるよ」

「嘘ばっかり」梨紗が呆れたように言った。

「はあ？」

「一度いきなり来たことがあったじゃない」

「いつの話だ？」

「ほら、五年生のときさ、手紙抱えて泣きそうな顔してうちに来たじゃない」

「手紙？」

「泣きそうな顔？」

玲子と奈央は同時に違う点に食いついた。

「梨紗、お前」

「いいじゃない、話しても。演劇部と関係なくもない話題でしょ」

ということは、と玲子は内容を想像した。「サロン」で話したとき、美菜子は男が嫌いな理由は嫌いだからと子供の理論を展開した。玲子はそのとき腑に落ちなかったのを覚えている。美菜子ほど聡明な人間がかような理由を言い訳にするとはいえない。裏の理由が必ずあるはずだ

とずっと疑っていたのだ。ただ話してくれないのなら、べつにそれはそれでいいと思っていたので、無理に聞き出そうと詰め寄るようなこともしなかった。

五年生のときに何があったのか。何があったにしても、それが今日的美奈子の男嫌いの根源となっているに違いない。玲子は聞く姿勢をとった。

「聞きたいです」

「私もー」

「ほら、かわいい後輩たちがこう言ってるのよ」

美奈子はまるで酒をあおるかのようにぐいっとコップのお茶を飲み干して、どすんとシートの上にコップを叩きつけた。

「そこまで言うのならいいだろう。話してやる」

玲子と奈央は身を固くした。梨紗は見守るようにほほ笑んでいる。

「まず私と梨紗の出会いから話そうか」

美奈子と梨紗は小学校からのつき合いである。当時のふたりはまだまだ幼く、美奈子は現在のカリスマ性を包み隠して大人しい女の子を演じていた。梨紗は当時からその柔和な笑みを湛えてまわりに振りまき、男女問わずたいへん人気があった。一見接点が特にないふたりが近しい友達となったきっかけは、低学年のときに参加したキャンプで同じ班になったためであった。

学外の催しに別々に申込み、たまたま同じ班員となった美奈子と梨紗は、はじめそのキャラクターの違いから会話もなく、同じ学校に通う顔見知りという関係にあった。キャンプでは様々なレクリエーションが行われ、班ごとに活動することが多い。梨紗は笑顔ひとつで班員たちを安心させ、皆に頼られていた。美奈子もその中に混じっていたが、べつに梨紗を好いていたわけではなく、単に梨紗がリーダーシップを発揮していたのでその輪のなかに加わらなければ孤立してしまうという、うしろ向きな理由からであった。

レクリエーションは日ごとに違い、テントの組み立て、昼食の材料収穫からその調理、森での自然観察や昆虫採取、キャンプファイヤーの薪拾いなど、班員で協力して進めるものばかりだ。梨紗を先頭に、ふたりの班はそつなくこなしていった。美奈子は改めて梨紗のリーダー性に感心した。

ある日、ふたりの班の中でもめ事が起きた。きっかけはわからないが、女の子ふたりが取っ組み合いのケンカをはじめたのだ。お互いがお互いの髪を引っ張り、たたき合い、泣き声と怒号の入り混じった叫びがあがった。一班に一人つく大人のリーダーもおろおろとするばかりでどうしてよいかかわからない様子だった。梨紗は自分が班の代表だという自覚があったため、衝突するふたりの間に割って入った。そしていつものように笑顔を湛えて、その場を収めようとした。

だがすっかり火のついた班員は梨紗の説得に応じるどころか、にこにこ笑っている梨紗に矛を向けた。調子に乗ってる、威張るんじゃない、という非難を浴びて、梨紗は泣きそうになった。リーダーとしての責任を感じてやっているのに。あなたたちのことを考えているのに。どうしてそんなひどいことを言うの？

思わぬ飛び火に梨紗までもが負の怒りを持ち、三人でケンカになった。情勢としては梨紗対ふたりであり、梨紗の言葉はじつに正論であったが、気に入らないという感情がふたりをさらにヒ

ートアップさせ、大人のリーダーが困って涙を浮かべるほどの惨状を呈した。

美奈子はそれら鬭争をしばらく見つめていた。そして梨紗の言葉に耳を傾けていた。彼女は間違っただけを言っていない。それなのにどうしてふたりは彼女の言葉を聞き入れないのだろうか。理不尽だ。

頭の芯まで怒りに湯だったふたりがついに梨紗に手をあげた。両側からふたりで梨紗のシャツの裾を掴んで思い切り引っ張り、梨紗が困っているところを突いてふたりで両脚を蹴ったのだ。梨紗は苦痛に顔を歪めてその場にへたり込んだ。目には涙が浮かんでいる。さらにふたりは梨紗の髪を引っ張ろうとして両側から掴んだ。

そのとき、美奈子は動いた。

梨紗の髪を掴むふたりの手を払いのけ、自分のほうへと梨紗の手を引いて引き寄せた。そしてうしろに匿い、美奈子は一歩前に出てふたりの顔を順に睨んだ。

ふたりは美奈子に敵意の視線を投げた。興奮している様子なので何をするかわからない。

片方が美奈子の身体をどんと押した。美奈子は少しのけ反ったが、引かなかった。

そして、美奈子は汗で滲んだ手の平を、力いっぱい押した子の頬へとぶつけた。高い音がして、たたかれた子は尻もちをついた。

続いて美奈子はもうひとりの顔にも平手打ちを浴びせた。その子も同じように尻もちをついた。

「この馬鹿たれども！」

美奈子は心からそう叫んだ。うしろでは、驚いた梨紗がシャツと髪を直しながら美奈子の背中を見ていた。

以来、ふたりはお互いを尊敬しあい、認めあう間柄となった。

rule.3

「美奈子さんったら男前！」奈央がからかうように言った。

「ほんと、あのとき的美奈子はかっこよかったわあ」

梨紗は美奈子のコップにお茶を注ぎ足す。玲子はまだ中身が残っていたので遠慮した。

「それにしてもすごいセリフですね」玲子が指摘した。

「ああ、ついな。のどからあがってきたんだ」

「むかしからそんなふうなしゃべり方だったんですか？」

「私は普通にしゃべっているつもりだが」

「美奈子の言いまわしは普通じゃないわよねえ」

「ちょっと古風っていうか、その」

「かっこいいからいいんだよ！」

「お前らなあ」

「それで、続きはどうなったんですか？ 無事お姫様を救い出した勇者の活躍は？」

「そうよ勇者様。続きをどうぞ」

「さて、そろそろ休憩終わるか」

美奈子はコップの中身を一息に飲み干して立ち上がり、ぐーんと背を伸ばした。ばきばきという煎餅が割れるようなすごい音に玲子は驚いた。

「えええ、続きは？」奈央が不満の声を上げる。「手紙は？ 泣き顔は？」

「歩きながら話してやるよ」

「そうね、そろそろ行きましょうか」梨紗も立ちあがり、まだ不満そうに座っているふたりを追いやってシートを畳んだ。

「ぶー」奈央は両頬をハムスターのように膨らませながら玲子の肩を抱いた。玲子は暑いから触らないでほしいと思ったが、払いのけるようなことはしなかった。

「どうせなら座ってじっくり聞きたいよなあ」

「まあ、お茶もおいしかったですし、がんばりましょうよ」

玲子は言っただけながら驚いた。自分が人に対して「がんばりましょう」なんて発言をしたことを。玲子は何事もがんばるのが苦手なのだ。自分の能力以上のことはしないようにしている。だから人に対してがんばりましょうなんて言うことはなかったのだが、なぜだか口をついて出てしまった。どうしてだろう。

不思議に思いながら、コップに残ったお茶を飲み干した。

「さあ、ここからきつくなるぞ」

美奈子は元気よく言って、先頭を歩きだした。梨紗もしずしずとそのあとを追う。奈央が玲子の肩を抱いたまま歩こうとしたので、玲子はその手を握ってつなぐことにした。

「玲子ったらあ」先のお茶よりも甘い声を出して、奈央は握る手に力を入れた。

四人はさらに険しくなる山道を登っていった。

rule.4

裕子と千鶴は、四人を追いかけてべつの車両に乗り込んで息をひそめていた。ひそめなくても気づかれる心配はないのだが、裕子の探偵かスパイのようなただならぬ雰囲気自然と千鶴もつられてしまったのだ。

「今のところ気づかれていないようです」

「そうね」

千鶴はちよっとおざなりな返答をした。

演劇部の四人は合宿と称して今日どこかに出かけるという情報は裕子が入手したものだ。ふたりは追いかけて行って、現場で爆弾を投下することを目的として四人と同じ電車に乗り込んでいる。

今回の計画の中心人物である裕子はノリノリだが、千鶴はそうでもない。じつを言うと、帰りたいとすら思っている。美奈子への負の邪念はいまだ健在だが、何もここまでしなくても、という良識が働いているためにやる気が出ないのだ。それでもいやいや参加しているのは裕子の執拗なプッシュの甲斐あってである。裕子の邪念は千鶴のそれをやすやすと追い越して、もはや呪い殺さんばかりだ。万一のときには裕子の暴走を食い止めるという責任を千鶴は感じている。

一方裕子は、朝から楽しそうな玲子の様子にどす黒い嫉妬の炎をめらめらと燃やしていた。隠れているとはいえ、目の前であそこまで楽しそうにされたとあっては、裕子の心情たるや計り知れないものがある。今回の計画の成功を祈りながら、裕子は座席に深く腰掛けて肘掛を潰さんばかりに握りしめている。

「ねえお菓子どう？ そんなに張り詰めていても仕方がないわ。今は移動時間を楽しみましょう、ね？」

千鶴は少し熱があがりすぎている裕子にチョコレートを勧めた。

裕子は千鶴が差し出してきたチョコレートをぐっと睨んで、ふうと肩の力を抜いた。

「そうですね、私ちよっと張り詰めすぎてたかも」

「そうよお、まだ先は長いんだからリラックスしなきゃ」

「すみません」

「いいのよ」

裕子はチョコレートをひとつつまんで口に放り込む。夏の熱気で少し溶けていた。甘い香りが口の中に広がっていく。舌の上で弄んでいると、自然と心が落ち着いてきた。

「私、玲子以外の人とふたりで出かけるのはじめてです」

「あら、そうなの？」

「いつも一緒だったから。海を見にいたり音楽ライブに行ったり」

「楽しそうねえ」

「私はいつも楽しいんです。でも時々不安になることもあります。私と一緒にいて玲子は楽しいのかなって」

「きいたことはないの？」

「ありません。玲子には自分のどこがいいってきかれるんですけど」

「裕子ちゃんも同じこときいてみればいいじゃない」

「そうなんですけど、答えを聞くのがこわくて」

「なるほどねえ」

「私は玲子がどれくらい自分を好きでいてくれているのかわかりません。ずっと一緒にいたから嫌われてはいないでしょうけど、私がいないとダメだと思えるほど好かれているかは自信がありません。実際、ここ数ヶ月私なしでも玲子は高校生活を楽しんでいるようですし」

「つらいわね。私にもちょっと気持ちがわかるかも」

「そうですか？」

「一緒にしちゃうと誤差があるだろうけど、なんとなく恋愛関係にも同じようなことが言えるしね。彼は私のことどう思ってるのかとかさ」

「たしかにちょっとした違いはありますが、問題の本質は同じな気がします」

「だから私の経験から言うけど、裕子ちゃんは玲子ちゃんと話し合うべきだと思うわ」

「やっぱりそうですか」

「そうよ。私も彼がどう思ってるのか不安になってしばらく悩んだ時期があったわよ。つき合っていたけど、所詮他人だから話し合わないと本当の気持ちは見えないし。だから私、彼にきいたの。それで自分がどう思ってるか伝えたら、彼も気持ちを教えてくれたわ。不器用な伝え方だったけど、がんばって言葉を選んで話してくれた。それで気持ちが伝わってきて、絆が深まったように思えた」

「素敵ですね」

「すごい普通だけどね。もう終わったし」

「私も玲子と話すべきですね」

「そうよ。玲子ちゃんも同じこと考えてると思うわ。ずっと一緒だったんでしょ？」

「そう、だといいいんですけど」

「今は美奈子っていうよそ者にうつつを抜かしてるだけよ。玲子ちゃんのなかではちゃんと裕子ちゃんが一位のはずよ」

千鶴の慰めともとれるアドバイスを受けて、裕子は玲子に思いを馳せた。

玲子は自分のことを考えてくれているだろうか。

美奈子のごときは一時的なものなのだろうか。

黒髪への思い入れが解消したら自分のもとへと帰ってきてくれるだろうか。

帰ってきてほしい。

そのために今日玲子たちをつけている。

そのはずなんだけど、

なんだか、解決には向かってないような。

どうしたらいいんだろう？

裕子は自分の気持ちを正面から見据えることができず、黙考に沈んでいく。

rule.5

演劇部の四人は山道からけもの道へと路線変更してさらに高みを目指していた。

踏みしめる地面はもはや人が通ったというよりも森の動物が普段の通行に利用しているだけではないかと思われるほどに荒れていて、人間の足では険しい道のりだった。

「つらいっすねえ」奈央がふうふういいながら言った。

「おや奈央、もう根をあげるのか」美奈子がうしろを振り向いて笑みを浮かべる。

「だらしのないわねえ」梨紗が美奈子のとなりで呆れたように言った。

「見ためはスポーツ少女なのに、このなかで一番体力がないのは奈央ね」

四人の位置関係は、先頭に美奈子、半身差で梨紗、三歩後方に玲子、その十メートルうしろに奈央がいる。奈央以外は平気な顔をして姿勢正しく登っているが、奈央はそのへんに落ちていた木の棒を杖代わりにして三本脚である。

「意外と玲子は体力があるな」美奈子が感心したように言った。

「はい、久しぶりの全身運動ですから鈍ってるのを実感しますけど、この程度なら」

「あらあら」

「玲子てめえ！」奈央が後方で叫んだ。「私がだらしのないって言ってんのか！」

「そんなことはありませんよ。一般的普遍的な女子なら充分体力がある部類に入ると思います」

「そうね、私は客観的観察が苦手だからわからないけど、普通の子にしてはきついかも」

「三人がバケモンなんです！ 私は普通！」

「それだけ声が出るならまだまだ元気だな」

「美奈子さあん、私休憩したいよお」

「あと少しで着くからがんばって」

「うわあん」

「奈央さんががんばりましょう」

「玲子覚えてろよお。あとで犯してやる」

「じゃあ急ぎましょう」

「そうだな」

「そうね」

「ああん待ってえ、嘘だから！」

のん気な一行は、ずんずんと森の深奥に入っていく。後方からつけてくるふたり組に気づく由もなく。

「どこまで、行くのかしら」

千鶴の声には力がなかった。美しい栗色の巻き髪はカールを失い何やら無造作を極めたヘアスタイルになっている。前髪が汗で額に貼りついて、可憐な容姿が台無しである。息はあがり、足元は不安定、目は十分前から休憩の必要性を訴えている。

「大丈夫ですか？」

裕子は気遣う視線を千鶴に向けた。大丈夫でないのは承知のうえだが、のんびり休憩している

と敵に突き放されてしまうのだ。敵の行軍速度たるや尋常ではなく、その歩みは地を這う亀が意外なスピードで進むのを想わせる。

裕子は千鶴がどこまで限界に達しているのかをたしかめるために声をかけた。

「もう、無理」

裕子は前方に小さく霞む敵の進行軍を見た。そろそろ樹木の陰に隠れて姿を見失いそうである。しかし、まわりの様子からこの先はおそらく一本道であろうとあたりをつけて、千鶴のためにも休憩をとることにした。

「じゃあここでちょっと休みましょう」

「ぜひ、そうして」

千鶴は崩れ落ちるようにその場にへたりこんだ。やはり限界だったようだ。カバンからチョコレートを取り出して渴いた口に放り込み糖分を補給している。表情がどろりと緩んだ。それほどまでにおいしいのだろう。

「死んじゃう」千鶴が呟いた。何が原因で死にそうなのかはわかるようでわからない。

裕子は千鶴のとなりに屈んで、首に巻いていたタオルで千鶴の顔の汗をちょいちょいと拭ってやった。千鶴が猫のように首を動かしながら「うーん」と唸った。

「気持ちいい」

「タオル持ってないんですね」

「うん、だって山登るなんて知らないんだもん」

「たしかに、それはサプライズでした」

ど田舎にしか見えない駅で演劇部の四人が降りたとき、裕子と千鶴は「まさか」と顔を見合わせた。合宿と聞いていたので、もっとそれなりのところ、つまり少しでも都会の香りが漂う土地に行くものだと考えていたのだ。それが降り立ったところは山の麓だった。最低限発展した町を表すステータスシンボルであるコンビニすら見当たらない土地に茫然と愕然としながら、四人のあとを追っていくと、やはり山道を行きはじめたではないか。千鶴は諦めて帰ろうと裕子に提案したが、裕子が聞き入れなかった。

「ここまで来て引き返せません！ たしかにちょっと険しい道のりになりそうですけど、行く価値はあります」

手を握られて潤んだ目でこう訴えられては、千鶴はどうしようもなかった。「お願いします、私と一緒に来てください」

大きなため息をついて不意の登山を承諾してから、休憩するまで二十分はゆうに経過している。運動部に所属したこともなく、日頃なんら身体を鍛えていない千鶴にとっては二十分の登山は体力をすべて消費するのに十分な運動である。

「裕子ちゃんは体力あるわね。なんかやってたの？」千鶴は四つめのチョコレートを食べながら裕子にきいた。

「いえ、特別な運動は何もしてないんですけど、私歩いても疲れないうです」裕子は答えながら千鶴の髪を整えている。そのいじらしさに感動したので、千鶴は裕子の口にチョコレートを押し込んでやった。裕子はそれを唇ではさんで受け取った。

「ありがとうございます」

「いいのよ。私こそありがとう。裕子ちゃん優しいのね」

「いえ、これは」

裕子は千鶴の髪を整え終わると、タオルを自分の首に巻いてシャツの中に入れた。

「どうしたの？」

「ううん、なんでもないんです。もう落ち着きましたか？」

「裕子ちゃん」千鶴は裕子の肩に手を置いた。「大丈夫？ 私何か変なこと言った？」

「いえ、違うんです」裕子は平静を装って千鶴の手を握り、立ちあがった。

「行きましょう」

「うん、いいけど」

千鶴は急変した裕子のことが気になったが、理由を話してくれないので少し不満に思った。だが、どうやら自分の発言が原因らしいので、言ったことを頭の中で反芻して原因をクイックサーチしてみたが、よくわからなかった。

裕子は千鶴に背を向けて歩き出した。千鶴は一メートルほど間隔をあけて、あとをついていった。

rule.6

地上から遠ざかっているはずなのに、到着地点が川だということに玲子は少し疑問を持った。日々蓄積し続けている疑問のたまごだ。小さな疑問だが、子供が抱きそうなたしかな不思議だ。川は下に流れるのに高いところにあるなんて。

「やっと着いたあ。うおお、川だあ！」

到着して一番はしゃいでいたのは奈央だった。疲れていたのは演技だったのだろうか。さすが演劇部だと玲子は感心した。

早くも裸足になって川のほとりで涼んでいる奈央以外の三人は、荷物をおろして腰を伸ばしたり屈伸運動をしたりと年寄り臭かった。美奈子が屈伸すると、膝からぼきぼきとすごい音が聞こえた。梨紗が「いやねえ」と言った。

「涼しいですね、ここ」玲子は空気を肺いっぱい吸って吐き出した。森の香りが漂っているのがわかる。川の流れる音が優しくあたりに響いている。

「そうでしょ、よく遊びに来てたの」

「でも大勢で来たのは久しぶりだな」

「そうねえ。小学校以来ねえ」

「じゃあ最近は何人だけでここに？」

「ああ、毎年夏にな」

「通年催行の定例行事なの」

「幼馴染独自のイベントってやつですね」

「まあそんなとこね」

奈央は川の真ん中まで進んで両手で掬って盛大に水を放り投げている。まるで野生児のようだが、野生児はそんな無意味なことはしないだろう。つまりただの子供である。

玲子は空を見上げてみた。木々が高く生い茂り、それらに切り取られた青空から光が川に降り注いでいる。川の水が光を反射してところどころ煌めいて美しく輝いている。都会のビル群が作り出す煌めきとはまた違った趣がここにはある。

「さあ、まずは寝床をつくらないと」美奈子がうーんと背伸びをしながら言った。

「そうねえ」

「玲子、奈央を呼んできてくれ」

「はい」

玲子は川べりに近づいて奈央に声をかけた。

「奈央さん、美奈子さんが呼んでますよ。寝床をつくるんですって」

「うーい」

ばしゃばしゃと水しぶきをまき散らしながら奈央が近づいてきたので、危険を察知して玲子は半歩さがった。しかしそれでは足りなかった。

「うおりゃあ！」

奈央が右脚をばしゃんと前方へ蹴りだすと、川の水が膨れあがって玲子を襲った。咄嗟に両手で顔を覆ったが意味はなかった。思ったより多量の水が玲子に降りかかり、髪から靴まで全身

がびっしょり濡れてしまった。とても水が冷たく、ここの空気はひんやりとしているためくしゃみが出た。

「っちゅん」

「玲子かわいいよお」

奈央が川から上がってきて玲子に抱きついた。全身をまさぐられながら、玲子は奈央の身体の熱を感じた。温かいので、玲子も抱きつき返した。

「おお、玲子ったら大胆だねえ」

「寒いんです」

「じゃあ私があつためてあげるよ」

「お前ら何やってんだ。アホか」

気づくと美奈子がうしろに立っていて、ふたりの頭を平手打ちした。

「玲子が寒いっていうからあつためてるんですよ」

「お前が水ぶっかけたんだろ、見てたぞ」美奈子は玲子の頬を掴んで自分の顔のほうに無理やり向けた。「奈央を呼んでこいって言ったろ」

「呼んだんですけど、水かけられて寒かったんです」

「避けるよな」

「避けるまでもないと思ったんですけど、想像以上の大雨で」

「お前は意外とアホだよな」

「私と一緒にだよねえ」

奈央が頬ずりしながら玲子をきつく抱き締めてくる。言い返そうと思ったが、認めてしまってもいいような気がしたので沈黙を通した。

「さあ、テントを設置するぞ」

「了解！」

「わかりました」

荷物のところに戻ると、梨紗がどこから取り出したのかバスタオルを持って待っていた。まるで風呂あがりの子供を迎える母親のようだ、と玲子は思った。

開けた空間でシートを広げて優雅に休憩する四人を遠くから窺いながら、裕子と千鶴は草葉の陰に息をひそめていた。

その和気藹々とした様子がいかにも当てつけられているかのようで、裕子はやり場のない怒りを足元に転がっていた石ころにぶつけた。

「裕子ちゃん、ばれちゃうわよ」

「ごめんなさい、つい」

裕子が蹴飛ばした石ころは山道を転がり落ちていった。哀れな石ころである。しかし裕子には周囲の気持ちにまで気を配る余裕はない。

裕子は四人の様子を子細に観察する。玲子は美奈子のほうへと身を乗り出して話に聞き入っているようだ。となりにいる二年の部員がいちいち玲子の身体を触っている。玲子は嫌がっている

様子はない。あんないやらしい手なんか払いのければいいのに、私が近くにいたら追い払ってやるのに、と冷静に観察しているつもりでもつついやきもちを妬いてしまう。

「裕子ちゃん顔が赤くなってわよ、大丈夫？」

「はい、冷静です」裕子は嘘をついた。「顔が赤いのは暑いからです」

「お茶飲む？」

「いえ、大丈夫です」

千鶴はなぜかいらいらしてきた。裕子が心のなかの不満を堪えて表に出そうとしないからだ。目の前に話す対象がいるにも関わらず、ひとりで抱え込もうとするのが気に入らないのだ。

「あっ、立ちあがりました。出発するみたいです」

「そうね」わざと冷たく言い返してみる。それで裕子が気づくかどうか試してみた。

裕子は千鶴の様子を構うこともなく、じっと山道の先を見つめている。千鶴はお茶を水筒のコップに注いで一息で飲み干した。凍ったように冷たいお茶が頭にきんと響く。

「裕子ちゃんお茶飲んで。今からまたがんばらなきゃいけないんだから。熱中症になったらたいへんよ」

裕子はようやく千鶴の顔を見た。優しい微笑みを浮かべている。気遣われていることがわかり、裕子は反省した。

「ごめんなさい」

「ふふ、いいのよ」千鶴は笑った。できるだけ優しく。「私はここにいるわ」

川べりにはごろごろと石が転がっており、テントを設置するには向いていなかった。だから四人はまず石をどけて平らなスペースをつくる作業からはじめた。

美奈子が岩と石の間ほどの大きさのものをそのへんに放り投げ、梨紗は小さな石ころを除けている。奈央は大きさ問わず拾いあげたものをすべて川に叩き込み、「どっぼん漁法！」と叫んでいる。玲子は三人の取り残しを除けてできるだけ平らになるよう仕事に励んだ。

ある程度平らになり、四人が固まって寝るスペースが確保できたところで美奈子が体操をはじめた。全身の骨がぼきぼきと鳴る音が響いた。川の魚にも聞こえそうな爆音であった。

「美奈子それやめてよ」梨紗が休憩がてらのお茶を飲みながら言った。

「なんでだよ」

「びっくりするでしょ。山ひとつ向こうの熊にも聞こえちゃうわ」

「逃げていくからちょうどいいだろ」

「逆に寄ってくるんじゃない？」

「そりゃ寄ってきますよ。こんな美人が一堂に会してるんだから！」

「熊をも寄せつける私たちか」

「本当に来たらどうする？」

「どうもしないよ。逃げるに決まってるだろ」

「熊は意外とすばしっこいんですよ。逃げたりしたら追っかけてきて踏みつぶされちゃう」

「どうしようかしらね」

「とりあえずテントを組み立ててなかにこもって考えよう」

「そうね」

玲子はひとり離れて川の水で手を洗っていた。水がとても冷たい。足をずっとつけていたら風邪をひいてしまうだろう。

「おい玲子、手伝え」

「はい」

四人はテントの組み立てに取り掛かった。まず骨組をつなぎ合わせていく。奈央が途中でチャンバラをはじめるというハプニング以外はスムーズに進んだ。美奈子に拳骨をもらってからは奈央がぶすっとしていたので平和な運びとなった。

次に大きなクリーム色のシートを広げて四人で端を持つ。組み立てた骨組に上手に被せて各所を固定する。仕上げに四方の下端を引っ張ってたるみを伸ばす。キャンプ用のテントが完成した

。

「よし、まあまあだな」

「なか入ってみましょうよ！」

入口のジッパーをおろして奈央が一番に飛び込んだ。

「意外と広いなあ、それに暑い！」

内部から聞こえる奈央の声は少しこもっている。美奈子と梨紗も荷物を置くためになかに入っていた。玲子は入口から顔だけ入れる。

「ここに二泊するんだ」

玲子は呟くように言った。不安を感じたわけではない。喜びに似た感情が勝手に吐き出した言葉だった。

「とりあえず荷物はここに全部押し込め。すぐ出るぞ。まだ仕事があるんだからな」

「ええ、山登りで疲れたんだからちょっと休憩しましょうよお」

「そうね、さすがに私も足が痛いし。身体を休めましょう」

「お前らなあ」

「べつにあとでもいいでしょ」

「やれやれ」美奈子はため息をついた。「玲子も入ってこい」

「はい」

四人が入るとさすがに狭く感じる。荷物がスペースをとることもあって、四人はくつつくように固まって座るほかなかった。

「お茶飲む？」梨紗はきく前からすでにコップを並べている。

みなにコップが行き渡り、しばらく静寂の時間があつた。やはり山登りでの疲れが蓄積しているのだろう。先ほどまではしゃいでいた奈央は寝むそうにうつらうつらしている。

「奈央眠いのか？」美奈子がきいた。

「うーん、疲れました」

「そうねえ、ここ気持ちいいし、自然の涼しさと人肌の温かさがあるし」

「玲子は？」

「限界です」

「え？」

玲子はぱたりとその身を倒した。美奈子の膝のうえに。

「おいおい」

「あらあら」

「こいつめ！」

玲子の耳にはもう外の声は届かない。電池が切れたように眠ってしまった玲子の様子に驚いて、三人は顔を見合わせた。

「玲子ちゃんかわいいわねえ」

「美奈子さん立ちあがってみてくださいよお。玲子の頭が床に当たってゴトンって音するかも」

「特別だぞ」

美奈子は玲子の頭に手を置いて髪を撫でてやった。美奈子の手と知らず、玲子はやわらかい笑みを浮かべた。

「玲子ばかりずるい！」

「じゃあ奈央は私のところにおいで」

梨紗は奈央の頭を無理やり自分の膝のうえに引き寄せて、寝させる格好をさせた。

「梨紗さん」むにやむにやと言って、奈央は目を閉じた。

「楽しいわねえ」

「そうか？」

「大家族の姉妹みたいで」

「お前の理想か」

「最近のね」

美奈子と梨紗は顔を見合わせておかしように笑った。妹たちが起きたら、膝枕を切り札に死ぬほどこき使ってやろうと美奈子が提案すると、梨紗がそうねと賛同した。

rule.7

「こんなところがあるのね」

「ここでキャンプするみたいですね」

裕子と千鶴は四人から離れたところの木の陰に隠れて様子を窺っていた。徐々に平坦になってきた山道がふと終わり、突き当りは石がごろごろと転がる川べりになっていた。木々のしたを流れる川の音だけが規則的な音楽を奏で、さらさらと降り注ぐ日の光が柔らかくあたりを照らしている。その川べりで石を四方に放り投げながらテント設置にせっせと汗を流している玲子の姿を裕子は眺める。

「玲子楽しそう」

「ああいうアウトドア好きなのかしら？」

「はい、むかしは私と玲子と玲子のお母さんとで夏にキャンプに行ってたんです。そのときの玲子は少しだけど、いつもよりも生き生きして見えました。ちょうど今みたいに」

「そう」

千鶴は残念に思った。おそらく裕子もがっかりしているだろう。玲子が好きなのはアウトドアだとわかったからだ。裕子と一緒にキャンプではなく。

テントが完成したようで、四人はなかに入っていく。裕子と千鶴はじりじりとテントのほうへと距離を詰めていく。木の陰から陰へと身体を隠しながら近づいていく。テント内では動きが止まったようで、ふたりの人間が座る陰が見えている。残るふたりは寝ころんでいるのだろうか姿が見えない。

「ここでしばらく観察しましょう」

「どうするの？」

「動きがないようなら、このまま突入します」

「もう？」

「はい、もう待てません」

「もう少し慎重に事を運んだほうがいいんじゃない？」

「これ以上焦れても状況は変わりませんよ」

「でも」

裕子は千鶴に向き直り、手を取った。

「行きましょう、時が来たんです」

千鶴は迷った。良心と復讐心が心の中で議論する。無関係の人間まで巻き込んで傷つけて、それでもやる価値はあるのだろうか。

美奈子への復讐。

それが価値だ。

それが本題だ。

それが目的だ。

でも、

梨紗はどうなる？

千鶴は裕子を見据えたまま、どうしてよいかわからずにいると、裕子が握る手に力を入れた。

rule.1

玲子が目を開けるとそこは誰もいないテントの中だった。

起きあがって荷物を確認する。テントの片隅にすべての荷物は揃っていた。自分のリュックの中身を確認する。何もなくなっていないことを確認してから、入口のジッパーをさげて外に出た。

夜になっていた。

きーんという音が玲子の耳に届く。自然のなかでしか聞き取れない、森の植物と川の流れが奏でる自然界独自のメロディだ。

川の流れは昼間よりも穏やかな気がする。余計な音がないためだろう、水が岩をたたく音、川なかで石が転がる音、段差を乗り越えて水が進む音がとても大きく聞こえる。人の息遣いや小石を踏みしめる音といった複雑でいやらしい人工音がないからだ。結果として、全体的に穏やかな印象を与える空間が作りあげられている。

玲子は疑問に思った。

みなはどこに行ってしまったのだろうか？

自分は昼が夜になるほど長い時間眠っていたらしい。これは妙なことだ。なぜなら玲子は昼には短時間しか睡眠をとることができないからである。それは裕子とすごしてきた日々が証明している。疲れた日の午後は昼食後に電池が切れたように眠くなる。昼休みに我慢できずに机に突っ伏してしまうとき、いつも向かいに座る裕子が受け止めてくれた。一度裕子が席をはずしている間に机に頭から倒れこんで騒ぎになったことはあるが、それ以外は平和な睡眠をとったものだ。

あたりを見渡してみる。玲子はまた疑問を抱いた。

ここはどこだろう？

振り返ってテントを見ると、昼に皆で組み立てたものとはサイズもカバーも色も違っている。しかし見たことはあるものだ。

どうなっている？

自分はどこにいるのだ？

大声を出してみようか。近くに誰かいるかもしれない。もしいたとしても、演劇部の面々ではないだろう。学校の先生かもしれないし、総理大臣かもしれないし、母親かもしれないし、裕子かもしれない。

「あの一」

絞り出した声は夜の空気に押し戻されたかのように玲子のまわりのみでこだました。てんで小さな声で、とても遠くのほうまで届いたとは思えない。

「誰かいないの？」

今度は無理をせず普段通りの声で言ってみた。先の声よりも遠くまで届いたかもしれない。向こうに見える木の陰で何か動いた気がした。だがそれは夜風で木の葉が揺れただけだった。

玲子は移動してみることにした。テントの外に出してあった靴を履く。

さらに玲子は疑問を見つけた。

靴が小さいのだ。

しかし自分の足にはぴったり入るサイズである。だが登山のときに履いていた靴とは違う。ついでに言うと、登山のときに歩いてきた足の大きさではない。まるで小学生の足だ。

玲子はまず顔を触ってみる。頬を両手で挟んでからつねってみる。

痛くない。

だがそれは玲子にとって普通だ。ちょっとした刺激では頬に何も感じないのが玲子の特質である。しかし先日奈央に思い切りつねられたときはさすがに痛かった。

頬はもちもちしている。奈央が感動するのも無理はない。自分でも触っているとむくむくとうれしくなってくるほどに触り心地がよいのだ。

これらから得られる結論を冷静に考察すると、今、自分は夢のなかにいるようだとわかった。

決定的な理由として自身の身体が幼児退行化していることがあげられる。見おろすとそこには胸がない。いやあることはあるのだが、膨らみがないという意味だ。さらに、手足はほっそりとしているし、足のサイズは明らかに小さい。服装も違う。これら物体の変質は現実ではありえないことだ。

夢のなかだとわかったので、玲子は開き直った大胆な気持ちになってきた。自分がどういう状況に置かれているのか観察してみよう。そういうポジティブシンキングすら可能な精神状態となったのだ。

川の流れを観察するため、石をざくざくと踏みしめながら川べりに寄っていく。近づくにつれて、水流の音が大きくなった。屈んで水に手を触れてみる。冷たいという信号が脳に届いて快感の感情が生まれた。表情が緩む。

両手で掬って水を飲んでみた。自然の中を流れる水は、鉄のパイプを通ってきたそれよりも甘い。ミネラルの量や硬度が違うのだろうか。玲子にはよくわからない。

立ちあがってあたりを見渡す。動くものを探してみたが、夜風に揺れる木々の葉以外には何も生物を観察できなかった。あたりはしんと静まり返り、水流ときーんという音ではない音しか聞こえない。

テントに戻ってもう一度寝てしまおうか。そうすれば次に起きたときには美奈子の膝のうえかもしれない。もしかしたら今でも膝のうえに頭を置いているかも。美奈子が自分の髪を撫でてくれているかもしれない。そう考えると玲子はうれしくなった。

夢のなかで笑うと現実の自分も笑うのだろうか。だとすれば、美奈子は気持ち悪がって撫でるのをやめてしまうかも。玲子は努めて無表情を保つことにした。できるだけ美奈子に撫でてもらいたいから。

ふと、木々の間に不自然なカラーを見つけた。自然保護色ではない、オレンジと白。人間の産物である文字が、オレンジの下地に白く書かれている。距離があつたので玲子には読めなかった。

あれはどう考えても人だ。玲子は直感的に思った。まさか熊がオレンジのシャツを着てこちらを見ているとは考え難い。

誰だろう？

向こうもこちらを見ている。木の葉が落とす陰で顔は見えないが、身体が自分のほうを向いて

いた。玲子はその人物のほうへと近づいていく。

玲子が歩を進めると、向こうもこちらに歩いてきた。徐々に顔の輪郭があらわになり、表情が見て取れるまでに顔が夜空の光に照らし出された。

玲子は歩を止めた。向こうも止まる。お互いに顔をじっと睨んだままこう着状態になる。

「玲子」

裕子が玲子の名を呼んだ。

「何？」

「久しぶりね」

「そうかな」

「そうよ。しばらく話してなかったじゃない」

「でもここへは一緒に来たよ」

「ううん、たしかに私は玲子のとなりにいたけど、一緒じゃないよ」

「どういう意味？」

「ふたりの距離は遠いってこと」

「そうかな」

「玲子が地球ならね、私は月」

「背は同じくらいだよ」

「距離の話よ。それと態度と」

「そうかな」

「玲子は自分の好きに動いてる。ひとりでくるくる回って遊んでるの。それで私はその周囲を軌道に乗って周回してる。それが私たちの関係」

「私そんなに回ってる？」

「回ってるよ。知らなかったの？」

「うん」

「私、ついていくのに必死なんだから」

「へえ」

「でもね、違った」

「何が？」

「玲子が回ってるのにはちゃんと意味があったの。じつは私と一緒に誰かのまわりを周回してたの」

「誰の？」

「知らない？」

「わからない」

「じゃあ教えてあげない」

「意地悪」

「そうよ、私、意地悪なの」

「べつにいいけど」

「ほんと？」

「うん」

「私が意地悪でもいいの？」

「いいんじゃない？ 私困らないし」

「そう」

「うん」

「じゃあね」

「どこ行くの？」

「気になる？」

「べつに」

「そう」

裕子はくるりと振り向いて木々の間に消えていった。

「裕子って意地悪だったんだ」

新たな発見を得て、玲子は満足した。そういえば裕子の姿が小学生ではなく高校生のままだというのはどういうことだろう。話しているときには気づかなかった。たぶん裕子を見ていて自分の姿を見ていなかったからだろう。比較ができないから思いつかなかったのだ。

「まあいいや」

玲子はテントに戻り、ごつごつしているが申し訳程度に平らな床にごろんと身を倒した。眠くはなかったが、それでも目を瞑った。美奈子の黒髪のことを考えた。起きたところが美奈子の膝のうえだったとしたら、ふいをついて髪を触れるだろうかとかやましいことを思いついた。忘れないように「黒髪、黒髪」と呪文のように唱えながら、玲子は目を閉じ続けた。

rule.2

「勘弁してくれよな」

「かわいいじゃない」

美奈子と梨紗はそれぞれ膝のう上に有機物の荷物を抱えたままの状態では話をしていた。

美奈子の膝う上で眠る玲子の口がぱくぱくと動いている。同時に音声が飛び出してきて、ふたりにはそれがどうも「黒髪」と連呼しているように聞こえるのだ。

「こいつ夢の中でも私の髪に熱をあげているのか」

「そんなに焦らさなくても触らせてあげればいいじゃない」

「誰が焦らしてるんだ。嫌がってるんだよ」

「髪のひと束やふた束で細かいわねえ」

「妙な数え方するんじゃない。梨紗代わってくれよ」

「そんな器用なことできないわ。起こしたらかわいそうよ」

「私のほうがかわいそうだよ」

梨紗は膝のう上で眠る奈央の頭を撫でている。寝ているときは赤ん坊のようにかわいげがある奈央だが、起きると癩癩玉みたいにはじけるので困ったものだ。

「美奈子の髪は何でできてるのかしら」

「タンパク質に決まってるだろ」美奈子は玲子の頭を撫でるのをやめた。おそらく自分が触っているから玲子は髪を夢で見ってしまうのだと気づいたからだ。

「絶対それだけじゃないわ。たくさん人間が惹きつけられてる事実があるんだもの」

「成分はどう考えてもタンパク質だろ。惹きつける要素はまたべつの問題だ」

「へえ、じゃあ何が惹きつけてるの？」

「芸術なんかと同じか、あるいは催眠効果みたいなものじゃないか？」

「どちらにしても、美奈子の髪が特別だってことにはかわりはないわね」

「いっそショートにしてみようか」

「似合わないじゃない」

「そうだよな」

「そうよ」

「ところでさ」

「ん？」

「言わないからな」

「何を？」

「手紙のこと。こいつらに」

「まあいいんじゃない？ 美奈子が本当に嫌だってちゃんと言ったらふたりだって納得するわよ」

「だいたいお前が余計なこと言うからこういう事態を招いたんだろ」

「ちくちくとしつこいわねえ。過ぎたるは及ばざるが如しって言うじゃない」

「用途が違うんじゃないか？」

「そうだっけ？ 起こっちゃったことはしょうがないでしょ、って意味でしょ？」

「それをいうなら、覆水盆に返らず」

「まあなんでもいいけど」

他愛もない話を続けるふたりの膝うえでは、もう口づけしなければ目を覚まさないのではないかと思われるほどに深い眠りにについている玲子と奈央の姿がある。傍から観察すれば、さぞ平和な光景に見えるだろう。しかし、その平和はさらにふたりの乱入者の登場によりあっけなく崩壊することとなる。

玲子は目を開けた。天井にはクリーム色のシーツの裏側が見える。吊りさげられたペンライトは光を投げていない。どうやらまだ日の光は沈んでいないようだ。

「起きたか」

玲子は目線だけ動かして声の主を探す。美奈子の顎が見えた。

「美奈子さん」

「起きたならどいてくれるか。さすがに膝の感覚がなくなってきたよ」

重い頭を持ちあげて美奈子の顔をじっと見た。ぼんやり眼に映る美奈子は髪をうしろでまとめている。玲子は無意識を装って黒髪の束に手を伸ばした。

「やめんか」美奈子にその手をぴしゃりとたたかれてひっこめた。

「寝ぼけを装うんじゃない」

「ごめんなさい」

「玲子ちゃんったら」

隣では梨紗が奈央を膝のうえに乗せてまったりとした表情を浮かべていた。

「奈央さんも寝てますね」

「そうよ、私たちだけ眠れなくてふたりの面倒みてたんだから。まあなんにもしてないけど」

「そろそろ奈央も起こせよ」

「そうね」

梨紗は奈央の肩を揺さぶって「ほら、起きて」と声をかけた。

奈央ののどがごろごろと鳴ったので、じつは正体は猫なのではないかと思ったが、「なんですかあ？」と甘えた声をあげたので人間だとわかった。

「奈央、起きろ」

むにやむにやという音を本当に鳴らす人間を玲子のはじめて見た。どこで鳴らしてるんだろう。横隔膜か？

「おはようございますう」

「ええ、グッドなモーニングよね」

「昼すぎだけどな」

「こんにちは」

奈央がおぼろな目であたりを見渡してのそのそと梨紗の膝から頭をあげると、玲子の顔を両手で挟んで自分の顔を近づけてきたので、玲子は手を払って逃れた。

「なんですか」

「いや、お目覚めのキスを」

「いりません」

「えー、なんでよう」

「私が女で、奈央さんが女だからです」

「じつに説得力のある理論ね」梨紗が口を挟む。

「そうかな」

玲子は美奈子の顔を見た。自分に向けられた視線に気づいて、美奈子はさっとあさっての方を向いた。

「美奈子さん？」玲子はきよとんとしてきいた。

「さて、そろそろ仕事にかかるか」

美奈子は立ちあがり、テント入口のジッパーをおろして外に顔を出したところで止まった。そしてテントの中に戻ってきた。

「どうしたの？」梨紗がきいた。

「いやな、招かれざる客がいたもんだからさ」

「熊ですか？」

「いや違う」

「じゃあ誰よ？」

「見りゃわかるよ」

そう言うと美奈子は入口をばさっと左右に開いた。日の光がテントの中まで入ってきて床が少し照らされた。そこに人影がふたつあった。

rule.3

「あらあら、お客さんねえ」

梨紗がのんきな声をあげた。そのほか三人はテントの前で黙って予期せざる客人を見つめている。

「偶然ね」

千鶴の口調は無理やりで投げやりな感があった。どこが偶然だ、と四人も感じているだろう。

裕子はじっと玲子の顔を睨んでいる。久しぶりに対面する親友のおっかない表情の意味がわからず、玲子は首を少し傾げながら視線を送り返す。どうしたの？ というメッセージを視線に込めてみたが、親友の視線にはなんら返答の意はなかった。

「お前らここで何してる？」

業を煮やしたように美奈子が口を開いた。その迫力に裕子は少したじろいだが、玲子の前とあつては隙を見せるわけにはいかない。

「私たちカメラ部は、本日中村梨紗さんにお伝えしたいことがあつて参上しました」

物々しい裕子の口調がおかしくて、当の本人である梨紗はふき出してしまった。美奈子は怪訝な表情を崩さない。奈央は何が起こっているのか理解できていないらしく、しきりに視線をほうほうへと移している。

「それはそれは、ご苦労さまでした」梨紗はぺこりと腰を折った。

「なんすかあ、これ。ていうか、裕子ちゃんだっけ？ カメラ部だったの？」

奈央はもにやもにやと言ったが、裕子はそれを無視した。

「お伝えしたいこととは、先日の日曜日、北のほうの神社での梨紗さんの目撃情報についてです」

梨紗の表情が一気に曇る。不安が滲み出てきたのがわかった。玲子は梨紗の表情の変化を目の当たりしてから裕子へと視線を移す。不敵に邪悪に笑っていた。そんな親友の表情を見たのははじめてだ。

美奈子は梨紗を見つめている。梨紗は美奈子を見ようとはしない。梨紗が一步後退すると、美奈子が移動して梨紗の前に立った。

「お前らカメラ部が腐っているのは前々から知ってたがな、何もここまで追いかけてきて嫌がらせすることないだろう。ええ、千鶴？」

名前を呼ばれて千鶴は肩をすくめた。

「腐ってるだなんて人間きが悪いわね。私たちは健全で健康な部活動を行ってるつもりよ。去年の文化祭の展示会だって盛況だったの知ってるでしょう？」

「あれは全部サクラだろうが。教員にもぼれてるに決まってる。お前らの裏事業のことがな」

「裏事業だなんて。まるで私たちが悪党か何かみたいな言い方ね」

「お前らなんて人のあら探しに血道をあげてる馬鹿の集まりだ」

「あら、レズ一直線のあなたが指揮をとるエセ演劇部よりはましよ」

玲子は千鶴の発言にするどく反応した。真実かどうかききたいと思つたが、今この場で声を出すことははばかられた。奈央も同様のことを感じ取つたらしく、むぐぐと口を紡いで何やら我慢

している。

それにしても悪口の応酬を続けるふたりの間には何か確執があるのだろうか。そちらも玲子にとっては気になるポイントだったがやはり発言はできない。

「このことを公に広めてもいいかどうかの許可を、梨紗さんにおききしたいと思いうかがったのです」

裕子の口調は一層意地が悪くなってきた。なぜこんな言い方をするのだろうか？ 裕子は梨紗に何か恨みでもあるのか？ 玲子には思い当たる節がさっぱりない。

「それは、内容を教えてもらわないとなんとも言えないわ」

梨紗の声は先と違ってじつに心もとない。いつもの少し斜に構えたうえから目線の態度はどこにいつてしまったのか？

玲子は一切の事情が飲み込めず、はてなをたくさん生みだしていると、ふいにとなりで爆発が起こった。

「お前らあああ！」

奈央がキレた。

飛びかかっていくのかと思いきや、奈央は美奈子の前に立ち、裕子と千鶴と相對して雄々しく地面を踏みならした。

「ごちゃごちゃ言いやがって！ よくわかんねえけど、とどのつまり梨紗さんを脅迫しようってんだろ！ しかも楽しい合宿の場にまで押しかけてきやがって、私の鉄拳を喰らいたくなけりやさっさと帰れ！」

じつに立派なセリフだと玲子は感心した。応援したい気持ちが芽生えたが、どう応援してよいかわからない。煽ると本当に奈央はふたりに飛びかかっていくかもしれない。しかし落ち着くよう説得すると、奈央の士気がさがってしまい、情勢は不利になるだろう。

玲子がぼんやりとした面持ちで頭を高速回転させていると、裕子は不敵に笑いだした。壊れたように笑うので少し不気味だった。奈央は馬鹿にされたように感じたのか「なんだよ！」とさらに息を巻いた。

「そんな態度をとれるのも今のうちだけよ。この情報が公に流れたら、梨紗さんは社会的に抹殺されるといっても過言ではないんだからね！」

「裕子、てめえどういうことだ！」

「言っているんですか？」

脅すように裕子は梨紗を見た。皆も梨紗を見た。

全員が度肝を抜いた。

梨紗は泣いていたのだ。それも真っ赤に。

顔が真っ赤なのではない。涙が真っ赤なのだ。

いよいよ演劇部は人間の集まりではないのかもしれない、と玲子は疑いはじめた。美奈子は自分の血のついた紙を食べさせるという悪魔的儀式といっても過言ではない蛮行を強要するし、奈央は野生動物みたいに純粹で獰猛だし、梨紗は魔女だと言われても否定できない証拠ともいえる血の涙を流している。

それぞれにキャラクターがあって愉快だなあと玲子の思考がふいにあさっての方を向いて、現実から目が逸れはじめた。自分は特にそういう面白い特性がないのに演劇部にいてもいいのだろうか、とさえ思った。

「梨紗、大丈夫か？」肩にかけられた美奈子の手を払って、梨紗はずんずんと裕子の前まで躍り出る。裕子はたじろぐどころか一步も引かずに梨紗を迎え撃った。様子を見ていた玲子は、裕子は強いなあと考えた。いつの間にこんなに立派になったのだろう。自分と離れている間かな。

梨紗がなんと言うのか気になって玲子はわくわくした。自分にこんな野次馬根性があると知ったのはじめてだ。やはり演劇部は新たに得るものが多い。

梨紗は涙を流しながらぐっと裕子を睨みつけて言った。

「裕子ちゃん、どうしてそんなひどいことするの？」

身構えていた裕子は一瞬表情を崩したがすぐに立て直した。崩れたのはおそらく予想していた返答と違った答えだったからだろう。玲子も意外だった。てっきり怒るのだろうと思っていたのに。そのほうが魔女っぽいのに。

しかし、梨紗が出した答えは悲哀に満ちた、施すような、手を差し伸べるような言葉と口調だった。優しい言葉を受けて裕子はぐっと梨紗を睨み返している。

「すべては玲子のため」決意したかのように裕子は言った。

玲子は正直驚いた。生きてきたなかで、裕子に名を呼ばれたなかで一番驚いた。

え、私のこと？

すぐに思考を働かせる。梨紗を脅すのと自分となんの関係があるのか。

いやないだろう。

誰も得しないはずだ。

裕子を除いては。

つまり裕子にとってはなんらかの得るものがあるって、それが自分で。

つまりつまり。

「わからないなあ」思わずぼやいてしまった。

裕子が玲子を睨む。自分にまでこわい表情を向けてなんのつもりだろう。

「玲子、今助けてあげるから」

助けるって、私を？

何から？

「裕子さ」玲子はいつもの口調で言ってみた。久しぶりに本人に話しかけるが、違和感はまったくくない。やはり長年の慣れというものはおそろしいものだ。

「なんの話してるの？」

「梨紗さん」裕子は玲子を無視して再び梨紗に敵対した。「私は玲子を取り戻すためにここまでやってきました。玲子から手を引いてもらいます。そのためには、玲子の呪縛を解かないといけない。つまり、美奈子さんです」

「え、私？」美奈子は急に名を呼ばれて間抜けな声を出した。

「そうです。あなたの髪の色で玲子はおかしくなりました。そしてひよっとしたらだけど、玲子はあなたに惹かれてるかもしれない。私は玲子を正しい道へと導きます。親友としての務

めです」

「お前の務めは知らんが、玲子は私に惚れてなどいないだろう、どうだ玲子？」

矛先を向けられて、玲子は真剣に考えてみた。

美奈子に惚れているか？

いやそれ以前に。

惚れるってなんだろう。

どういう状態を指すのだろう。

今の私？

うーん。

「べつに惚れてはないです」

正直に答えると美奈子は満足そうに頷いた。

「ほら見ろ。玲子は違うと言ってるぞ」

「それは玲子が自分の気持ちを理解してないからです」

裕子にぴしゃりと言い当てられて、玲子はさすが親友だと感心した。惚れてないです、って否定したけど、本当はよくわかってない。

「玲子、ちゃんと考えて。あんたは美奈子さんが好きなのよ。髪もひっくるめてその人に恋してるのよ。それは異常なの」

もう一度真剣に考えてみるが、答えは先のとかわらない。というのも自分が恋愛感情をどうい
うものなのか理解していないからだという原因もわかっている。裕子は自分のことを理解して
いる。そのうえで、美奈子が好きなのだと指摘しているのだから、それが正しいのかもしれない
。

「じゃあそうかも」自信なさげに言ってみると、美奈子が寄ってきて両肩を揺すった。

「おいしっかりしろ！ 自分のことは自分にしかわからない。他人に干渉されて自分を曲げては
いけないんだ！」

首がかくくんと上下し、玲子の脳がシェイクされる。もう、一切がよくわからない。混沌
とした思考の海は荒れ模様で、どこに何があるのか自分でも見えない。

そのなかで、ただひとつ浮かびあがるものがあった。

それは、

「べつにどうでもいい」

玲子は口にしてから自分の唯一の感情に気づいた。荒れ狂う海面にくっきりと浮かんで見える
その感情は、玲子の本質、本当、真実を表すものだ。

「だから、それじゃダメなの！」

裕子が怒っている。美奈子が肩を揺すっている。梨紗が泣いている。奈央が憤慨している。千
鶴が傍観している。

でも一切はどうでもよかった。本当に、気にならなかった。

rule.4

「おい玲子」美奈子は玲子の肩から手を離して姿勢を正した。なんとなく玲子もそれに倣う。

「気をつけ」

気をつけた。つまりしゃきんと立った。

「歯を食いしばれ」

歯を食いしばった。つまり口を閉じた。

「喰らえ」

喰らった。

川べりに高らかに響いた音は、美奈子が玲子の頬を平手打ちした音だ。

「玲子！」裕子が名を呼んだ。

玲子は横に吹き飛んで、頭から砂利のうえに倒れこんだ。仰向けに倒れ、空を見上げる格好となった。生い茂った木々に切り取られた青空には雲がない。風で揺れる枝から木の葉が落ちてきて、偶然にも玲子の目を覆った。首を振って木の葉を落とすと、美奈子の顔が浮かんでいた。

美奈子は倒れる玲子をじっと睨んでいた。ほかの四人はぼかんと口を開けるばかり。しかしそのなかで裕子だけがすぐに正気に戻って、玲子のそばに駆け寄った。

「大丈夫？」

心配そうな裕子の顔は、見慣れたものだった。

裕子の手を借りて起きあがる。頬にじわじわと痛みが広がってきた。片手で撫でてみると熱を持っていることがわかった。たたかかれていないほうの頬にも手を当てて両手で温度の違いを比べてみる。夏の市民プールと冬のサウナほどに違いがあった。

「玲子に何すんのよ！」裕子が怒鳴った。敬語ですらなくなっている。

「玲子よ」美奈子の声はとても冷たかった。冷や水を浴びせられたかのような感覚が玲子を襲う。

「はい」

「私は以前、お前に言ったよな、自分の気持ちに気づけと。そうしなければお前のもやは晴れないと」

「はい、言われました」

「今のお前はどうか。気づこうとしているか？ そのために努力しているか？」

玲子は考えてみた。

努力はしていない。何せ努力するエネルギーを自分は持っていないのだから。

もうとっくのむかしに、努力するエネルギーなんて枯渇してしまったのだ。おそらく母親のおなかから出てきて泣き叫んだときに使い果たしたのだろう。

「してません」

正直に答えると美奈子はすばやい移動で玲子の前までやってきて、片手で玲子の両頬を握りつぶした。

「やめて！ 玲子に触らないで！」となりで裕子が抵抗するも、美奈子はもう片手で裕子の身体を突き飛ばしてこかしてしまった。

「きゃっ！」尻もちをついて裕子は美奈子を睨む。美奈子は自分の手に収まる小さな顔を睨んだ。

「どうしたんですか」玲子がむにむにと言った。

「お前のその、やる気のなさに腹が立つ」

これまでに聞いたことのない声だった。黒くておっかない、触ると凍りついてしまいそうな声だ。

「でもこればかりは私にはどうしようも」

「お前にできなけりゃ、誰にもどうしようもないだろうが！」

さらに頬を押しつぶされて、玲子はしゃべることもできなくなった。ぐいぐいと美奈子の爪が頬に食い込んで痛い。

ようやく放り投げられるようにして玲子は解放された。すぐに裕子が近寄って介抱してくれる。玲子は差し出された手を取って立ちあがった。

「ありがとう」

「いいよ」

改めて裕子は美奈子に対峙した。

「美奈子さん、これ以上玲子を傷つけたりいじめたりするのはやめてください」

「誰がいじめた？ 私は玲子に人道を歩ませるための手伝いをしているにすぎない」

「それは私の仕事です。あなたは離れて」

「それはできない。玲子はもう演劇部員だ。私の部下となった」

「そんなの退部届一枚でなかったことにできます」

「どうしてお前が玲子のすべてをコントロールしようとするんだ？ 玲子に自由意思はないのか？ 玲子の意見を尊重しようとは思わないのか？」

「あなたには玲子のことなんて何ひとつわからないわ。玲子は一般の杓子定規では計り知れないの。ずっとそばにいた私が玲子のことを一番よく知ってるんだから！」

「そこまで言うなら玲子にどうしたいかきいてみろよ。できないだろうがな。だからお前は入学してから玲子から距離を置いてたんだろ？ その間玲子がどんなことを考えてどんなことを学んできたか知らないだろ？ それでも自分が一番って言いきれぬのか？」

裕子はふっと美奈子に背を向けて、うしろに匿っていた玲子の手を握る。

「玲子」

「何？」

「戻ってきて」

「どこに？」

「私のとなりによ」

裕子の目は真剣だった。こわいくらいに。今ほど自分に入れ込んでいる裕子を見たことがない。やはり、親友の存在は謎だ。

「べつに離れたことなんかないよ。あるとしたら、それは裕子が離れていっちゃったんでしょ」頬をさすりながら玲子は言う。「私はいつもおんなじところにいるもん」

「それは、そう」裕子はうつむく。顔が見えないので覗き込もうとしたら、裕子の隠れた顔から水滴が落ちた。

「私が離れちゃった。玲子をほっといちゃった。だから、迎えに来たの」

親友はぼつぼつと呟くように言葉を紡いだ。ひとつひとつ、一言ひとことを一生懸命に。

「玲子、帰ってきて」

親友が握る手に力を込めるのがわかった。もう痛いくらい強く握られている。その強さが想いの強さを表しているのだろうか。だとすると、経験から、このままだと自分の手がプレスされて平らになってしまうかもしれないと予測できる。

などとくだらないことを考えてできるだけ気持ちを軽くしてみたが、そのうえには親友の思いがどっしりとのしかかる。友情っていうのかな、この重石。とつても重い。

なんて答えよう。裕子は自分の帰還を切に願っている。それを無下に断ったりはできない。できるけどしたくない、ような気がする。いや、しちゃいけないというか。

そう、裕子を傷つけてはダメなのだ。それが自分に課せられた唯一のルール。破ってはいけない法則。

なぜなら裕子は自分の最大の謎だから。解明しなければ、心にずっと重石を背負って生きていかなければいけない。解明すれば重石は除けられる。除けてもおそらく裕子はそばにいるだろう。

自分は何を迷っていたのだろう。何に悩まされて裕子をここまで追い詰めていたのだろう。

ああ、思い出した。

「いいよ」玲子はさっぱりと答えた。

「ほんと？」ぱっとあげた裕子の表情が輝く。「よかった」

「うん。ところでさ」玲子は念のため確認する。「帰るっていうのは、部活をやめろってことだよね？」

「そう。あの人から離れてほしいの」

裕子はじっと玲子の顔を見ながら言う。あの人というのは美奈子のことだろう。

「わかった。でもね、ひとつだけ条件」

「条件？」少し裕子の顔が曇った。見たことない顔だ。条件なんか裕子に突きつけたことないからね。

「あのね」

玲子は裕子に耳打ちをした。玲子の言葉を聞いて、裕子は思い切り顔をしかめた。

「そんなの無茶苦茶じゃん！」

「でもこれで全部すっきり解決しない？」

「いやたしかにそんな感じの提案だけどさ」

「じゃあやって」玲子は笑ってみた。いつも裕子がべらべらと長話するときに時折挟む笑顔だ。

「お願い」

rule.5

ふたりがごそごと話している間、残る四人は各々に行動していた。千鶴はやれやれと呆れた気分になってきたし、梨紗は奈央に血を拭ってもらっているし、美奈子はふたりの相談を見守っている。

それにしても血の涙って。ショックのあまり出ちゃうものなの？ 妖怪なんじゃないの？

話し合いが終わり、裕子がゆっくりと美奈子に向き直った。

「結論は出たのか？」美奈子がきいた。

「はい」

「それで？」

「玲子は部活をやめるそうです」

梨紗と奈央が同時に振り向いた。

「何いいい！」

「玲子ちゃん本気？」

玲子は答えずに裕子の背に隠れている。よく見ると、裕子をうしろから押している。顔にはうすら笑みを浮かべている。とても玲子には似合わない、いやらしい笑みだった。

「玲子はやめます。ただひとつ条件があります」

「なんだ？」

「美奈子さんの、その、黒髪を、触らせてほしいそうです」

言いたくなかったが、裕子はがんばって言い切った。玲子のためだと割り切れば、こんな変態以外の何ものでもないセリフだって言ってしまう自分が少しおそろしい。

「はあ？」

「ええ？」

「ふふっ」

演劇部員は三者三様の反応をとった。千鶴は「ああ」と声を漏らしただけ。

「玲子！」美奈子が怒鳴った。

「はい」

「お前馬鹿なのか？ いよいよ頭がおかしいんじゃないか？」

うーん、と思案顔で玲子は答えた。「たぶんそうです」

美奈子はその場にへたへたと座り込んだ。その様子が愉快で、千鶴はほくそ笑んだ。

「玲子ちゃんったら、もう」梨紗はすべてを悟ったような諦観の表情を見せた。「意外と賢いのねえ」

「玲子何言ってんだよ！」奈央が近寄ってきて玲子の肩を揺さぶった。かくんかくんと玲子の首が上下に動く。「それだけでやめちゃうのか？ 梨紗さんと私を放ってか？」

「梨紗さんにも奈央さんにもいろいろお世話になりました」かくかくしながら玲子は話した。

「コーヒーもお茶もおいしいし、みんなで食べたケーキもとてもよかった。奈央さんのセクハラも今となってはいい思い出です」

「回想すんの早ええよ！ なんで締めくくりみたいなことのたまってんだ！」

奈央は肩から手を離して両手で頬を摘まんだ。

「これに触れなくなっちゃうのかよお」

「べつに校内で見かけたら触っていいですよ」

「ほんとか？」

「はい」

「身体も？」

「べつに嫌じゃありません」

「ならよし！」

奈央は玲子を解放した。本当にそれでいいのかと千鶴は思ったが、一目見ただけで奈央を馬鹿な娘だと思った自分の予感を信じて流すことにした。断らない玲子に対しても、いろいろとつっこみたいことがあったが、面白いので黙っておいた。

「今までありがとうね、玲子ちゃん」今度は梨紗が近寄ってきて玲子の手をとった。「あなたと会っていろいろお話できて楽しかったわ。部活をやめなきゃならないのは残念だけど、私にも責任の一端があることだし、強くは言えないわね」

どうやら梨紗には玲子の交換条件が理解できているみたいだった。すべてを明かしていないのに、美奈子の黒髪のことだけで読み取ってしまうなんてすごい人だと玲子は思った。

「顔を合わせる機会は減っちゃうけど、また一緒に遊びましょ」

「はい」

梨紗のコーヒーやお茶が飲める機会がまったくなくなっただけではないことは、玲子にとってうれしいニュースだ。

「玲子おおお！」奈央が泣きながら梨紗ごと玲子を抱きしめた。腕が短いのに力が強く、梨紗が「痛い痛い！」と叫ぶのも構わず奈央はつぶさんばかりにふたりに激しいハグをした。玲子はふたりに向けて「ありがとうございます」と言った。

千鶴は一連の演劇部らしい臭い芝居かかったお別れを見届けてから、美奈子のうしろに立って彼女の頭を見下した。この髪のどこに男女問わず惹きつけるような魅力があるのかと考えてみたが、それなりに美しい髪であるという感想以外得られない。

「残念ねえ美奈子。みんなの間ではもう合意が形成されてしまってるわよ。あなたひとりの意見で覆ったりはもうしないわね。たとえあなたの髪が餌だとしてもね」

美奈子は人形のように立ちあがり、振り向いて千鶴を睨んだ。

「どいつもこいつも、私のまわりは馬鹿ばかりだ！」憤慨して叫ぶ美奈子の声には力がない。今のが怒りの限界なのだろう。あとの憤慨は呆れで埋め尽くされて美奈子の心の底でくすぶっているに違いない。

「あなたが集めたんでしょ？ 仕方がないじゃない。あなたの髪が罪深いんだから。髪の主人もそれなりの報いを受けてしかるべきなのよ」

「それはお前のひがみか嫉妬が言わせた言葉だろう。だいたいあの件に関しては、今回同様私に責任は一切ないぞ！」

「うるさいわね！ あんたの髪がいけないのよ！」千鶴はむかついてつい大声を出した。「何よ

、髪だけで悩殺するなんて！ 意味わかんないもんに彼氏をとられた私の気持ちはどうしてくれるのよ！」

「だからそれを私に言われてもどうしようもないだろ！」

「ほかに責任の所在がないでしょ！」

「あるだろ！ 好きになった本人を責めろよ！ おかしいだろ、髪に惚れて彼女を捨てるような馬鹿は！」

「馬鹿って言わないで！」

「何庇ってんだ！ お前のクソ変態彼氏はたかが髪の毛で彼女を捨てるようなゴミだぞ！ 責めればいいだろ！」

「言ったわよ！ でも全然聞いてくれなかった！」

「だから馬鹿って言ってんだ！」

「言わないでって言ってるでしょ！」

ふたグループは各々にアクティビティをはじめて明暗をわける格好となった。取り残された裕子はひとり手持ち無沙汰で、とりあえず皆が落ち着くのを待ってみたが、こちらでは涙の別れが一層悲哀を帯びてきて、あちらではくだらない言い争いがますます激昂してきた。

裕子は一切に背を向けて、ため息をついた。

玲子の提案は以下の通りである。

現状の問題は、

- l 玲子が裕子から離れて美奈子のそばに戻ることに
- l 玲子が美奈子の黒髪に想いを抱いていることに
- l 梨紗が裕子にネタを握られて脅されていることに

これらを一挙に解決し、自分の欲求すら達成してしまうというウルトラCの作戦が玲子の頭に去来したのは、裕子のおかげだ。

まず、裕子に自分に美奈子の髪を触らせるように説得させる。その引き換え条件として、自分が裕子のもとに戻ることを約束する。そして裕子は梨紗のネタを餌にして美奈子と交渉する。美奈子は断れない。まとまったあかつきには、梨紗のネタは闇に封じられ、裕子は玲子を奪還し、玲子は美奈子の黒髪に触ることができる。すべてをつるんと丸めて解決できてしまうのだ。

しかしよく見直してみると、損を被るのは美奈子のみである。その点は誰の目にも明らかであり、もちろん美奈子も提案を聞いてすぐに気がついた。

「なんだそれは！ 私が損するばかりじゃないか！」

「しかし、髪を触るだけです。舐めたり食べたりするわけじゃないんですから、どうか大人しく交渉に応じてください」裕子が駄々っ子をたしなめるように言う。

「本当にアホだな玲子は！」

責められても玲子は何も感じない。やはり、美奈子が好きなわけではないようだ。美奈子の身体の一部、黒髪が好きなのだ。

「美奈子さんが応じてくれないと、梨紗さんが泣きを見ますよ。また血の涙を流して貧血になってしまいますよ。こんなところで貧血になったら命にかかりますよ」

裕子は武器の威力を全面に押し出して交渉に臨む。さらにそこから派生する梨紗の生命すら脅し文句として使う。血も涙もないとは今の裕子を指して言う言葉だ。

「お前、よくもそこまで言えるな。人の道はずれてるぞ！」

「いいんです。どうせ玲子と歩む道はまともじゃないし、人道から二、三步はずれたくらいなら許容範囲です」

「梨紗、お前もなんとか言え！ 当事者だろ！」

話の矛先を変えてみた美奈子だが、梨紗の返答はなんとなく想像がついた。

「美奈子、ごめんなさい。私があなたに迷惑かけてることは認めるわ。でもたかが髪を触られることで私が助かるんだから、当然あなたは協力してくれるわね？ 本当にありがとう、美奈子！」

想像通りだ。手をすり合わせながら拝む格好の梨紗はじつに胡散臭い。間違いなく感謝などしていないだろう。胸中ではさっさと玲子に触らせてあげなさいとほくそ笑んでいるに違いない。美奈子にはそう考えるだけの過去の経験を土台にした自信があった。

「もう、どうしてこんなことに……」

もはや回避不能なけもの道への招待状を目前に突きつけられ、美奈子の精神エネルギーは払底寸前だった。演劇部員として忠誠を誓わせた味方であるはずの人間に次々裏切られ、行く先の闇はどんどんその色合いを濃く深く染めていく。

「ははは！ もう観念するしかないわね、美奈子！」

美奈子が追い込まれていく様子が愉快で愉快で仕方がないといった様子の子鶴は、美奈子の前に仁王立ちして女王のようにふんぞり返った。

「子鶴、お前」

「あんまり我が儘で自分を通そうっていうんなら、もはや強制すら辞さないわよ！」

「なんでお前が仕切るんだ！ お前は一番関係ないだろ！」

「裕子ちゃんを焼きつけたのは私よ。つまりすべての遠因は私にあるの。これが私の望み。あなたを絶望の淵に突き落として高みから見下して指さし笑いするのが私の夢！」

「お前というやつはどこまで性根が腐ってるんだ！」

「うるさい！ 玲子ちゃん、もう強制でもいいわよね？」

話を振られて、玲子は首をふらふらと左右に振った。

「えっ、ダメなの？」

「いやそうじゃなくて」

「あのね、子鶴さん」

裕子が横から口出した。

「玲子はどっちでもいいです、って言ってるんですよ」

「あ、そうなの。じゃあ強制的にやっちゃいましょう！」

「そうねえ」なぜか梨紗すらも賛同した。

「ほら奈央、美奈子を抑えつけて」

「ええっ？」奈央は梨紗の言葉に驚いた。「いいんですか？」

「いいのよ。あなたも美奈子に触りたいでしょ？」

「もちろん！ おっしやー美奈子さん、覚悟！」

「貴様らああ！」

怒号をあげつつ、美奈子は情勢不利と見ると、身を翻して逃げ出した。

「待てー！」奈央が素早く追いかける。

「裕子ちゃん」千鶴が言った。

「わかりました。玲子、行くよ！」

「うん」

こうして美奈子の山狩りは幕を開けた。

rule.6

美奈子は走って走って走りすぎて、肺がよじれるかと思った。木の陰に身を隠してあたりの様子をうかがう。近くに人の気配があったので、そろりと足音を殺しながら移動を続けた。

話し声が聞こえる。

「美奈子さん意外と足速いねえ」

「そうですね」

「髪が揺れてたよお。ちょっとスイッチ入っちゃったかも」

「奈央さんも美奈子さんの髪が好きなんですか？」

「そうだよ。普段から玲子と私で隙あらば触ろうとしてたんだけど、するするっと逃げられちゃうんだよねえ」

「そうでしたね」

「演劇部は変態さんばかりですね」

「なんだとお！ まあ否定できないけどね」

「私は普通です」

「「普通じゃないから！」」

どいつもこいつも馬鹿ばかりだ。息を殺しながら深いため息をつく。

もう本当に嫌だ。

どうしてみんなこの髪に惹かれる？

ほかの奴らとどう違うんだ？

第一、触ってどうするつもりだ？

毎日触ってるけど、たいしたもんじゃないぞ。

それに、私はどうしてこんなにも触られるのが嫌なんだ？

まだ根っこにはあのことが残っているのだろうか。

忘れたつもりなのに。振り切ったつもりなのに。

そのためにがんばってるのに。

(もういっそ切ってしまおうか)

美奈子は小声で呟きながら自分の髪を撫でてみる。たしかにきれいではあると思う。さらさらのキューティクルは大理石の表面を思わせるほど滑らかで艶めかしい。すらりと伸びる髪が流れる姿は、毎日鏡でチェックするが、なるほどたしかに美しいといつも思う。

(でもショートにするのはな)

「そうですよ、長いほうが似合ってますよ」

うしろから声をかけられて美奈子は飛びすさった。直後、今度はうしろから羽交い絞めにされた。

「なんか見つけられちゃうんですよねえ」羽交い絞めにされている美奈子に近づきながら奈央は怪しげな笑みを浮かべた。「美奈子さんの残り香を辿ってかなあ？」

美奈子のうしろで両手を封じている玲子と裕子はすんすんと鼻を近づけてにおいを嗅ごうとしてくる。「いいにおいしますね」「たしかにそうね」

「やめんかお前ら！」

奈央は携帯を取り出して、誰かと話しはじめた。「はい、じゃあ私が証人ってことで」

「こら奈央、何不穏な会話してるんだ」

通話を終えて携帯をポケットにしまうと、奈央は美奈子のうしろに回り込んで玲子と交代した。「放せ！」と抵抗してみるも、奈央の力は玲子よりも強い。左手首をとってぎりぎり締めつけてくる。「痛いだろ！」

「ああ、ごめんなさい。強すぎましたか」奈央の手が少し弛んだ隙をついて逃げ出そうと試みたが、腕を固められているようで外れない。「美奈子さんったら、もう抵抗はよしてくださいな」

「アホか！」

「いよいよ私たちはアホなのかもしれませんねえ」

「私はあんまり関係ないですけど」

「いや裕子も充分アホだよ。玲子に対する思い入れを見ればわかるよ」

「そんなこと」

「あるよ」

耳の裏で聞こえる会話そのものがアホだと美奈子は思った。もとがアホなのだから必然的に会話の内容もアホにならざるを得ないようだ。そんなどうでもいいことを考えていたら、玲子が自分の髪に手を伸ばしていた。

「おい、玲子！」

「いっちゃえ玲子！ 私が証人だ！」

「これですべて一件落着ですね」

「落着してたまるか！」

美奈子は必死の抵抗を試みたが、せいぜい首からうえを動かして逃げるくらいしかできない。捕まるのは時間の問題だ。

「美奈子さん、失礼します」

「本当に失礼だな！」

そろそろと玲子の身体全体が目前に迫ってきて、ついに玲子の手が美奈子の黒髪に触れた。

「……………」

玲子は驚いた。ふたつのことに驚いて、心のなかがいっぱいになった。表情はどうなっているかわからない。そんなことまで気がまわらない。

ひとつは髪の感触だ。その触り心地はとても言葉では言い表せない。おおげさだが、なんて言っているのかかわからないのだ。しかし自分の気持ちはなんとか言葉に還元できる。

うれしい、それに、もういいや、だ。

もうひとつは美奈子の涙だ。はじめて見た。美奈子が泣くところを。

どちらかという、後者に玲子は心をかき乱されていた。それほどまでに嫌だったのだろうか。山の中を逃げて逃げて拳句捕まって、実際に触られて涙を流すほど。

なぜそこまで嫌がるのか、玲子には理解できなかった。嫌なことがほとんどない玲子には理解

するなんて無理な話なのかもしれない。

そういえば手紙の話を聞き忘れていた。トラウマがあるのだとしたら、泣くほど嫌なものも納得だ。ちょっとひどいことしちゃったかも。

いずれにせよ、玲子は美奈子を泣かせてしまった。それは事実だ。美奈子が嫌がることを、玲子は無理やり実行した。結果、美奈子の頬に涙が流れた。

よく考えたら人を泣かせたのははじめてだった。

裕子と一緒にいて彼女が泣いたことは何度もある。話の流れで突然泣いたり、自分の言動に腹を立てて泣いたり、自分と仲が良すぎると他人に馬鹿にされて泣いたり。

しかしそれはすべて玲子には非がない。大勢の見解からすれば玲子の特異性に責任があるだろうと指摘されるかもしれないが、少なくとも玲子自身は責任を感じたことがない。つまり裕子が泣いたときにたまたま自分が居合わせた、裕子が勝手に泣いたと考えている。

だが美奈子に関しては違う。玲子にはその自覚があった。

明らかに自分が悪い。自分に非がある。

生まれてはじめて人に対して罪悪感を抱いた。責任を感じた。心が痛んだ。

謝らなければいけない。

「美奈子さん」

美奈子は返事をしない。顔は玲子のほうを向いているし、目も見開いている。しかし玲子を見ているかどうかは定かでない。もしかしたら、自分が涙を流していることすら気づいていないのかもしれない。

「ごめんなさい」

玲子は笑ってみた。謝るときにどんな表情をすればいいかわからないからだ。笑顔は万病に効く薬だとむかし裕子に教えられたことを思い出した。

「みみ美奈子さん」奈央の声は震えている。おそらく彼女も泣き顔をはじめて見たのだろう。「大丈夫っすか？」

手を解放されて、美奈子は膝から崩れ落ちるようにぺたんと腰をおろした。裕子もうしろで微妙な顔をしている。もしかしたら、あれが謝るときの顔だろうか和玲子は考えた。

玲子は裕子のそばに身を隠すように移動して、耳打ちした。

「私、ダメだったかな」

裕子は真剣かつ神妙な表情をした。「かもしれないね。やりすぎちゃったかも」

「でもどうしてかな」

「泣いたかって？」

「うん」

ふたりは奈央に肩を揺すられている美奈子を見た。目線が茫洋としていて不安定だ。奈央の問いかけにも応える様子はない。

「わからないわね。でも悪いことしちゃった」

「私もそう思う」

「どうしようか」

玲子は考えた。

どうするかだっけ？

そんなのわからない。

だから、

「帰ろっか」

「えっ？」

裕子は耳を疑った。親友はなんて言った？

「いやだから帰ろうって」

なんてことだ。玲子は帰りたがっている。どういう精神をしているのだろう。この場を投げ出して放り出して、自分だけ川べりに、日の当たるところに帰ろうっていうのか？

「ダメだよそんなの」

裕子は親友を叱る意味も込めて言った。

「なんで？」

「なんでって、泣かせちゃったんだから、フォローしなくちゃいけないでしょ？」

「それはわかるけど、今この場でできることって何もないじゃない」

「そんなことないよ。ほら、奈央さんみたいにそばにいるとかさ」

「でも私たちわざと美奈子さんの嫌なことして泣かせたんだよ」

そうか。親友は私たちがこの場にはいないほうが美奈子のためだと考えたのだ。たしかに今の美奈子にとっては私たちは悪者、敵以外の何者でもないだろう。しかしそれは不可抗力というか、不慮の事故というか、青天の霹靂というか。とにかく予測の外の出来事なのだ。まさか髪触られただけで泣きだすなんて私も思ってもみなかった。嫌すぎて山のなかに逃げ出したのは勢いだったのだと理解したけれど、本当に嫌だとは考えなかった。だってそんな人、聞いたことない。見たことない。

聞いたことも見たこともない人物の処遇について裕子が考えていると、玲子は奈央にごそごそと耳打ちしていた。「うんうん、それがいいかもね」と奈央は納得し、美奈子の腕を掴んでぐいっと持ちあげ、立ちあがらせた。

「美奈子さん、戻りますよ！」

三人で協力して、脱力の極みに落ち込んでいる美奈子を担ぎ担ぎしながら川べりのテントを目指した。

rule.7

美奈子が走り去り、そのあとを追いかけていった三人を見送ってから、梨紗と千鶴はテントの中で向かい合ってお茶を飲んでた。

「これおいしいわねえ」

「でしょう？」

美奈子の現状とは正反対の、なんとも落ち着いてまったりとした空気がテント内をふわりと包んでいる。それを作り出しているのはもちろんさらにまったりとしているテント内のふたりである。

「美奈子は捕まるかしら」

「さあねえ、けっこう足速いから時間はかかるかも」

「迷子になったりしなけりゃいいんだけど」

「携帯持ってるから大丈夫じゃない？」

「そうね」

千鶴はうしろに手をついてリラックスできる体制を探した。天井を見上げるとペンライトがぶらさがっている。そろそろつけてもいいくらいにはあたりが闇に浸食されはじめている。

梨紗が立ちあがってペンライトを点灯させた。まっすぐな光線が真下にいる千鶴に降り注ぐ。

「眩しいなあ」

「これくらいじゃないと夜は暗くて何も見えないのよ」

「虫がたくさん寄ってきちゃうんじゃない？」

「それは街にいても同じでしょ？」

「たしかにね。街中にはたくさん虫がいるから」

一瞬、沈黙が流れる。すべてが停止したような静寂。その後、ふたりの脳内でかちかちと計算する音が数瞬の間流れた。

「ねえ」

「うん」

「ごめんね」

「いいよ、なんとなかったし」

「梨紗が泣いたときはびっくりしたよ」

「めったに泣いたりしないんだけどね」

「血の涙なんてはじめて見たよ。梨紗って人間よね？」

「さあ、どうかな。私たちの街って化け物とか多そうだしねえ」

「人間と見なして話を進めるわね」

「お願い」

「まさか裕子ちゃんがあそこまで踏み込むとは思わなかったの。焚きつけた私が言うのもなんだけど、申し訳なく思ってるわ」

「全部千鶴の命令なの？」

「ええとね、美奈子を陥れようって誘ったところまでは私の意思なんだけど、そこから先、梨紗

にまで被害が飛び火したのは裕子の暴走なの」

「かばわないのね」

「本当のこと言ったほうがみんなのためかなと思って」

「そんなもんかな」

「でね、明るみには出ないんだけど、私たちにはわかつちやったことなんだけど」

「それね」

梨紗は千鶴の横に座りなおして手をとった。

「お願い。千鶴の野次馬根性はなんとか封印しといて」

「うん、わかってる」千鶴は梨紗が握る手に片方の手を重ねた。「これ重すぎるもんね。公表するなんて度がすぎるってもんよ」

「ありがとう。さあ、お茶飲んで」

「いただきます」

再びまったくした空気が立ち込めた。その後お茶を飲みながら他愛もない話、つまり千鶴が同級生の暴露話に花を咲かせていたとき、梨紗の携帯が鳴った。

「奈央よ」

千鶴はしゃべるのをやめてお茶を飲んだ。ふう、久しぶりに人に秘密をぶちまけてしまった。これが甘い蜜なのだ。カメラ部部長のみが味わえる、甘い秘密の蜜の味。

「そう、わかった。じゃあ帰ってらっしゃい」

ぱたんと携帯を閉じて、梨紗は千鶴に向き直った。

「もうすぐ帰ってくるわ。美奈子は死んだって」

千鶴はお茶をぶっと噴き出した。こんなコントみたいな反応、他人の前ではできない。

「ええっ、死んじゃったの？」

「うん、精神的にね」

「ああ、もうびっくりしたよ」

噴き出してしまったお茶をふたりで拭きながら、顔を見合わせて笑った。どちらも美奈子が死んだことが愉快で笑っているのだ。

「梨紗ってひどい奴よね」

「本当にねえ」

「それでも美奈子は梨紗を裏切らないのね。それが私にはうらやましい」

梨紗は千鶴の表情を窺いながら慎重に言葉を探す。一步間違えたら全部壊れて再発してしまいかねないからだ。それほどにふたりの関係は脆い。

「千鶴はどうしたい？ 信じたい？ 探したい？」

「そうね、どうだろう。よくわかんないな」

「もし私でよければ、アドバイスというか、話を聞くことくらいならできるよ」

千鶴は笑って梨紗の肩をたたいた。

「梨紗ったら本当にせこいのねえ。少しは私のことを信用してくれてもいいのよ」

「それもあるけど、でも、どちらかという、私は千鶴の役に立てたらなあって」

「そうなの？」

「私にとって美奈子は大事な存在。美奈子にとっての私もそう。美奈子の敵は私の敵だから、私はその敵と戦うの」

千鶴は梨紗の言わんとするところを考えてみたが、どう考えても自分と敵対するという表明以外にとれない。ここはケンカをはじめるシチュエーションではないと思うのだが、梨紗にはわからないのだろうか。いや、そんなはずはない。彼女は馬鹿じゃない。

「つまり、これが梨紗にとっての戦い方ってわけね？」

「そう、わかってもらえた？」

「もっとわかりやすい伝え方ってないの？」

「全部を言い表すにはこれが一番かなって」

そう、梨紗にとって敵と戦うのは傷つけ合うという意味ではない。手を差し出して取り合って歩いていくことなのだ。こんな勘違いした菩薩みたいな平和主義者だからこそ、美奈子も信頼を寄せているのだろう。

「私にもできるかな」

「誰でも信じる心は持ってるよ。千鶴は今使っていないだけで」

寝かしつけてある。もう傷つかないように。自分でもわかっている。

「起こしてあげなよ。私たちと一緒に遊ぼう？」

「そうね。だいぶ長いこと寝てたし」

「じゃあ、いいのね？」

「うん」

千鶴は、美奈子を許すことにした。ちょうどそのとき、外で砂利を踏みしめる音が聞こえてきた。

「ただいま戻りました！」奈央が開口一番言った。

梨紗と千鶴は普段は絶対お目にかかれない美奈子の超稀少な映像を凝視した。そして気遣うでもなく、

「美奈子ったら、何も泣くことないじゃない」

「本当に嫌だったんだなあ、傑作傑作」

と笑った。

さすがに裕子もふたりの態度はひどいと思ったが、あまり馬鹿にしているようにも見えないのはなぜだろうかと不思議だった。肩を貸している美奈子は今、涙は枯れ果てたようで、顔にそのあとを残して静かに気絶している。

三人はテントの床に美奈子をおろして横に寝かせた。美しい黒髪が床にはらりと広がって、墨がグラスいっぱいこぼれてしまったかのようなようである。裕子はその様子をきれいだと思ったが、黒髪の魅力までは理解できなかった。

「とりあえず起こしましょう」

「そうね」

梨紗は美奈子の上半身、千鶴は下半身にそれぞれ背中合わせになるように馬乗りの体制をと

った。

「何するんですか？」裕子は思わずきいた。

「何って、起こすのよ」

「わざわざ乗らなくても」

「まあ見てて」

何がはじまるのか。裕子は少しおそろしかったが、となりの親友の目には輝きが灯っていた。もしかしたら楽しんでいるのかもしれない。

まず千鶴が美奈子の脚をあらわにして、両手でそっとなぞりはじめた。見ているだけでぞくぞくする。あれは相当くすぐったいはずだ。

美奈子の表情が変化する。いや正確に言うと、表情が生まれてきたという表現が適当だろう。先ほどまでは涙の軌跡だけを残して無表情だったからだ。

次に梨紗が美奈子の胸をわし掴みした。思わず「ひゃっ」と声をあげたのは美奈子ではなく裕子である。裕子は無意識に自分の胸を両腕で覆い隠していた。奈央が「いいっすねえ」とおやじのようなセリフを吐いた。

美奈子の頬が痙攣している。ぴくぴくと動くたびに瞼が振動する。もう起きるのではないかと裕子は手に汗握った。

「よし、とどめよ！」梨紗が楽しそうに言った。「奈央！」

「アイアイマム！」奈央は敬礼して美奈子の顔の横に屈みこんだ。

「失礼しやす！」

そう言うと、奈央は美奈子の頬に口づけした。

「きゃー！」

裕子は大声をあげた。無理もないだろう。これはいわゆる寝込みを襲う「夜這い」ってやつではないのか？ いやでも夜ではないから、夜這いじゃなくて、昼這い？ なんて読むんだらう、えーと、と思考を働かせていると、ふいに美奈子が目を開けた。

「あら、おはよう」梨紗が満開の笑顔で挨拶した。

美奈子は身体が自由がきかないので、首だけを動かして周囲の状況を確認する。自分のうえで馬乗りになって胸を揉んでいる梨紗、すぐそばで顔を見つめている奈央、脚を触りながらこちらを向いている千鶴、見上げると四本の脚があり、そのずっとうえには玲子と裕子の顔、ここはテントの中。

状況を正しく理解したうえで、美奈子はため息をついた。そして音量をマックスにして叫んだ。

「貴様らあああ！」

rule.8

テントの内部の状況を解説しよう。

入口手前では美奈子が仁王立ちして顔面に修羅の形相を貼りつけている。

その前では残る五人が正座してこぶしを膝のうえにちよんと載せている。

その様相は説教部屋のようなのだが、その通り、テント内部は今や説教部屋と化している。

「まずは梨紗からだ」美奈子は重々しく口を開いた。

「はい、女王様？」梨紗の表情は小憎らしいほどの笑顔だ。

「私はお前の軽率な行動が災いして被害を受けたというのに、その私に対してあんな仕打ちをするのか。それでもお前は私の側近か！」

「なんとなく面白くて。つい魔がさしたっていうか」

「この大馬鹿者が！」

「ごめんね」

「もういい」

梨紗には甘い美奈子であった。

「次！ 千鶴！」

「はあい」

「お前まで梨紗や奈央に影響を受けたのか？ お前はセクハラするような馬鹿だったのか？」

「違うけど、こんな面白いこと街じゃできないから。それにね」

「なんだよ？」

「私、美奈子のこと許すことにしたの」

「許すも何も、私は無実で——」

「もういいの」美奈子の言葉を遮るように千鶴は被せた。「だからね、もう一切は水に流して普通のお友達になりましょう」

「なんて自分勝手な！ 私はお前に謂れもなくぶつけられた罵詈雑言を忘れるつもりはないぞ！」

「だからもういいって」

「ああもう！ なんなんだよお前は！」

「あなたのお友達よ。だって梨紗ともお友達だもん」

「おい梨紗。こいつに何を吹き込んだ？」

梨紗はとっくに姿勢を崩してお茶の用意をはじめていた。「え、何も？」

「嘘つけ。なんか言ったろ」

「べつに。私たちと一緒に遊びましょって言っただけよ」

「お前は博愛主義すぎる！」

「まあまあ、これからは私と美奈子と千鶴で仲良く三年生トリオを演じていきましょうよ」

「そうそう。それに私によくしておくといいいことあるのよ」

「私はそういう賄賂に興味はない！」

「いいから、ね」梨紗が美奈子にお茶を差し出す。それをひと息に飲んで、美奈子はコップを梨

紗に押し返した。

「この話はあとだ！ まだ終わってないからな！」

千鶴はうれしそうに笑うだけだった。

「で、奈央！」

「イエス、ママ！」奈央は敬礼した。

「今後一切私に触れることを禁じる！」

「ぬわああんでええ？」

すごい裏返りした声をあげて奈央は立ちあがろうとしたが、美奈子に蹴り飛ばされてまた腰をついた。

「当然の報いだ！ この私に楯ついたんだからな！」

「あれは、不可抗力だったんですよ！ 梨紗さんに言われて」

「それでも限度があるだろう！」

「だってだって、美奈子さんの顔を目前にしたら、いくら鉄の精神を持つ私だって」

「きつくやりすぎなんだよ！」

「痛かったですか？ 優しくしたつもりだったのにい」

「痛いに決まってるだろ、あんなに締めあげたら！」

「でも私のキッスで起きたんだから、私は自分の仕事を――」

「なんだと？」美奈子は目を剥いた。

「いやだから優しくしたつもりだったんですよお。締めあげるなんて、あれ？」

「なんの話をしている？」

「なんの話してるんですか？」

向かい合って頭上にはてなを大量に製造するふたりを眺めながら、堪え切れないといったふう
に梨紗と千鶴が笑いだした。

「何がおかしい！」美奈子が怒鳴った。

「だって、話が、全然噛み合って、ないから」息も絶え絶えといった様子で梨紗が言葉を絞り出した。

「美奈子お」千鶴が梨紗よりも上品に言った。「あんたは奈央ちゃんのキスで目覚めたのよ」

「はあ？」

美奈子は意味がわからず、奈央を見た。

「ええ、じつは」奈央は頬を赤らめている。「私が頬にキッスしたら美奈子さんが目を覚ましたんです。いやあ、神秘的ですなあ！」

あはは、と嘘くさく笑う奈央の顔を万力でつぶしてしまいたい衝動にかられ、美奈子はずうんと奈央の前に立った。奈央がきちっと姿勢を正して両手を合わせる。合掌のポーズ。

「この場で美奈子さんに八つ裂きにされる栄誉、この奈央がお受けいたします。最上の喜びに浸るこの気持ちをいかように表現すればよいやら思案しますが、一言だけ申し上げます」

「言ってみろ」美奈子は重々しく言った。二言目には殺してやろうと考えていた。

「とても柔らかい頬でした」

やはり一言目で殺すことにした。

「死ねえええ！」

美奈子が飛びかかると、梨紗と千鶴がうしろから取り押さえた。またも羽交い絞めにされ、美奈子は全力で暴れた。

「放せ！ あいつを八つ裂きにして川に流してやるんだから！」

「まあまあ、暴力はダメよ」

「そうそう。暴力じゃ何も解決しないわよ。だいたいほっぺにキスされたくらいで何怒ってるの」

「そういう問題じゃない！」

「合意を得ないっていうのが問題だって言いたいんでしょ？ それは奈央の前で気絶するような隙を見せた美奈子が悪いと思うけどなあ」

「なんで私が悪いんだよ！」

「だってあなた奈央のこと知ってるでしょ？ 気絶したらちよっぴりいたずらされることくらい想像に難くないじゃない」

「だから、その性根をたたきなおしてやるって言ってんだ！」

「ここは海よりも深い愛で抱きこんで許してあげなきゃダメよ」

「馬鹿言え！」

「いいから許すの」

「お前は奈央に甘すぎる！」

「その議論は今はしたくないわ」梨紗が突然ぴしゃりと言うものだから、千鶴は驚いた。博愛主義の梨紗がその議論を避ける理由が見当たらないが、どういうつもりだろう。

「くそっ、わかったよ！」力を抜いて弛緩した美奈子を確認して、ふたりは美奈子を解放した。

「梨紗の馬鹿」と誰にも聞こえないように呟いた美奈子だったが、梨紗に睨まれて口をつぐんだ。

「もう奈央のことはいい、次だ！」

説教の終わった三人は美奈子とその前に座らされている哀れなふたりから距離をとってお茶を飲むことにした。

「まずは裕子！」

「は、はい」

裕子はそれなりに緊張していた。いくら目前で繰り広げられた説教が半分お笑いの様相を呈していたとはいえ、自分は責任を感じていたからだ。そう、すべては自分が仕掛けた作戦だからだ。ここまでかき乱れたのはほかにも原因があるが、根底の原因は自分だ。

「お前はいい」

「はい？」

言われた意味がわからず、間抜けな声できき返してしまった。何が「いい」のだろうか。もしかして私のことが好きとか？ あり得る。このド変態部長の美奈子なら。というか彼女はレズではないのか？ しかしレズなら奈央がキスしたくらいであれほど怒ったりしないだろう。だが男を人生から排斥する運動をしたり、玲子を髪というパーツひとつで魅了したりするのだ。やはり

美奈子はレズで、しかも今私に気持ちを持っていて――

「お前はなしだ。もうあっち行っていいぞ」

「へえ？」

また変な声が出てしまった。「いい」ってそういう意味？ 私はいらんってこと？ 必要とされても困るけど、いらんってばっさり切り捨てるってのもどうなの？

自分でもよくわからない不満があるものの、ケンカにならず平和的にやりすごせるのなら文句はないので、裕子は大人しく立ちあがって千鶴のそばに座った。

残るは玲子のみである。

rule.9

「さあ、来たぞ。そろそろお前と雌雄を決するときだな」

雌雄は見ためからも明らかだろうと玲子は思ったが、美奈子がそういう意味で言っていないことは明白だったので黙っておいた。

「このクソ髪フェチの変態野郎が」

ひどい暴言のうえに誤解がたくさん塗り重ねられているが、何より主張しておきたいことが玲子にはあった。

「私、女ですよ」

「わかってるよ。野郎ってのは蛇足みたいなもんだ」

「そうですか」

「でもあとの文句は意味を込めたつもりだ」

要するにとっても怒っているということだろう。これだけ口汚い言葉で罵倒されたのははじめてだ。もちろん美奈子の口からという意味だが。

「まあいいですけど」

「お前は何か？ 怒るという感情が喚起されることはないのか？」

つまりどうしたら怒るのか？ ということだろう。

どうしたら怒るのかだって？

そんな質問、裕子の口からすら聞いたことがない。

それはつまり誰にもきかれたことがないことと同義だ。

だから考えたこともない。

どうしたら怒るだろうか？

「わかりませんが、ひどいこととか傷つくことを言われたら、私も怒ると思いますよ」

玲子は正直に答えた。ただ経験がないので確証はない。

「今、私はかなりひどいことを言ったぞ。なんとも思わないのか？」

「腹が立たないということはそうですね、なんとも思いません」

「おい裕子」

いきなり呼ばれて、ゆっくりお茶を飲んでいた裕子は驚いた。

「は、はい！」

「お前は玲子が怒ったのを見たことがあるか？」

「いえ、ありません。玲子は怒らないんです」

「怒らないなんて、そんな人間がいるか！」

「そうなんですけど、その、ほんとに玲子が怒ったことって一回もないんですよ」

「もうわけがわからん！」

玲子も美奈子の意図がよくわからなかった。なぜ自分を怒らせたいのだろうか。そうすることで何か得るものが彼女にあるのか。

「私もわかりません。美奈子さんは私をどうしたいんですか？」

「知りたいか？」

きいてみて思ったが、それほど知りたくはなかった。しかし「いやべつに」などと言えば火に油だろう。

「はい」嘘をついて話を進めることにする。

「私はな、お前がこわいんだ」

玲子は何も言わなかった。美奈子の独白は続く。

「入部するときの交渉の際、裕子は逃げたがお前は逃げなかった。普通はおそれをなして逃げ出すところをお前は平然としていた。その後、私はお前の普段を仔細に観察した。お前は普通とは違う。だが何が違うのかよくわからなかった。観察を続ければ続けるほどわからなくなった。お前は特殊すぎる。私が言うんだから間違いない。お前みたいな女はほかにいないだろう。だから私はお前のことが知りたいんだ。わからないとこわいからな」

美奈子の独白を聞いて、玲子は頭を掻いた。それを照れ隠しの表れととったのか、美奈子が近づいてきて玲子の肩に手を置いた。

「教えてくれ。もしくは私の目の前から消えてくれ」

玲子はどう答えようか考えた。しかし考えるまでもなくイージーな質問だとわかった。

「じゃあ消えます」

美奈子は衝撃を受けた表情をつくった。どうしたのだろう。肩から手がゆっくり離れていく。

「お前、それでいいのか？」

「べつにいいですよ。もう何も私を悩ませるものはありませんから」

「つまりこれまではあったんだな。それが私の髪だと」

その通りだ。しかし先ほど触ったことで自分のなかの欲求はすべて解消された。

思えば長く続いた欲求だった。こんなに長い期間何かを我慢したことなど生まれてはじめてだろう。欲求を持つことすら稀有な現象なのに、それが持続するとは。どこからこれだけのエネルギーが供給されたのか。そして、達成した途端に「もういい」となってしまうのはどうしてだろう。期待しすぎていたせいかな？ それとも単に欲求が満たされたからか？ いずれにしても、今の自分にはどうでもいいことなのだ。

もう本当に、全部どうでもいい。

唯一、意識していることは、裕子のことくらいだ。

しかし、風が吹けば飛んでしまうほどの意識だが。

「でももういいんです。終わりましたから」

「しかし私は不完全燃焼のまままだ！」

「どうしたいんですか？」

「私にもわからないんだよ！」

「じゃあ気にしないっていうのはどうですか？ 私、本当に、もう全部いいんです」

「だからお前はよくても私はよくないんだよ！」

「それはもう私と無関係です」

「お前という奴は！ 信じられん！」

ばしん。

玲子はまた美奈子にたたかれた。

今度の平手打ちは力が込められておらず、美奈子の不完全燃焼ぶりを玲子も感じた。

「美奈子さん、ごめんなさい」

「くそっ！」

美奈子はテントから出て行ってしまった。残された玲子は頬を撫でて、美奈子の手ごたえを思い出す。頬は少し熱を持っていた。

「玲子、大丈夫？」裕子が近づいてきて玲子に抱きついた。「かっこよかったよ」

どのへんがかっこいいのかさっぱりわからなかったが、裕子が言うのならそうなのだろう。もう考えるのは面倒になっていた。

「さて、どうしようかな」

「そうね、そろそろ帰ろう」裕子が提案する。「もう思い残すことはないでしょ？」

「うん」

ふたりはお茶を楽しんでいた梨紗たちに向き直った。

「じゃあ私たちは帰りますね」

裕子が言うと、千鶴が立ちあがった。「なら私も一緒に帰るよ」

「じゃあ三人で帰りましょう」

「寂しくなるわねえ」梨紗がお茶を片づけながらのんびり言った。

「じゃあねえ」奈央が手をひらひらと振る。

「荷物持たげる」裕子はテントの隅にあった玲子のカバンを肩にかけて、梨紗と奈央に歩み寄った。手を差し出すと、ふたりはそれに応えた。

「じゃあね」

「はい」

「またな」

固い握手が交わされ、三人が笑顔になる。千鶴も優しい表情で見守っている。玲子は首を左右にこきこき振っている。

「美奈子は放っておいていいのかしら」千鶴がふと言った。

「いいんじゃない？」梨紗の口調はじつにのんきだ。本当にどうでもよさそうだった。玲子は少しだけ美奈子を気の毒に思ったが、かわいそうというほどではない。

「お世話になりました」玲子と裕子はお辞儀してテントの外に出た。千鶴もあとをついてくる。

見上げるといよいよ夜の訪れを感じさせる暗色の空だった。三人は急ぎ足で山を降りた。登りではひいひい言っていた千鶴も、一度も休憩をほしがらなかったため、さくさくと下山の足が進んだ。

「楽しいキャンプだったわね」千鶴が道端の石ころを避けながら言った。

「何もしてませんけどね」裕子が笑う。

「ところで玲子ちゃん」

「はい」玲子は千鶴を見た。

「カメラ部に興味ない？」

「そうだよ、一緒にやろう？」

「カメラ部って何をやるんですか？」

「そうね、今日みたいな活動は滅多にないかな。普段は携帯カメラを使ってみんなに意地悪するの」

玲子は考えた。意地悪ってどんなことをやるのだろう。そもそも意地が悪いとできなさそうだが、自分は意地悪ではない。それにたしか携帯が必要だったはずだ。

「大丈夫」裕子には玲子の考えていることがわかるのだ。親友間でのみ発揮される特殊能力みたいなもの。「もう買ってもらうっていう約束はしたんだし。明日にでも携帯見に行こう？」

「いいよ」

玲子は全部ひっくるめて返事をした。裕子の頼みの返事はすべてこの一言だけでいいのだ。それ以外の言葉は必要ない。どうせ、親友だからわかるのだ。

rule.10

合宿初日に退部を表明してその翌日、玲子と裕子は中心街の携帯ショップにいた。裕子は私服。玲子はなぜか制服である。

家に迎えに来てくれた裕子を玲子が迎えると、開口一番こう言われた。

「なんで制服着てるの？」

「起きたら目の前に置いてあったから」

玲子はいつも、着替えるときは一番に目のついた服を着る習性がある。そのためファッションという観点からすると、たまにてんでばらばらな服装で出かけることもある。そのたびに裕子に家にたたき返されて着替えを強要させられるのだが、この習性はなおらない。

「まあいいんだけど。夏休みにまで学校の雰囲気や纏うっていうのが嫌じゃない？」

「べつに」

「ならいいけど」

朝の会話はこんな感じだった。

「やっぱ最新機種がいいかな」

「なんでもいいよ」

きらきりと光で溢れている店内に陳列されている見本ひとつひとつを手に取りながら、裕子は目を輝かせている。玲子にとっては店内も親友の目も同じくらい眩しい。

「これでいいんじゃない？」

玲子は目の前にあった見本を取りあげて裕子に報告した。

「何言ってるの！ これお年寄り用でしょ！」

「お年寄り用の携帯なんてあるんだ」玲子は感心した。

「文字とかがおっきいんだよ」

「ふうん」

「それにカメラついてるやつじゃないとダメなの」

「そうだった」

玲子は手に取った見本を棚に戻す。すべすべしていてとても丸いフォルムだ。石鹸と間違えてしまいそうな魅力があったんだけど。

「これどうかな？」

裕子が持ってきたのはふたつ折りのかくかくした見本だった。玲子は渡されてふたを開いてみる。上部にスクリーンがいっぱい広がっていて、真っ黒な画面に自分の顔が浮かんでいる。とても携帯をほしがっている人間の表情ではない。

「これカメラがついてるの？」

「そうだよ。機能も充実してるし、何よりかわいいじゃない」

かわいい？ どのあたりがかわいいのだろう。玲子にはそういった女の子のセンスが欠落している。こんなかくかくして画面の大きい携帯のどこに女の子の心をくすぐる魅力があるのだろう。トランシーバーのほうがかわいげがあるのではないかと思う玲子だ。

「さっきの丸いやつのほうがかわいいと思うけど」

「だからあれはカメラついてないし、あんなの学校に持っていったら馬鹿にされちゃうよ」

「まあこれでもいいけど」

玲子はおもむろに制服のスカートのポケットに見本を入れた。

「ちょっと、何やってるの！」小声で裕子が叱る。

「いや、どれくらい重いのかなあって」

ポケットに入れたまま、玲子は飛び跳ねてみた。ごつんごつんと携帯がポケットの中で上下するのがわかる。

「まあ、これくらいの重さなら大丈夫かな」

「大丈夫って何が？」

「いや、ずれちゃったりしないじゃない？」

「ずれないわよ！」

玲子は携帯が重すぎてスカートがずれ落ちることを心配していたのだが、裕子に「馬鹿な行動は謹んで！」と怒られて、ポケットから携帯を出した。

「じゃあこれにする」

「よし！」

裕子はすばやく玲子から見本を取りあげて、店員を呼びに行った。残された玲子は外の空気を吸おうと思って店から外に出た。

今日も空には雲ひとつない快晴が広がっている。鳥の声は聞こえない。目の前の大通りを走る自動車のエンジン音と定期的な揺れが玲子の身体を刺激し、自分が街中にいることを思い知らされる。

「今頃みんな何してるのかな」

今も山の中でビバークしているであろう演劇部の面々に玲子は思いを馳せてみた。

奈央は野生児のように暴れているだろうか。

梨紗のお茶はもう底を尽きただろうか。

美奈子はまだ自分に対して怒っているだろうか。

いろいろ考えてはみたが、やはり一切はどうでもよかった。

「夏休みが終わるまで会うこともないだろうな」

会いたいとも思わない。会いたくないとも思わない。呼んでくれれば出向いてもかまわないし、あっち行けと言われたらどこへだって行くだらう。自分はすっかりもとに戻ってしまったようだ。

「ちょっとだけ恋しいな」

玲子は梨紗の淹れるコーヒーが気に入っていたのだ。学校であれほどおいしいコーヒーが飲めたということは、かなり幸せな部類に入るのではないかと玲子は分析している。これからは自販機で売られている大量生産の鉄くずに詰められたコーヒーともっとも距離が近くなるが、あんなものに金を使うくらいなら玲子は小銭を全部坂道から転がしてやっても構わないと思っている。構わないだけで本当に実行したりはしないだろうが。

うしろで自動ドアが開く気配がして振り返ると、裕子の怒った顔があった。

「もう、何してんの！ 契約者がいないと手続きが進まないでしょ！」

また怒られた。玲子はへこむでも反発するでもなく、なぜか少し微笑みを湛えて店内に戻っていった。

rule.1

玲子の夏休みはそれなりに充実していた。

毎日のように裕子が遊びに来てはおしゃべりを尽きることなく繰り返したり、街に出て買い物につき合わされたりした。「アヤ」でコーヒーを飲む日があれば、和風喫茶「さよなら」で抹茶オレを飲む日もあり、「フラン」でガラスケースに入ったケーキを眺めるだけ眺めてそのまま出ていくというひやかしの日もあった。いずれも裕子が率先しての行動である。玲子は手を引かれてついていっただけだ。

もうすっかりもとの暮らしに戻った。

玲子がいて、そのとなりに裕子がいる。

玲子は何事にも無関心で、裕子が引っ張って連れまわす。

ふたりの友情はかたちを変えず健在だった。

夏休み最後の日、「アヤ」で裕子は言った。

「ずっと続けばいいのにね」

「ずっと夏休みだったらおこづかいがなくなっちゃうよ」

「そうじゃなくて」

「ずっと昼間だったらいつ寝ていいかわからないよ」

「ああそうですね」

「ずっとこのままだったら」

「だったら？」

玲子はうーんと考えて、裕子を見て笑った。

「べつに嫌じゃない」

玲子の笑顔が、裕子にとって何よりうれしいものだった。

二学期は加速度的にすぎ去っていき、玲子が携帯の使い方に悪戦苦闘しているうちに文化祭がやってきた。

玲子たちカメラ部は、上級生たちが夏休みに適当に撮影した自然の風景をパネル展示として、教室に個展を開いていた。玲子と裕子が顔を出すと、受付の席に千鶴がひとりで座っていた。

「お疲れ様です」裕子が声をかけると、千鶴はにっこり笑って受付の中にふたりを招いた。ポットのお茶をふたりに勧めてくれた。梨紗のには遠く及ばない味だが、そろそろ肌寒い校内を歩いてきたふたりにとっては温かいお茶はおいしく感じられた。

「どうして千鶴さんが受付やってるんですか？」裕子がきいた。

「なんだか押しつけられちゃって」

「部長の権限で押しつけ返したらいいじゃないですか」

「それが、その、権限ってのが最近弱くなってきてるの」

「ええ？ どうしてですか？」

「じつは、私も、その」

「まさか」裕子の顔がずっと青ざめていく。玲子はお茶を頬に含んでふくふくしている。

「いや違うのよ。うーん、違わないんだけどそうじゃないの」

煮え切らない様子の千鶴を横目で観察しながら、玲子はなんとなくあたりをつけた。自分にわかったということは、裕子にもわかっているのだろう。

「よかったじゃないですか。でも困りましたね。どんな弱みを握られているんですか？」

やはり裕子にはわかっているようだ。

梨紗の件と違って人には迷惑のかからない交際なのだろう。つまり、外で彼氏ができたというわけだ。しかし、権力の衰退が進んでいるということはつまり、内部の裏切りにあったということで、そのリークをおそれているのだ。だからこんな誰も来ないような教室の受付に座らされているのだろうと玲子は推理した。

「たいしたことじゃないんだけど、ばれるとちょっと面倒で。もう三年だし、内申書も気にかけないといけないから目立つ行動はしたくないのよ」

内申に響くとは穏やかではない。世間的には悪行でなくても女子高生的には破滅の行為の類だろうか。そうやって闇に葬られてきた事件は数知れない。

「それじゃ仕方ないですね」

裕子はこれだけで全貌を把握したようで、千鶴への質問をやめた。玲子も一応憐れみの視線を千鶴に向けてみた。

「玲子ちゃんったら、そんな目で見ないでよ」

「いや、嫌味じゃないんですよ。ただいろいろ苦労されてるんだなあって」

「まあたいへんよね。でもそんな暗い話はいいのよ。文化祭なんだから、こんなところにはいなくてもっと遊んできなさいよ」

千鶴の言葉に押し出されるように玲子と裕子は教室から出た。

「千鶴さんもたいへんねえ」裕子は廊下を歩きながら言った。

「そうだね」

「私たちもがんばらないと！」

「何を？」

「彼氏よ！」ぐっとこぶしを握って決意の表情で裕子は言った。

「ああ、それね」

「とりあえず文化祭巡りから！」

「うん」

巡ってはみたものの、男の姿は校内にあまりない。この場合の男とはつまり、そういうクオリティを備えた男である。手をつけられないだろう問題外の輩は除外してカウントしている。裕子はあちこちに目を配らせているが、玲子は露店の食べ物しか見ていない。ふたりの組み合わせは、つまり、花と団子なのだ。用途が違う？ そんなの知らない。

歩き回っていると、掲示板のところに出た。その向こうでは家族連れが金魚すくいをやっている。小さな男の子がわんわん泣いていた。おそらく金魚すくいに失敗したのだろう。あるいは金魚がこわいのか。

微笑ましい光景に目を奪われていると、裕子が「ねえねえ」と袖を引っ張ってきた。

「これ見てよ」

裕子が指さす先を見ると、掲示板に貼られた一枚のポスターがある。

それは演劇部のポスターだった。

～超女性至上主義～

『社会に出て男を見下そうと目論見る先進気鋭の女性たちに告ぐ。集え、我がもとへ！』

連日午後四時より、体育館で上演。あなたのご来訪をお待ちしております

じつに短い文章がでかでかとA4用紙に印字され、適当な背景のうえで踊っている。おそらく美奈子が文章を考え梨紗が校正し、奈央があちこちに貼ってまわったのだろう。久しぶりに演劇部のことを考えてみたが、すらすらと情景が浮かぶことに玲子も自分で驚いた。

「玲子、これ見たい？」裕子は校舎の壁にかけられている時計を見る。四時十分前だ。

「いやべつに」

「見たくないの？」意外な返答だったため、裕子はもう一度きいた。てっきり興味を示すと思ったのに。

「裕子、気になるの？」

「いや、私はどうでもいいんだけど」

と言いながら、じつは少し見てみたい裕子だった。美奈子の近くに玲子が寄って行くのは業腹だが、演劇の観賞という行為自体が新鮮で、純粹にエンターテインメントを楽しむ目的として興味があったのだ。

「じゃあ行こうか」

「そうね」

ふたりは体育館に向かった。

rule.2

体育館内は想像以上に満員御礼な様子だった。床全体に緑のビニールシートが敷かれてそのうえにパイプ椅子と長椅子がところ狭しと並べられているが、席はすべて埋まっており、ふたりは立ち見を余儀なくされた。まわりにも多くの立ち見客の姿がある。

「なんでこんなに混んでるのかな」裕子は玲子の耳元でささやいた。

「さあ」玲子にもさっぱりだった。

なぜこんなにも盛況を見せているのか。よく観察すると客のほとんどはこの学校の生徒ではない。外からの来訪者だ。判断の理由は制服を着ていないからで、私服の女性が多い。男性はまったくといっていいほど見かけない。劇の誘い文句があれだから、男性は来にくいのだろう。

客層は学生から大人までさまざまである。小さな子供を連れた保護者の姿も散見される。皆様に熱のこもった表情を見せており、期待に胸を膨らませている。そのためか、体育館内は外との気温差がかなりあって暑いくらいだ。

あまりの熱気にふたりは上着を脱いで抱くようにして手に持った。ブラウスの下が汗ばむほどの暑さだ。これはどう考えても暖房を意図的に入れているのではないかというくらいの気温である。人が集まっただけではここまで温度はあがらないだろう。

「暑すぎだよね」裕子の額には汗の粒が浮かびはじめている。

「うん」

ブザーの音が会場に響き渡った。

ざわざわしていた会場が水を打ったかのようにしんとする。映画館の上映前みたいな景色だ。

アナウンスの音が聞こえた。知らない女の声だ。

「これより演劇部による『超女性至上主義』の演目をはじめます。なお、劇中に出演者が皆様に声かけをする場面もございますが、どうか好意的なご返答をよろしくお願いいたします」

そんな演劇あるだろうか。もし宝塚の舞台から花形スターが観客に問いかけをしたらパニックになるだろうが、こちらではどうだろう。観客が女性のみという点では宝塚と近い気もする。

「それでははじまります」

ふたたびブザーが鳴り響き、舞台の暗幕があがっていく。場内の視線が暗幕の向こうに注意を向ける。ふたりも目を細めながらはるか遠くの舞台を見つめた。

玲子と裕子は校内に設置されたベンチに座って露店で買った豚汁を食べていた。時刻は午後五時半。外の空気はいよいよ刺すように冷たい。豚汁から立ちのぼる白い煙が目前でくゆっている。

「明日ももう一回見ようね」裕子が里芋を口に放り込んで汁をすすりながら言った。

「うん」玲子はすでに三杯目である。

演劇のキャストは三人だけかと思いきや、全部で十一人もいた。といっても三人以外はセリフが少ない端役だが、あれらエキストラはどこから連れてきたのだろうか。この学校の生徒ではない。なぜならどう見ても皆成人していたからである。年頃は二十代前半ほどだろう。それぞれ役どころが大学生だったり社会人であったりしたので不自然には見えなかった。

劇の内容はむかし玲子が部室で聞いたものとほぼ同じだった。詳細はストーリーの展開が少し改変されていただけである。以下のような話だった。

美奈子が高校生という立場で『超女性至上主義』というブログをはじめた。ブログ上に美奈子は自らの想い、つまり男性不要論を極端にしたものを展開し、ブログはたちまち人気を博して有名となる。よって劇の序盤はほとんど美奈子のひとり語りというスタイルであった。

ある日、美奈子のもとにメールが届く。それは他校の女子高生である梨紗からだった。ブログでのあなたの想いにたいへん共感したので、一度お会いしてお話したいとのこと。ふたりは喫茶店「アヤクラ」で顔を合わせ、両者がじつに男が嫌いであるという接点をもとに意気投合する。そして、梨紗から持ちかけられた提案は、美奈子の夢を現実のものへと導いてくれる第一歩だった。

美奈子のブログの人気はウナギ登りに続いていき、ついには表面化するほどに有名となる。また美奈子と梨紗の水面下での活動もそれに従いグローバルに展開されてゆき、ついには女子高生を対象の中心におおなるカリスマとしてのぼりつめるようになった。

ふたりの仕掛けは社会現象となり、全国の女子高生が男を必要としなくなったため、男子の童貞率が急上昇、彼女を失い、女子にゴミ扱いされるようになってやけを起こした男子高校生が全国各地で大暴動を起こし、連日のニュースで話題を呼んだ。

その影響はついに女性全体にまで普及し、男子高校生だけでなく男性が全国で肩身の狭い思いをする時代が到来した。離婚率は九割を超え、同性愛が一般化し、精子バンク会社の株価が急上昇した。さらにその動きは政府機関のなかに送り込まれたスパイ女性議員の働きにより国を動かすこととなった。男性の人権が軽視され、人間とは、女性とその他彼女たちに隷属する生き物という定義に塗り替えられてしまい、男性は完全に社会から追い出され、日本は女性だけのものとなった。さらにこれが世界各地へと発信され、締めくくりにはこの世は女性のものであるという結論を持って幕がおろされた。

美奈子の独白には異様なリアル感があり、彼女に提案を持ちかけたときの梨紗の笑顔は会場すべての女性の心を動かし、奈央はあくせくとセリフのある脇役をひとり何役も演じていた。展開に多少無理があるだろうと玲子は思ったが、有無を言わず進行させる美奈子の迫力が妙な説得力を帯びていて、観客は瑣末なことにはさほど疑問を抱かなかっただろう。

玲子は皆の熱の入った演技を見ても何も思わなかった。ただ、展開やセリフの正当性などを客観的に評価しただけだ。終わってから豚汁を買うまで、裕子がずっと劇のことについて熱く感想を語っていた。彼女にとってはけっこう刺激的だったようだ。

豚汁を食べ終えて器をゴミ箱に捨て、裕子が終わるのを待っているとうしろから声をかけられた。

「よう」

振り向くと、そこには演劇部の面々が大集合していた。エキストラも一緒である。

「久しぶりだな、玲子」美奈子が笑った。かなり機嫌がいいようだ。

「どうも」玲子はぺこんと腰を折った。

裕子も気づいて慌てて豚汁の容器を脇に置いて立ちあがる。「こんにちは」

「玲子ちゃんに裕子ちゃん、久しぶりねえ」

「よう、おふたりさん！ 元気にしてたかい？」

梨紗と奈央も相変わらずである。

「はい、いつも通りです」

「こちらは協力してくれた大学の先輩方だ」

玲子と裕子は揃ってお辞儀した。「かわいいわねえ」という声がちらほら聞こえる。彼女たちからすれば、若い後輩というだけでかわいく見えるのだろう。

「もちろん見たよな？」美奈子が脅すように言った。

「はい、見ました」裕子が代表して答えた。「とっても面白かったです。それで今も玲子と明日も見に行こうねって言ってたところだったんですよ」

「それはよかった。お前らふたりとも、今からヒマか？」

「え？ えーっと」

裕子は時間をつくって高速で頭を回転させる。なんらかの誘いとあっては内容をきいてから断るのは難しい。またどんな内容かわかったものでもない。ここは適当にでっちあげて玲子の手を引いて避難するのが正解だろう。

「いや、私たちこれからカメラ部の所用があるんです。もうそろそろ行かないと」

美奈子は顔を近づけてきて裕子を睨む。嘘を看破しようという目線だ。裕子は表情に出ないようになるべく平静を装ってとぼけるふりをした。

「そうなのか、それは妙だな」美奈子は腕組みをしてうーんと唸る。

「なんでですか？」

「いや、千鶴はそんな所用はないと言っているぞ」

「え？」

エキストラのうしろから、しずしずと千鶴が現れた。

「裕子ちゃんったらあ」千鶴が甘い声を出す。裕子は憎らしい視線を千鶴にぶつけた。

「嘘はダメねえ」

「そんな美奈子さんにかかればすぐバレるんだからな！」

梨紗と奈央が後押しする。裕子は苦しい立場に置かれて、助けを求めるように玲子を見た。その表情からは何も読み取れない。つまり、何も考えていないということだ。

「嘘はいかん。今から先輩方と一緒にささやかな打ち上げがあるんだが、お前たちもどうだ？」

裕子は美奈子たちの様子から何かを感じ取った。自分でもよくわからないし、うまく説明もできないのだが、ついていってはいけないと第六感がアラームを鳴らした。はじめて演劇部の部室を訪れたときとよく似ている。あのときほど鮮烈な警戒音ではなかったが、同種類のものだと裕子にはわかった。

内容を聞いてしまっただけでは断りづらい。しかも嘘までついて言い訳しているのもはや退路もない。八方塞がりとはこのことである。

裕子は玲子の手をとった。力を込めて自分たちが困った状況にあることをアピールする。自分たちと言っておきながら、じつは困っているのは裕子のみで玲子がどのように考えているかは考

慮されていないのだが、裕子にとっては同じことだ。裕子の悩みは玲子の悩みだからだ。

手がぎりぎり締めつけられ、目前には演劇部の面々と大学生の方々。さてどうしたものかと玲子は考えた。「基本的なスタンスとして誘われたら断らない」を掲げている玲子にとっては、どうすればよいか明確な状況だが、親友が手で訴えてきていることを考慮に加えるとプライオリティが発生し、少し面倒になる。つまり選ばなければいけないということだ。

自分か、裕子か。

どっちでもいいと今まで逃げてきたが、この半年間の高校生活で学んだ教訓を生かして玲子は答えを出した。

玲子の答えは、裕子の手を引いてその場から走り去ることだった。

「あ、ちょっと」手を引かれる裕子はびっくりしながらも徐々に歩幅を合わせてくる。うしろで美奈子たちの声が聞こえた。しか玲子は振り返らない。そんな必要ないからだ。

玲子と裕子は颯爽と校内を走り抜ける。陰ってきた夕日が斜めから校舎を照らし出し、美しく朱色に染めあげている。ほうほうでは露店が片づけの準備をはじめており、文化祭初日も終わりに近づいていた。

「ちょっと玲子」走りながら裕子は笑ってきいた。「あんなふうに露骨に無視しちゃっていいの？」

「べつにいいじゃない」なんでもないように玲子は答えた。

「ねえ」

「うん？」

「なんで逃げたの？」

「裕子が逃げたいって言ってきたんでしょ？」

「そうよ」

「だからじゃないの」

「そっか」

玲子とはなりを走る裕子の顔を見た。どうにも変な表情をしている。顔面で土砂崩れが起こって再起工事中みたいな。急に走ったから疲れているのかもしれない。

校門を出て坂道を一気に駆けおりたところでようやく止まり、ふたりは息をついた。急に走ったものだから、心臓から肩にかけてきりきりと痛んだ。裕子は胸を抑えながらぜいぜい言っている。玲子もいささか疲れて膝に手を当てて屈む格好をとった。

胸に手を当てながら、裕子は泣きそうだった。疲れたからではない。今手を当てている胸の中にこだまする玲子の言葉が裕子の涙腺を刺激するのだ。ぐっと堪えて涙を飲み込み、顔をあげるとそこには玲子の不思議そうな表情があった。

玲子は自分を選んでくれた。それが、それを意味する言葉がうれしかった。

「ねえ、疲れたから『アヤ』行こうよ」裕子が提案する。

「いいよ」

ふたりは歩き出した。手をつないで。二度と離れ離れにならないように。

(了)

超女性至上主義 -Women rule the world-

<http://p.booklog.jp/book/27653>

著者 : Kyoji

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/ireadforpleasure/profile>

発行所 : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/27653>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/27653>